
色んなIslands

vaz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色んなIslands

【コード】

N3062Q

【作者名】

v a z

【あらすじ】

ある戦争の被害にあったエグレサツタ村の少年ロサイル。その戦争の経緯には恐ろしい物があつた。現世界の支配者教皇は、まずしい村や里を破壊して発展した町、すなわち自分の町にした。それはどんどんエスカレートしていき、世界のほとんどが教皇の物になつてしまった。そんなのが許せなかつたロサイルは1人旅に出る。教皇の汚い手に汚されてしまった、途中で出来た仲間達とともに世界を変えるために……そしてもうすぐ、世界をかけた大戦争が始まるうとしていた……

第1話 笑顔と悲しみ（前書き）

初めましてvazです。

頑張って書きました。ぜひご一読ください。

第1話 笑顔と悲しみ

この村の名前は、エグレサツタ村。北にあるとても寒いところだ。数年前、行われたドイノール戦争の影響により、人々は苦しんでいた。

そんな村の少年、ロサイルとバレンアは、戦争で両親を亡くし、貧しい生活を送っていた。

「ばくん！」

「なんだバレンア……こんな時にまでマジックやってんのか……」

「当たり前じゃん！マジシャンになって皆に笑顔をあげる！それが夢だからな！」

「のんきでいいなあ……お前は……」

「……なあロサイル……」

「ん？どした？」

「来週さ、船復帰してでるじゃん。……その時旅立とうと思ってるんだ」

「……そうか……それがいいよ」

そうして一日を終えた……

あつという間に一週間が過ぎ、バレンアが旅立つ時が来た。

「じゃあな、バレンア。向こうでも元気にやれよ」

「はは、分かってるさ。元気じゃねえと皆を笑顔にできねえよ」

「……それもそうだな」

ポオ~~~~ン。

「おつ、船来たぞ」

「うん、それじゃあねロサイル」

「ああ、またな」

そして、船が出港した時大声でバレンアが……

「ロサイル……」

「なんだ……？」

「絶対皆を笑顔にするよ……！子供達やお年寄り、そして……この村も……！」

「……頼むぞ……！！！」

そうして二人はわかれた……

そしてこの後エグレサツタ村で大事件が起こる……

第1話 笑顔と悲しみ（後書き）

チラ見でも見てくださった方ありがとうございました。

2月12日訂正。

サブタイトルが漢数字になってました。
すいません。

第2話 やって来た、異端審問官（前書き）

1話が結構短かった分、頑張りました
ご一読ください。

第2話 やって来た、異端審問官

バレンアが旅立った次の日……

「ふあああああ〜」

「・・・おはようを言う相手がいない……」

「それって結構虚しいもんだな〜」

普通にご飯を食べて、普通に一日が過ぎると思っていた。

……その日の夜……

「んん〜」

あまりの外の騒がしさにロサイルは、目を覚ました。

「なんだ？あの集団は……？」

見た感じ異端審問官いたんしんもんかんが二人、それと数え切れない数の僧侶がいた。

何故かロサイルは、嫌な予感がした。

僧侶達は、港を塞ぎ、異端審問官の二人は教会へと行った。

それをロサイルは覗いていた。

教会は、この村では村長の家と繋がっている。

ロサイルは、村長と異端審問官の話を盗み聞きした。

「……さて、話とは何ですか？異端審問官さん」

「ドイノール戦争についてだ」

「はあ……」

「あの戦争で敗北はエグレサッタ村だ。向こう、ドイノールから、賠償金の請求が来ている。その金額は……」

「ちよつと待ってくれ！！あれは、ガルナーダが劣りにこの村を出したんだ！！俺達が払う義務は無いだろう！！」

「反発する気が……？」

「そうなるな」

「強行手段は、好きじゃないんだけどね……これは国からの命令だ。

指示にしたがってもらおう」

「何回も言わせるな」

「強行手段決定だな……」

こうして第二の戦争が始まった……

第2話 やって来た、異端審問官（後書き）

頑張りました。ぜひご一読を！！！

p.s.

妹にパソコンとられました。すいません。

2月3日訂正

第3話 燃えた左手（前書き）

小説書くのって楽しいです。

読んでくれている方、本当に感謝しています。

第3話 燃えた左手

異端審問官は魔法陣を描き、村に炎をあげた。

ロサイルは、それに気づくのが遅かった。

村は、たちまち炎上する。

「皆！港だ！港から船で……」

村長が必死に声を出す。しかし、港には、百人あるいはそれ以上の僧侶がいる。

「逃がすな！！」

ロサイルは、木々の茂みに隠れていた。

まただ……またこんな戦争が起きてしまった。

ごめん……という気持ちでいっぱいだった。

バレンアや両親に何度も謝った。

村は全焼し、村人もおそらくロサイルただ一人だ。

茂みからこっそり出て、逃げるつもりだった……が！？

ガサッ

しまったっ。心の中でロサイルは言った。

「誰だ！？」

「……くそっ」

「まだ生き残っていたのか……覚悟はいいな？」

そう言つて、異端審問官は、魔法陣を描いた。

炎の球がこちらに向かって飛んでくる……

バンッ！

綺麗に左手に命中した。しかし、ロサイルは、熱さを感じなかった。炎上する左手は、ジェットとなり、ロサイルは海の方へ飛んでいった。

「……何だ？あれは？……」

「けど、死ぬよね……あの子……」

「おそろくな。もう帰るか。こんな村いても意味がない」

「そうね。帰りましょう」

ロサイルは、水中で思った。

あつ俺死ぬな……短い人生だったな、楽しかったような、楽しくな
かったような……

意識が薄れていった……

そんな時、一筋の光が見えた……！

第3話 燃えた左手（後書き）

いよいよ冒険スタートです……
頑張って書きたいと思います！

第4話 南のアイランド(前書き)

いよいよ新キャラです。 & 冒険です。
よろしくお願ひします。

第4話 南のアイランド

「ん……」

目が覚めるとそこは、何か豪華な感じの部屋だった。

「ここは……」

「目が覚めましたか？」

隣にいたおばあさんが話しかけた。

「あの……ここは？」

「ここは、オーシャンアイランド。島国一の都会かね。南にあるから、結構温暖だよ」

「はあ……」

それ以前に俺は何でこんな所にいるんだ。夢でも見てるのか……

「あつ、目が覚めましたか」

一人の女性が入ってきた。

「いやあくびつくりしましたよ。海に人が沈んでるんですもんね」

「あなたは……？」

「私は、リラ・デ・シヤナーダと言います。オーシャンアイランドの皇女をしています」

はは、だからこんな豪華なとこにね

「それで、あなたは？」

「ロサイル・クロウズです。助けただきありがとうございます。ごさいます」

「エグレサッタの海に沈んでいたのですが、大変だったでしょう。

あんな事がありましたから。何か疲れているようですし、風に当たってきてはいかがですか？暖かくて気持ちいいですよ」

「……そうさせてもらいます」

と言ってロサイルは、外に出た。

夕暮れの時間、ロサイルは、港にいた。

「しっかし、今日は色んなことあったな〜」

深夜には、異端審問官に炎の球をぶつけられた。

その後、燃えた左手がジェットとなった。

その影響で、海へと沈んだ。

そして、リラという人に助けられた。

一日とは、思えない長さだった。数学の授業のような感覚だ。辺りはすっかり夜だった。

「このまま帰ってもあの人達に迷惑かかるだけだしな〜」
というわけで、野宿決定。

しかし、温暖とはいえ、冬の夜はさすがに肌寒い。

「そうだ！」

ロサイルは、薪に手をかざしてみた。

……何も起きない。ロサイルは、あの時の炎がでるかもつ、と思っただのだ。

「何だよ〜か〇は〇波みたいにでないのかよ……」
そんな寒いままゆっくりまぶたを閉じた……

第4話 南のアイランド（後書き）

やっとファンタジーになってきました！

第5話は、ロサイルの持ってた剣がくだったりします。
よろしくお願いします。

第5話 海賊襲来(前書き)

なんかファンタジーストーリーになってきました。
グダグダですが、どうぞ……!!

第5話 海賊襲来

目が覚めた時は、もう朝だった。

「はあ、もう朝か……」

と言って起きると真横にリラがいた。

「……ロサイルさんこんな所にいたんですね。心配したのですよ」

「……心配？」

「そうですね。いつまでたっても帰ってこないのですもの。さあ、ひとまず城に帰りましょう」

「戻れません」

「えっ？」

「迷惑がかかるばっかしだし、こうなったのも俺の弱さだったので」

「……」

「助けてくれた事には本当に感謝しています。ありがとうございました」

そう言った後、ロサイルは礼をして、その場所を去った。

その後、ロサイルは路地裏にいた。

「ああ言ったものの、これからどうすっかな」

船に乗る金はない。かといってリラの所にも戻れない。

「……一生野宿か……（笑）」

「笑えるかー！ー！」

一人で何やってんだろう……

その夜……ってまたこのくだりか。

「海賊だー！ー！」

「海賊！？」

○わらの○○だろうか……いやそんな所じゃない。

ロサイルは、路地裏から出て海賊が向かった方を見た。

その場所は……

「リラ皇女のとこの城じゃねえか……」

ああ……俺は何回戦争を見るんだろう。

ドイノール戦争時にお父さんに渡された剣を強くにぎった。

「あの人は、恩人だ……」

ロサイルは、城に入ることを決心した。

そして勢い良く走り出した。

かくして、南の楽園オーシャンアイランドで戦争開幕！

第5話 海賊襲来（後書き）

結構ベタな話ですが、ご了承ください。
読んでくれた方ありがとうございます。

第6話 突入！オーシャン城（前書き）

何やら、おっさん出てきます。

おっさん好きにはたまらない？

第6話 突入！オーシャン城

バンツッ！！

ロサイルは、勢いで突入した。

そして、リラ達のいる部屋へと向かう。

「確か……この階段を上がって……」

田舎育ちのロサイルには、こんな迷路だ。

「あれ？ここ会議室……間違えたっ！」

すぐさま戻る。

そうしてる間にも戦いは悪化していく。

「地図とか無いのかな……」

無い。きっぱり言う。

しばしロサイルしょんぼり……

その頃王宮入り口付近では……

「なっ何のつもりだ！！」

「へへへ……」

その海賊は、異端審問官達と同様、魔法陣を描いた。

その魔法陣から、炎の球がでて、飛んでいく。

おっさん（つてか王）に命中！！

おっさん（つてか王）はその場に膝をついた。

「ははは……天下のおっさん、つてか王はこんなものか……」

「はあ……はあ……」

バタリッ……

おっさん（つてか王）は、倒れた……

「あゝここは、厨房……」

ロサイルは、まだ迷っていた。

「何だこれ……円周率最後まで出すくらい難しいよ……」
もちろん、そんなことは無い。

「お主何者だ！」

おっさん(つてか兵士)が話しかけてきた。

「あつ、ロサイルです。王宮に行きたいんですけど……」

「王宮は、この階段を一番上まで行けばすぐだ」

意外と簡単だった。

「それより、お前何でこんな所にいるのだ」

「え〜つとそれは……」

「今は大変なんだ。なんたつてリラ皇女がさらわれたのだからな！」

「えっ!？」

その時一瞬、時が止まった。

だが、何んとしてでもリラを助ける!という決心はもうしている。

まず、王宮に行つておっさん(つてか王)と話をしておこう。

そう思った。そしてロサイルは、王宮を目指した。

第6話 突入！オーシャン城（後書き）

今回、僕にしては、ながく書きました。
よろしくお願いします。

第7話 炎の謎（前書き）

あの左手再び！

どーぞー！

第7話 炎の謎

ロサイルは、おっさん（つてか兵士）に言われた通り、階段を駆け上がった。

そして、みえた光景は……

王宮入り口付近で、戦いが行われていた。

「えっと、王はどこに……」

はつきり言ってロサイルは、王を見たことが無い。だからおっさんって言わない。

「……あの人が？」

その人の元へ行った。

「あの、すみません。あなた王ですか？」

「ああ……そう……だ……が……何……だ……ね……」

「僕は、先日リラさんに助けていただいたロサイル「クロウズです」

「ああ……あの……少……年か……」

「リラさんは僕にとって恩人です。だから、リラさんを助けに行かせてください」

「迷ってても……しょうが……ない……な……頼むよ……」

「はい！」

ロサイルが王から離れた時……

「へへへへ……そうは、いくかよ……」

さつき王と戦っていた海賊だ！！！！

その海賊は魔法陣を描き、炎の球を作った。

ロサイルは、剣を抜いて戦闘態勢になった。

飛んでくる炎の球にロサイルは、突っ込んでいった。

そのころ、オーシャンアイランド付近の小さい島にて……

「ここは……？」

「ふふふ……ここはオーシャンアイランドの近くの小さな島の洞窟だよ……」

そこにあつた姿は、リラと海賊のリーダーだった。

「何のつもりですか……」

「大丈夫だよ。財宝を王が持って来たらね」

「……………」

ロサイルは、飛んできた炎の球を真つ二つに切り裂いた。

「へえ〜結構やるね〜」

「……………」

「へへへ……だったらこれはどうだ？」

そう言うと海賊は、さっきよりかなり大きい炎の球をつくった。

（やばい……避け切れない……）

それでも、ロサイルは懸命に避けた。

しかし、左手に命中した。

すると、左手に熱さを感じない炎が発生した。

（また……これだ！異端審問官にやられた時のと同じだ！）
すると、横にいた王がびっくりした顔で、その手を見ていた。

また発生した左手の炎……
その手について、王が最後の力を振り絞って話す！

第7話 炎の謎（後書き）

読んでくれた方ありがとうございます。
次話もよろしくお願ひします。

第8話 Fire Hands (前書き)

なんかいつも、短くてすいません。

頭で考えているのをしっかり書いてるのですが……

今回もよろしくお願いします。

第8話 Fire Hands

「そ……それは……」

「王。どうかしましたか？」

「お主……よく……聞け……それは……は……炎……の……手……」

「炎の手？何だそれは？」

「急速……な……高……温……に……反応……」

「バタリッ……」

「おい！王！！」

「リラを……たの」

「……王」

こうして、王は息をひきとった……

「……言いたい事はあんまり分からなかったけど……とにかく、俺はお前を倒す！」

「へへへ……やれるもんならやってみな……」

そう言うのと海賊は、こちらに向かってきた。

ロサイルは、剣を横にして、左手で支えるような形で攻撃を防いだ。すると、剣に炎が引火し、剣が炎をあげた。

「おおっ。何だこれ？流れる的に炎の剣か」

「なっ……」

そうと分かったロサイルは、剣と左手を後ろに向けた。

二つの炎がジェットとなり、目に見えぬ速さで海賊の後ろをとった。

「しまっ……」

「た」を言う間もなく、ロサイルは斬った。

「はぁ……結構楽勝だな」

そっぴい残して、城を出た。

一方、小さな島にて……
「結局……財産目当てなのね……」
「それを狙うのが海賊だろう。はははは……王もこんなところまで来れないだろう」
「否定はできないね……もう年だし……」
「何だ……案外素直じゃねえーか……はははは……」
「お父さん……」

「はあ……城出たぞ……」
(本当に迷路みたいな城だな……)
「よしっ！行くか！」
「ちよつと待つておくれ!!」
呼び止めたのは、助けてくれた時、隣にいたおばあさんだった。
「え〜つとロサイル君……だったかな？」
「はい」
「今からリラ皇女を助けに？」
「はい。そうです。あの人は恩人ですしね」
「そっか……じゃあこれを……」
「この本は？」
「リラ皇女を見つけた時、これを彼女に渡してください」
「はい……分かりました」
剣の先の炎を消し、本を受け取った。
「じゃあ……いつてらっしゃい！」
「行つてきます！」
おばあさんと別れ、ロサイルは、港を目指した時あることに気がついた。

「そついや……リラ皇女つてどこにいるんだ？」

港の人に聞いてみる。

「ああ……それどころじゃなかった……なあ……」
なんて使えない漁師なんだ……海が恋人だろ！

あとの方法は……

「海賊をぼこぼこにしてはかすか……」

あの海賊にしよう。

「とりゃあー！」

「うわーー！」

ロサイルは、なんなく勝った。

「で、リラ皇女はどこに？」

「あ……あつちの島です……」

「どうも」

悪いな海賊よ。でも傷ついたのは漁師のせいだ。

「あの島か……」

本を持っている為、片手の炎で飛んでいかなくはならない。

「バランス無いけど……行きましよう！」

かくして、ロサイルは飛び立った。

そして、オーシャン城の戦いもクライマックスへ！

第8話 Fire Hands (後書き)

読んでくださっている方感謝しています。
ありがとうございます。

第9話 決戦！小さな島！（前書き）

色々戦い増えて楽しくなってきました（個人的に）
どうぞ

第9話 決戦！小さな島！

ロサイルは左手のジェットを使い、海の上を飛んでいた。

「バランス悪っ！」

なんやかんやで小さな島についた。

「はあ……本当に近いな。んでリラ皇女はどこに……？」

小さい島とはいえ、木々がおいしげっているこの島。

見つけるのは、意外と困難だ。

ガサガサッ！

「そこかっ！」

猿だった……

しばしロサイルしょんぼり……

その頃、オーシャンアイランド……

「おりゃー！！」

「うりゃー！！」

「気持ちいい！」

一人変態がいたがほっておこう。

戦いは、終盤にもつれこんでいた。

「はあ……ロサイル君とリラ皇女さえいてくれば……」

戦いは、圧倒的に海賊が優勢だった。その時！！

「俺が相手だっっ！！」

一人の男が立ち上がった……

「ここでもない……」

「ここでもない……」

「ここも違う……」

「いったいどこにいんだよー！」

ロサイルはまだ探していた。

「ぜえ……ぜえ……」

勝手に疲れている。

「くっそ〜リラ皇女め〜」

恨むのは海賊の方なのだが……

「ん？この洞窟……」

(いる！この感じは……いるぞー！)

happyな気持ちで洞窟に入って行った。

しかし、最後までそうは行かなかった……

俺が相手だ！！と言って出てきたのは、さっきの漁師だった。

「あ……あなたは……」

「ただいま！ばあちゃん！」

「キルト！」

さっきの使えない漁師は、ここに来たばかりだったから、状況を知

らなかったただけだった。

「おかえり……キルト……」

「八八八……5年ぶりだな……しっかしえらい事になってるな」
「なんだ？お前は？？そんなに戦いてえなら相手になってやるよ」
「近くにいた海賊が話しかけてきた。」

「じゃあ、お願いしようかな」

「いつとくが、おれは副船長だ。一筋縄じゃいかねえぞ……！」

「いいね、その方がやりがいがある」

そうして、オーシャンアイランドの戦いも最終局面へ……！！

「いや、でつかい洞窟だな」

この洞窟は、分かれ道などなく、一本道だった。

「ん？もうすぐ一番奥かな？」

ロサイルは、大きい広場のようなところに出た。

「誰だっ……！」

「は、い私ロサイルです……あれ？」

ロサイルは、寝てないせいか、変なテンションだった。

「はははは……礼儀正しいじゃあないか……坊主……」

「だっ……誰だ！」

「こつちだよこつち……ははは」

「あなた……何者だ？」

「簡単に言や、海賊団のリーダーかな」

「……リラ皇女はどこだ？」

「いるよ……ほくらここに……」

「ロサイル君っ……！」

「皇女……」

「その人、放してくれねえか？」

「いいよ……財産をくれたら……」

「あいにく、そんなの持つてない。だから船に乗れなくて困ってるんだ」

「そうか……じゃあ放せねえな……だったら力ずくで放してみるか？」

「ああ、そうする」

「ははは……おもしれえな坊主……気に入った」

「そりやどうも……こつちから行くぜ……」

ロサイルは、本を端っこにおいて剣に炎を灯した。

ジェットで勢いよく飛び出した……が！？

「ははは……そんな程度か……」

今度は目に見えない速度で斬られた……

「ぐっ……」

「はは……はははは……」

こうして、二つの戦いは最終決戦へ！

第9話 決戦！小さな島！（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
次話もよろしくお願いします。

第10話 開放！リラ皇女！！（前書き）

色々やってて更新遅れました。

第10話どうぞ

第10話 開放!リラ皇女!!

速かった・・・何も見えなかった・・・

ロサイルは斬られた瞬間、そう思った。

せっかく・・・ここまで・・・これなのに・・・

「ははは・・・力づくで取り戻すなんて無理だよ・・・ははは・・・

」

そう言われて、ロサイルは地面に倒れた。

「ごめん・・・リラ皇女・・・」

と言って、リラの方を見ると何か驚いた表情だった。

(あの手・・・もしかして・・・炎の手!? 嘘・・・ロサイル君が・・・?)

「・・・ロサイル君?!?!?!」

「!?」

「よく聞いて!それは炎の手。急速に温度が上昇した時に発生するもののな!?!」

「急速に温度が上昇した時・・・」

「さつき戦い方見てたけど、剣の方便いすぎ!?!左手で炎の球を発射することもできるし、

両手で剣をにぎって炎のビームとして出すことも出来る!?!」

「えっ、まじ?」

すると、その話を聞いていた、海賊団のリーダーは、

「ははは・・・余計な事言っちゃったな。この・・・くそ女が!?!」

そいつは、さっきのやる気のない喋り方ではなく、きつい口調だった。

(やばい!?!あいつ、リラ皇女を殺す気だ!?!!)

「死ねええええー!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

(助けなきや・・・必ず!?!!)

一方、オーシャンアイランドでは・・・
「死ねえええー！ー糞がきー！ー！！！！！」
海賊団副リーダーとキルトの戦いが始まっていた。・・・だが
「ぐわあっ・・・」
副リーダーはあっけなく倒れた・・・
「な〜んだ。こんなもんか」
「キルト・・・あんた・・・」
「大丈夫。殺してないよ」
「はあ・・・そうか・・・」
「で、城の方は大丈夫なの？」
「ああ、手はうつてあるよ」
「さすがおばあちゃん」
そう言くと、海賊たちが城から逃げてきた。
「うわああああー！ー！！！！！！！！！！」
慌てた様子で副リーダーは口を開いた。
「どっ、どうしたんだ!？」
「この奴、まだ兵士を隠してたんです」
「うっ・・・嘘だろ・・・」
「あの数じゃ、太刀打ちできません！！！！」
「しゃあないな・・・逃ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！！！！！！！」
と言って、海賊団はオーシャンアイランドを去った。
その後、キルトが口を開いた。
「何体出したの？ばあちゃん？」
「ん〜ざつと二百人かな？ははは、年寄りでもまだ幻術は使えるもんだね〜」
「すごい怯えっぷりだったな〜」

ロサイルは、その言葉に驚かなかった。

「・・・そうだねっ!!!」

ロサイルは、根拠は無いけど感じていた。

あの本は、リラ皇女が戦うのに必要な道具だって・・・

「準備はいいか・・・坊主と女・・・」

二人は顔を見合わせて、一緒に言った。

「もちろん!!!!!!」

かくして、小さな島も最終決戦へ!!!

オーシャンアイランドに平和は戻るか・・・

第10話 開放！リラ皇女！！（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
次話もよろしくお願いします。

第11話 決着！小さな島の戦い（前書き）

決着しました。

今回も読んでくださってありがとうございます。

「あなたには、しっかり反省してもらわなきゃ」

「えっ……」

「アイストルネード!!!!!!」

さっきの爆風とは違って、氷がまじった爆風が発生した。ものすごいスピードでかわしきれなかった。

「ぐっ……くそっ……ぐわああ……!!!!!!」

リーダーは勢いよく壁に叩きつけられた。

「今よ！ロサイル君っ!!」

「了解」

ロサイルは、炎の剣を両手で握り、炎のパワーを剣の先にこめた。すると炎のビームが発生した。

「ぐわああ……!!!!!!」

こうして、リーダーは倒れた。すると奥の方から……

「船長！船長！」

他の海賊たちがやってきた。

「あ……あれ？船長が……やられてる……?」

そう言うと、海賊たちは、ロサイルとリラ皇女の方を見て怯えた。

「ぐっ……ごめんなさ……い」

そう言い残して逃げていった。

「一件落着ですね……皇女」

「ははっ、そうね」

「帰りましょうか……」

「うんっ」

そうしてロサイルは、リラ皇女を担いで、ジェットを使ってオーシヤンアイランドへ帰りました。

第11話 決着！小さな島の戦い（後書き）

次話でオーシャンアイランドでのお話はおしまいです。
まだまだ、作品自体は続くので、
これからもお願いします。

第12話 旅立つ皇女（前書き）

というわけで、オーシャンアイランド編はおしまいです。

第12話 旅立つ皇女

「ふう、着いた」

「ありがとう！ロサイル君」

二人は、小さな島からオーシャンアイランドに戻ってきたのだ。

「こっちの方も片付いたみたいですね」

「そうね」

「おや？リラ皇女とロサイル君じゃないか！」

リラの側近、ユガおばあさんだ。

「おばあさん！！」

「無事だったんだね・・・リラ皇女」

「ははっ、ロサイル君のおかげだね」

「ありがとう・・・ロサイル君・・・何てお礼を言ったらいいのやら・・・」

「ちよっ、おばあさん泣きすぎ・・・」

「もう、嬉しくってね・・・」

「あっ、ロサイル君。今日くらいはとまっていきなさい！」

「えっ命令？」

「お礼もしたいしね」

「はい、分かりました」

嬉しい再開をはたして、一向はオーシャン城へと向かった。

「では、終戦記念？で乾杯！！！！」

「かんぱ〜い！！！」

オーシャン城は、とても盛り上がっていた。

リラ皇女の救出、終戦、しかし・・・

おっさん（つてか王）が亡くなってしまったのだ。

そして、終戦記念？の打ち上げは終了した。

お母さんの説教くらいうるさっかたとは思えない位に、会場は静まりかえっていた。

ロサイルは、隣の部屋で休んでいた。

（・・・振り出しに戻るけど・・・これからどうしよう・・・）
前にも言った通り、金は無い。かと言ってここに留まる事もできない。

そうこう考えてる間にまぶたは閉じていた・・・

翌朝・・・

「お世話になりました」

「本当にありがとね、ロサイル君。また遊びにいらっしやい！！」

「・・・で、リラ皇女は？」

「さぁ・・・どこに行ったのかね？」

「いや、最後にあいさつしようと思ったんですけど・・・いないらしいですね。お世話になりましたと伝えといてください」

「うん、分かったよ。それじゃあ元気でね」

「はい。ありがとうございました」

別れをすませ、ロサイルは野宿した場所に向かった。

「はぁ・・・はぁ・・・ユガおばあさん！ロサイル君は？」

「ロサイル君ならもう行きましたよ。って何ですか？そんなに荷物持って」

「・・・あのねおばあさん。私、彼と旅でてみたいの」

「えっ、旅！？き・・・急に何故・・・？」

「何か私さ、やりたい事ないからさ・・・彼と旅して見つけれられたらなって・・・ダメかな・・・？」

「・・・いいよ、好きにしなさい。いや、それがいいわ」

「おばあさん……」

「リラ皇女……いつてらっしゃい!!!」

「行ってきます!!!」

そう言つて、リラ皇女もロサイルのいる所へ向かった。

「ロサイル君つ!!!」

「あれ？リラ皇女じゃないですか？どうしたんですか？」

「あの……私も旅に連れてつてくれない？」

「えっ!?!」

「いや……ほら……その……迷惑かな？」

「いやいや全然！むしろ大歓迎ですよ！でも……」

「でも？」

「金……無いので……船に……乗れないと言いますか……」

「それなら、私が払う！連れてつてもらうんだもんね」

「ありがとうございます！リラ皇女！」

「堅苦しいな〜リラでいいよ。そのかわり、これからロサイルつて

呼ぶ！」

「はぁ……では行こうか……リラ……」

「行こう！ロサイル」

こうして、二人は旅にでた。

オーシャンアイランドの悲しみを背負つて……

第12話 旅立つ皇女（後書き）

次話も

お願いします。

第13話 フィリッパアイランド(前書き)

じゅんじゅん

第13話 フィリップアイランド

二人は船に乗り込み、相談していた。

「・・・で、リラ。これからどうすんの?」

「ん〜どうしよっか?・・・この辺だと、フィリップアイランドが近いね」

「んじゃあ、そこで旅の準備するか〜」

「うん、そうだね」

「まもなくフィリップアイランドです」

「あつ、ロサイル。着くみたいだよ」

「聞いてたら分かるよ」

「・・・冷たいね〜」

「お〜ここがフィリップアイランドか〜」

「綺麗なところね〜」

「で、リラはこれからどうすんの?」

「ひとまず、もう一ついっぱい物が入るバッグ買おうかな〜と」

「そうか・・・俺はどうしようかな・・・」

「あつ、そうだ!マツチ買ったら?」

「何でマツチ?」

「炎の手発動の為!あれあれば、とつぶん困らないよ」

「んまあ・・・確かにな・・・」

「ひとまず、色々買いい物すませよう。その後ここ集合でいいね?」

「うん」

「じゃあ、解散!」

そう言って、リラはかばんの店に向かった。

「じゃあ、マツチ買いに行くか・・・」
ロサイルは、デパートへ向かった。

「・・・で、結局行くところ同じかよ」

「仕方ないじゃん。デパートが手軽なんだもん」

「さっきの店は？」

「おしゃれなのばかりでダメ！」

今時の女子とは思えない発言だ。

「ついでに食料とかも買っちゃおうか」

「うん、そうだな」

色々買って買い物は終了した。

「急いで！あの船ラスト！！！！」

「まじか！！！！」

二人は船に乗り遅れそうになっていた。

「ふゝ・・・セーフ・・・」

「間に合った・・・」

「もうっ、ロサイル足遅い！！！！」

「仕方ねえだろ！！！！こんなに荷物持ってたんだから！！！！」

「ま・・・まあ・・・」

「で、次はどこに向かうんだよ」

「大きな大陸にでて・・・おんみょうのかくれびと陰陽の隠れ里が一番かな？」

「それじゃあ、そこ向かうか」

「そうだね」

かくして、二人は陰陽の隠れ里へ・・・

第13話 フィリップアイランド（後書き）

次話もよろしくお願いします。

第14話 陰陽の隠れ里で再開した嫌な奴（前書き）

サブタイトル長っ！

・・・いですが、どうぞ。

第14話 陰陽の隠れ里で再開した嫌な奴

二人はまだ船に乗っていた。

「なありラ。隠れ里って言うことは、山の中にあるのか?」

「まあ・・・多分ね。行った事ないから。あつ、そろそろ着くよ」

二人は、船から降り、陰陽の隠れ里へ向かった。

歩くこと10分・・・

「ここだよ!陰陽の隠れ里!」

「じゃつ、早速入るか」

二人は陰陽の隠れ里に入った。その時・・・

ドンツ!!!

「キャッツ!!!」

「わっ!!!」

ロサイルと向こうから来た一人の女性とぶつかった。

「す・・・すいません。お怪我はありませんか?」

「いえ、大丈夫です。そちらこそ大丈夫ですか?」

「はい、すいませんでした。では・・・」

そう言い、女性は去って行った・・・

「で、どうする?」

「もう夜だし、宿屋に行こうか」

「金大丈夫なん?」

「ぼろくても我慢してね」

「・・・はあ・・・」

二人は宿屋に行った。そして部屋で話し合った。

「で、休んだらどこ行くの？」
「ん〜・・・山をどっちみち通らなきゃいけないし・・・」
「電車とか無いの？」
「金もつたいない！」
（今まで贅沢してきた奴が言うんじゃねえ！！！！）
「ひとまず・・・フライジヤの町に行こうか」
「ん、分かった。おやすみなさ〜〜い」
「寝たかったのか・・・」

「おはようございますっ！・・・ってまだ1時じゃん・・・」
ロサイルは、寝たかったにもかかわらず、1時に目を覚ました。
しびしび窓の外を見る・・・すると・・・
「あっ、あれは昨日の・・・」
そう、ぶつかった女性だった。
何か隠れている様子だった。
ロサイルは、ひとまずその人のもとへ向かった。

「何してるんですか？」
「ひゃあっ！・・・あっ、あなたは昨日の・・・」
「ロサイルと言います。ところで何してるんですか？」
「実は私、この里の、村長？なのでしょうか・・・その人と、一緒に
くらしてるんです。」
「へ〜そうだったんですか」
「ですが、ここ最近、いつも夜中にどこかに出かけるんです。気に

なつてしようがなかったもので、つけてきたのです。そしたら、見たことのない地下室に入ってしまったのです」

「その地下室ってどこにあるんですか？」

「あの噴水の周りに白い正方形の板があるんですけど、その北側にある板の下です」

ロサイルは、その板を動かしてみた。

「あつ、本当だ！・・・入ってみましょうか」

「えっ！？」

「気になるから、僕もくではっ！」

「えっ、あつ、ちよつと！」

二人は、地下室へと足を運んだ。

そこで見た光景は・・・

「村長！！と、あとだれか二人いますね」

その姿を見た途端に、ロサイルは震えだした。

あのマント、あの杖、あの仮面・・・

「異端審問官だ・・・」

その異端審問官は、まぎれもないエグレサツタ村を滅ぼした二人だった。

ロサイルと女性は、三人の話聞く。

すると、驚くべき事実が発覚する・・・

第14話 陰陽の隠れ里で再開した嫌な奴（後書き）

次話もお願いします。

第15話 村長と異端審問官（前書き）

遅れてすみませんでした。
どーぞ！

第15話 村長と異端審問官

「何で、あいつらがここに・・・」

ロサイルは、声が震えていた。

「知り合いですか？」

「いや・・・ちよつとね・・・とにかく出ましようか」

「・・・ちよつと待つてください」

「えっ？」

「村長とあの人たちの様子が・・・」

確かに変わっていた。

そして、彼達の話盗み聞きした。

・・・数分後・・・

「では、陰陽の隠れ里の秘宝の洞窟へ、明日行こう」

「了解です、異端審問官さん・・・」

「でも、里の人はどうするの？あんな危険な秘宝を手に入れるなんて、そうとうの反発があるんじゃない？」

「殺せばいいでしょう」

「そうね」

「き・・・聞きましたか・・・？」

「うん、嫌なくらいしつかりと」

「明日・・・里の人は殺される。あなたも・・・えつと・・・」

「そういや、自己紹介まだでしたね。私、エリスと申します」

「じゃあ、エリスさん。ひとまず出ましようか」
「そうですね。出ましよう」

「……はあ……まさか、村長がそんな人だったなんて……」
「異端審問官とグルだったんだな」

「っていうか、何で教皇に仕える異端審問官が人を殺すのでしょうか」
「ね」

「……エリスさん、戦いましょう!」

「えっ!?でも相手は村長と異端審問官ですよ!」

「異端審問官は、僕達にまかせてください!あとは、あなたが自分の意思で村長を倒す!これだけです」

「でも……村長は、早くに両親を亡くした私の面倒をみてくれた恩人でもありますし……」

「その村長が、人々を殺そうとしてるんです。もう、こんな戦争は見たくない!」

「……分かりました。里の人たちを救います。あなたと異端審問官の事情は聞かないでおきましょう」

「ありがとうございます。ではっ!また明日頑張りますよ」

「はい」

こうして、戦争がまた始まろうとしていた……

第15話 村長と異端審問官（後書き）

次話は、おそらく日曜日程度になります。

こうして、二人は村長の家に向かった。

二人は、村長の家に着き、エリスとリラの自己紹介もすませた。そして、三人で相談した。

ロサイルが始めに口を開いた。

「そっぴゃエリスさん。村長は？」

「村長は、もう洞窟に向かいました。異端審問官も一緒です」

「じゃあさ、先回りするのって、不可能じゃない？」

前日に立てた作戦は、先回りして秘宝を奪う。

そして、あきらめさせると言う、何とも小学生のような発想だ。

「今考えたら・・・無理ですよね・・・」

隠しルートは何も無い。

「・・・どうするの？ロサイル・・・」

「・・・正面から突っ込もう」

「ばかか！！お前は！！！」

リラとエリスの声が、見事にはもった。

ロサイルが考えた作戦はこうだ。

村長と異端審問官が、秘宝を手に入れ、里に戻ってくる。

そのところを、一対一に持っていき、戦う。

そして、勝利し秘宝を取り返す。

そして、秘宝を元のところに~~~~

「・・・という感じだ」

「・・・いたって、シンプルだね」

「でも、それが一番手っ取り早いのでは？」

「そうだね」

「よしっ！…じゃあ決定！…！秘宝を守るぞー！…！」
「おー！…！」

そして、三人は作戦を決行する。

第16話 秘宝への作戦（後書き）

見てくださった方ありがとうございます。
直した方がいいという点がありましたら、
感想お願いします。

第17話 戦闘開始、陰陽の森の大戦争！（前書き）

遅くなつてすみませんでした。
どーぞー

第17話 戦闘開始、陰陽の森の大戦争！

三人は、秘宝のある洞窟に向かった。

「あつ、あそこです。」

エリスが指を指した先には、大きな洞窟があった。

「よしっ！しばらく待って、戦闘に入ろう。俺は、男の異端審問官、リラが女の方、そして、エリスさんが村長だ。いいか？」

「うん、了解。」

すると、洞窟から三人が出てきた。

「行くぞっ！！！」

そして、戦闘へ・・・

うまい事に、それぞれ離れ、1対1にもつれ込んだ。

ロサイルと男の方は、森の中で、争っていた・・・

「・・・まだ生きていたんだな・・・エグレサッタの少年。」

「へへへっ！まああな。意外と運いいんだよ。」

「そうか・・・だがその運とやらも・・・2度は起きんぞ・・・！」

「大丈夫さ。今回は、運に頼らねえから・・・」

そう言つて、ロサイルはマッチをすり、炎のついたマッチを、左手で握った。

すると、炎の手が発生し、剣にも引火させた。

異端審問官も、やはり驚いた様子だった。

「あの時、もしやと思っただけど・・・やっぱり、炎の手を持っていたんだね。」

「それを知ったから、運に頼らねえって言っただ。」

「なるほどね・・・そうになると、対策も出来るよ・・・」

「何!?!」

異端審問官は、魔法陣を上を描いた。

「出でよ!!! スコール!!!!」

一方、リラと女の方も、森の中で争っていた。

「・・・ひとまず名前聞いところかしら? 初めてだしね・・・」

「リラ!! デ!! シャナーダ・・・」

「へえ・・・可愛い名前ね。私は、レミー!! キャーツ。」

「そっちこそ、可愛い名前じゃない。」

「では、自己紹介もすんだし・・・」

と言って、レミーは魔法陣を描いた。

リラも本を開き、書いてある魔法陣をなぞる・・・

「ブリザード!!!!!!」

「アイストルネード!!!!!!」

二つの氷の爆風が、ぶつかり合う。

辺りは一面、白銀の世界となった。

そして、エリスと村長の方は、洞窟の中で戦っていた。

「・・・村長・・・どうしてこんな事を・・・」

「ばれていたんだな・・・」

「質問に答えてください・・・」

「話すつもりは無い。聞きたいなら、わしに勝ってからしろ・・・」

「そう・・・させていただきます。」

そう言うと、エリスは札ふだを取り出して、背中に持っていた、弓矢を
装備した。そして、叫んだ。

「伏せ札！光の弓剣ゆみけん！！！！！！！！」

すると一つあった、とても長い矢が、光に包まれた。

これで、その矢を剣のように扱う事ができるのだ。

「じゃあ、こっちも行くぞ・・・エリス・・・」

こうして、戦いが幕を開けた・・・

第17話 戦闘開始、陰陽の森の大戦争！（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

そこで、少し聞きたいのですが、他の方の小説と僕のに比べて、僕のが、非常にセリフの感覚が少ないのです。

もうちょっと、セリフや文に感覚を空けた方がいいでしょうか？
感想の所をお願いします。

第18話 ピンチ！それぞれの戦い

～ 異端審問官VSロサイル～

異端審問官が呪文を唱えると、空が雲に覆われた。

それと共に、激しい豪雨が降り注いだ。

その豪雨が、ロサイルの体を急激に冷やした。

すると、左手の炎と剣の炎が消えてしまった。

「なっ……！！」

「対策ができるとはこういう事だ。」

「……ちくしょー……」

「来れないなら、僕から行くよ！」

そう言うと、異端審問官は魔法陣を描いた。

「アイスブリザード！！！！！！」

すると、4つの氷の塊が飛んできた。

ロサイルは、ぬかるんだ地面に足を奪われ、避け切れなかった。

ロサイルの右手と左手と右足と左足に命中した。

「くそっ……！！」

「これでとうぶん炎の手は発生しないだろう。」

「地面と足がひつついて……動けない！！！！！！」

「終わりだ！！エグレサツタの少年！！！！！！」

魔法陣を再び描いた。

「ライトビーム！！！！！！」

異端審問官の杖から、一直線の光線がロサイルに襲い掛かった……

一方、リラとレミーは……

辺りを白銀の世界にし、激しく戦っていた。

レミーは、再び魔法陣を描き、呪文を唱えた。
「ブリザードガード!!!」

すると、氷のガードがレミーの体一面を包み込んだ。
「なっ!!!」

リラも驚いた様子だった。

これで、長い間相手は、攻撃を受けないのだ。

リラも必死で呪文を唱えた。

「ファイヤートルネード!!!」

次は炎の爆風が吹き荒れた。

すると、みるとみると氷のガードが溶けてしまった。

「へえ・・・炎の技も出せるんだ・・・」

「属性は何でも出せるよ・・・」

「なら・・・これでどうかしら？」

レミーは再び魔法陣を描き呪文を唱えた。

「シャドーパラチュレーション!!!!!!」

唱えると、レミーが何人にも増えた。

そう、レミーは影分身をしたのだ。

さすがのリラもこれは対処できない。

「さあ・・・一気に決めるよ!!!!!!」

上から、無数のレミーが襲い掛かってきた。

エリスと村長のバトルは・・・

エリスは弓剣を装備している。きらきら光り輝いていた。

「・・・行きますよ・・・村長・・・」

そう言っつて、エリスは村長に向かって突っ込んでいった。
すると、村長も札を出した。

「切り札！！斬殺狼！！」
ざんざつおおかみ

札から、いかにも人を殺しそうな狼が出てきた。
エリスは動揺せず、突っ込んだ。

狼の口が開き、エリスをかみ殺そうとした。

その口の中に思いつきり、弓剣をぶっ刺した。

狼は、たちまち血を吹き、倒れた。

「村長・・・あなたを・・・倒します！！」

「くくく・・・出来るかね・・・エリス如きに・・・」

そう言うと、新たに札を出した。

「伏せ札！！ビギャンデスソールド！！！！」

すると、頭上に大きな光の剣が現れた。

「なっ・・・」

「悪いな・・・エリス・・・死んでもらう。」

光の剣をエリスに向かって投げた。

その速さは、とても速く、避けれる様な次元じゃなかった。

こうして、悪化するバトル・・・
リラの方は、最終決戦へ！！！！

第18話 ピンチ！それぞれの戦い（後書き）

次話もお願いします。

第19話 リラVSレミィ 爆風の決着(前書き)

リラの方は決着です。

ちよっと早かったかな・・・

第19話 リラVSレミー 爆風の決着

（リラVSレミー）

無数のレミーが現れ、周りからリラに襲い掛かった。

「終わりね。可愛いリラちゃん。」

リラは、にっと笑った。

「・・・終わりは・・・どっちでしょう?」

「へ?」

「トルネードキラーガード!」

リラが呪文を唱えると、リラの周りに、爆風のガードができた。

「この爆風は、キラーだけあって・・・切り裂いちゃうよ?」

「なっ!?!」

レミーの分身は、勢いで止まらず、爆風につっ込んでいった。

分身は、たちまち消えてしまう。

「へえ・・・まだそんな技隠してたなんてね・・・」

「もう、終わりにするよ。陰陽の隠れ里を守らなきゃいけないし。」

「じゃあ、私も最後の一撃としましょうか・・・」

リラは、本から魔法陣を出し、レミーは杖で魔法陣を描いた。

「アイトルネードエターナル!」

「ブリザードクラッシュ!」

一方、陰陽の隠れ里・・・

「おゝい、皆。何か森が騒がしくないか?」

「言われてみれば・・・そうだね。」

森でのバトルの音に、里の人たちも気づいていた。

「村長もいねえし・・・何か変だよな?」

「あれって・・・狼！？しかも、めっちゃでかい！！！」
狼は、どんどん里に入っていく。

「あのままじゃ・・・里が・・・行かないきゃ！！！」

リラは、一度レミーの方を見て言った。

「レミー、もし今度あっても、私負けないから。じゃっ！」

そう言って、リラは里の方へ駆け出した。

「ふっ・・・生意気な女だな・・・リラちゃんは・・・」

こうして、リラとレミーの戦いは幕を閉じた。

一方、ロサイルとシヨウザンは・・・？

第19話 リラVSTミィ 爆風の決着(後書き)

次話もよろしくです。

第20話 それでも恩人だった・・・（前書き）

20話です！ついに！

そして、遅れてすみませんでした。

第20話 それでも恩人だった・・・

〽ロサイルVS異端審問官〽

「終わりだ・・・エグレサッタの少年・・・」

異端審問官の魔法陣から、一筋の光線が飛び出た。

「くそつ・・・」

ロサイルは、かわす予知が無かった。

大きな爆発音が、森中に響く。

ロサイルは、その場に倒れた。

「哀れだな、エグレサッタの少年。炎の手は、あまり意味が無かったな。」

豪雨は、次第に止んでいった。

「じゃあな、エグレサッタの少年。」

「じゃあな、じゃねえよ・・・」

「!?!」

ロサイルの手には、赤い炎があった。

「何故、炎の手が・・・!?!」

「ここで、死ぬわけにはいかねえんだ。」

「そうか、怪我人だからといって、手加減はしないぞ。」

「当たり前だ!!」

一方、陰陽の隠れ里は・・・

たくさんの動物が、札から出ていた。
狼を殺すために・・・

「はぁ・・・はぁ・・・！何？あの狼？」

リラが、陰陽の隠れ里に着いた。

「とりあえず・・・助けなきゃ！！」

リラは、里に入ってしまった。

「とりあえず、聞こう。何故、炎の手が発生した？ライトビームは、
光線ではあるが熱はないぞ。」

「感覚がくるった。」

「は？」

「例えばさ、ずっと雪を握った後離すと、時間がたつにつれて、温
かくなってくるからな。」

「なっ・・・」

「つまり・・・お前の氷が役に立った訳さ。」

ロサイルは剣を炎の剣にし、構えた。

「ははは・・・なるほど。対策として出した氷が、チャンスになっ
たんだな・・・」

そう言つて、異端審問官は魔法陣を描いた。

「スコーーー・・・」

「ル」を言う前に、ロサイルは、異端審問官の後ろをとった。

「速・・・」

ロサイルは、左手で異端審問官を殴った。

異端審問官は吹っ飛ばされた。

「ぐ……くそ……」
「そんな小細工……もう通用しないぞ。」
「その様な……小細工はやめよう。」
すると、異端審問官は杖の先を引き抜いた。
「へえ……それ剣になつてゐるんだ……」
「これが、小細工はやめようを意味する……」
「なるほど……」
「行くぞ……エグレサッタの少年!!!!!!!!!!!!!!」

一方、エリスはというと……

「村長……何故私を襲わないのですか？あの狼は……」
「狼は、お前を襲う気などないよ。ただ……違うものは襲うけどね……」

「何を襲うんですか、あの狼は。」
「さあね……一つヒントをあげるよ。お前にとって大事な物……だが、今のわたしにはいらん物だよ。」

エリスの顔色がだんだん悪くなつていった。

「まさか……!?」

「そう……陰陽の隠れ里だよ。」

エリスの目つきが厳しくなった。

「村長……!!!!!!!!!!!!!!」

エリスは、村長に向かって突っ込んでいった。
弓剣を構えて……しかし。

「あの狼・・・村長が札から出した狼なんです。」

「村長の!？」

「見せてくれたんです。僕がまだ20歳くらいの時。とっても大事にしていたんです、その狼を村長だと思つと・・・だから殺さないでください。」

「でも、現に今は里の裏切り者じゃないですか!！」

「分かつてる・・・それくらい。でも・・・これまでにしてくれた事が多すぎるんだ。」

「・・・」

「おそらく、エリスが一番な。捨てられた自分を救ってくれたんだからな。」

「・・・分かつた、殺さない。ただし、少し傷つくかもしれないけど・・・いいですか？」

「ああ・・・恩にきる。」

その男は、深々と頭を下げて、里から出て行つた。

この戦い・・・

ロサイルやリラにとっては、ただの裏切り者の村長・・・

しかし、里の人たちからしたら、一人の大切な恩人である。

だから、複雑な気持ちでいるのだ。里の人たちは・・・

そんな村長にエリスは勝てるか？

ロサイルは異端審問官に勝てるか？

リラは里を守るか？

それぞれの戦いが激しさを増す中、

ロサイルと異端審問官の戦いに終止符が打たれようとしていた。

第20話 それでも恩人だった・・・（後書き）

感想お待ちしております。

第21話 炎と光の末（前書き）

ロサイルと異端審問官決着です。

いっぱい書きました（v a zにしては）

あと、テストが始まるので、土曜日くらいまで更新できません。
ご了承ください。

第21話 炎と光の末

〱ロサイルVS異端審問官〱

「うおおおおおおお！！！！」

異端審問官が剣を構えて、勢いよくこちらに向かってきた。

ロサイルもしっかり、剣で受け止めた。

「ひゃ〜・・・結構速いんだね〜。あんた。」

「言つとくが魔法など使つてないぞ。」

異端審問官はそう言つと、更に力をこめた。

ロサイルはそれに耐え切れず、後ろに下がった。

「はあ・・・異端審問官なのに・・・近戦が・・・何でこんなに・・・」

「近戦が一番の得意分野だ。残念ながら。」

「まじかよ・・・」

ロサイルは、両手で剣を握った。

そして炎のビームを発生させたのだ。

「へえ〜、まだこんな技があつたんだ。・・・けど、通用しないよ。」

異端審問官は、魔法陣を書きだした。

そのパワーを剣に注入し、炎のビームを切り裂いた。
しかし・・・

「あれ？エグレスッタの少年は・・・？」

探しているうちに、後ろに黒い影が横切った。

「しまっ・・・」

ロサイルは一気に斬りつけた。
地面に転がりながら、異端審問官は倒れた。

「くそ……まだまだ……」

「なあ、1つ聞きたいけど……」

「何だ。」

「何でそこまでして、教皇の言うことを聞く？」

「愚問だな……教皇に仕えるのが異端審問官だ。」

「教皇は教皇でも……犯罪に手を染めてるじゃねえか。」

異端審問官は立ち上がった。

「そこから先は……俺を倒してからだ。」

「なるほど……絶対負けられねえな。」

異端審問官は、魔法陣を描いた。

「ライトソード!!!」

異端審問官の剣は、たちまち光り輝いていく。

「いくぞ……」

異端審問官は、思いつきり前から突っ込んできた。

「ははっ、そんなに正面からくると、斬られ……」

ロサイルが「る」を言う前に、異端審問官はロサイルを斬っていた。

「教えてやろう……お前の反応や、ジェット移動よりも速いもの

を……」

「ぐ……!!!」

「光だ。」

異端審問官は、光の速さでロサイルを斬りつけたのだ。

「はぁ……まさに……光速の世界か……」

「諦めるか？俺が仕える理由を聞くの……」

「諦めねえよ……」

ロサイルもすぐさま立ち上がる。

「遅い!!!!!!!!!!」

何と異端審問官は、ロサイルの後ろにいた。異端審問官は勢いよく斬りつけた。

とても深く当たったのか、大量の血があふれた。

「な……」

「ここまでか……エグレサッタの少年……」

ロサイルはその場に倒れた。

「残念だったな、少年。やはり、フォースの技について行くのは、さすがに無理だったか……」

「ばか……やるー……おれは……いき……て……るぞ……」

「しづといな……まだやるか？俺も聞きたい。何故そこまでして戦う？」

「さあな……俺を倒してから聞け!!!!」

「なるほど……そつちもか……」

ロサイルは、両手で剣を握った。

「この一発に、全ての炎を込める!!!!」

「最後の一発か……」

「ああ、そうだ!」

「ははは。全くおもしろいな……お前は。」

「……」

「ならば、俺も今からする一撃に全ての光を注ごう!!!!」

2人は、両手で握った剣を前に突き出す。

「「うおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「!!」

「炎のビーム!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「光のビーム!!!!!!!!!!!!!!」
2つの剣先から、一筋のビームが出る。
そして、互いにぶつかった。
真ん中で、すさまじい爆発が起きる。

「はあ……はあ……」

「まだ生きてんの……しぶといな……」

「少年こそ……しぶといじゃないか……」

2人とも限界寸前だった。

「おい、異端審問官。言っとくけど俺もう動けねえぞ。」

「あいにく俺もだ……この勝負、引き分けだな……」

「という事は、思ってること一緒だと思っけど……」

「ああ。」

「どっちの理由も聞かない。」

異端審問官はすくつと立ち上がった。

「何だよ……動けんのかよ……」

「悪いな、嘘ついて。」

「はあ……正式には……俺の負けか……」

「正直驚いたな……あの状況であの一撃とは。」

「そうか……」

「じゃあな……最後に名前を聞いておこうか、少年。」

「ロサイル・クロウズだ。」

「ほお、いい名だ。」

「あんたは？」

「シヨウザン・レングラージだ……」

「長い付き合いになりそうだな……」

「そうだね・・・」

「じゃあな、ロサイル。」

「ああ、今度こそ絶対理由聞き出してやる。」

「ふん、こっちのセリフだ。」

こうして、ロサイルの戦いは幕を閉じた。

第21話 炎と光の末（後書き）

次話は、エリスだったり、陰陽の隠れ里だったりです。

第22話 破壊された里（前書き）

陰陽の隠れ里編終了です。

リラの時と違って、悲しく終わりました。
ど～～～ぞ

第22話 破壊された里

く エリスVS村長く

もがけばもがくほど溢れ出てくる血・・・エリスの肩からは大量の血が止まりそうになかった。

「いいかエリス。わしは、この里を滅ぼす。そしてわしの手で、世界を変える。」

「絶対・・・させ・・・な・・・い・・・」

エリスの体は思うように動かなかった。

自分の体なのに、操れない。

「じゃあな、エリス。お前はそこで一生見ているがいい。世界が変わる瞬間を・・・」

そう言つて村長は姿を消した。

エリスは貧血症状、いや、死に至る程の出血だ。

エリスは静かに目を閉じた・・・

く 陰陽の隠れ里く

「傷つけずにつて・・・案外できない!!」

リラは苦戦していた。

里の人に言われた、傷つけずにということだ。

「お困りのようだね。」

「えっ!?!」

そう言ってやって来たのは、異端審問官のシヨウザンだった。

「どうしてあんたがここに・・・ロサイルは!？」

「彼となら決着がついたよ。引き分けた。」

「そう・・・で、何の用？」

「狼を消してあげるよ。」

「は?どういう風の吹き回し？」

「勝者には賞品をあげるものだろ?引き分け自体情けないことなんだ。」

「・・・」

「だから、村長以外は敗北ってわけさ。」

「え!?!ちよつと待って!?!じゃあエリスさんは・・・」

質問を聞く前にシヨウザンは狼を札に吸引した。

「じゃあな、用はそれだけだ。」

「ちよつと待って!?!エリスさんは!?!?」

「さあ?知らん。洞窟に行ってみたらどうだ？」

「・・・っ・・・」

「村長にやられてんだ。多分、血まみれだろうね。」

「・・・次もし戦ったら・・・絶対あんたを許さないからね・・・」

「

「ふん、勘違いするな。俺が戦うのはロサイルだ。君じゃない。」

リラはまだ、怒りを抑えきれない様子だった。

「じゃあな、今度会うときはレミーも強くなってるよ。」

「ロサイルもね・・・」

そう言って、シヨウザンは里から出て行った。

リラも急いで洞窟へと向かった・・・

「はぁ・・・はぁ・・・」

リラは洞窟へ向かっていた。

その道中・・・

「おっ！リラじゃん。」

「ロサイル！！！！！！」

「どうしたんだ？そんなに急いで。」

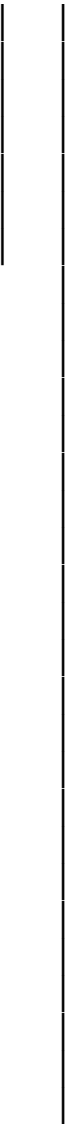
「ロサイル、洞窟に一緒に来て！！」

「へ？何で？」

「エリスさんが危ないかも知れない。」

「・・・分かった。」

2人は急いで洞窟へ向かった。



2人は洞窟につき、中に入った。

その中で見た光景は・・・

「エリスさん！！！！！！！！」

血まみれになったエリスが倒れていた。

「大丈夫！？エリスさん！！」

「リ・・・ラ・・・ちや・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「」

「あまり喋らさない方がいい。」

「うん。」

「ひとまず陰陽の隠れ里に連れて行く。」

「分かった!!!!!!」

ロサイルがエリスを背負って陰陽の隠れ里に向かった。

「ん……」

「目が覚めた!!!!!!」

「リラちゃん。ロサイル君。」

「は~~~~良かった~~~~」

「ああ、本当に。」

3人はかるうじて形が残っていた宿屋にいた。

ロサイルとリラは、そこにあつた救急箱を使って応急手当をしたのだ。

そのおかげで、起き上がったエリスが2人に問いかけた。

「ここは……どこ……?」

「……陰陽の隠れ里だよ……」

それを聞いた途端にエリスの顔が蒼白になった。

「もしかして……これ村長が……?」

「うん……その通りだよ。」

「……さつき戦った時、村長に言われたんです。『俺は世界を変える。お前は一生そこで見ている。世界が変わる瞬間を』って。」

「・・・」

「私は、今の村長が作る世界なんて見たくありません。」

「私もそんなの見たくないよ。」

「俺もだ。ま、今もどうかと思うけどな。」

「ところで・・・2人はこれからどうするつもりなのですか？」

「一応、フラー ज्याの町に行こうと思ってるよ。」

「あの・・・私と一緒に連れて行ってもらえませんか？」

「「え？」」

「目的が違うかもですが・・・阻止したいんです。世界が変わる瞬間を・・・」

「どうするリラ？ちなみに俺は、一緒だぜ。目的。」

「私も気が変わった。阻止したいよ、この世界。」

「決まりだな・・・」

「「一緒に行こう!!!」」

「お願いします・・・」

エリスは、2人に手を引っ張ってもらって立ち上がった・・・

第22話 破壊された里（後書き）

次話は、フラージャの町へ!!!

第23話 エグレスッタの生き残り（前書き）

新章です。

どろどろ

第23話 エグレスッタの生き残り

ロサイル、リラ、エリスの3人は、陰陽の隠れ里を出て、フラージヤの町を目指していた。

怪我の為、ロサイルがエリスをおんぶして歩いていた。

「なあリラ。まだなのか？フラージヤ。」

「もう少しだと思うよ。」

「もしかしてロサイルさん。重いですか？私。」

「いや、そういうわけじゃ・・・。」

「うわゝ、デリカシーの無い奴ゝゝゝ。」

「だまれ！ 軽い荷物しか持ってないくせに！！」

「はあ？なんだなんだ、マッチ全部台無しにしたくせに！！！！」

こんなしょうもない会話をしながら、陰陽の森を抜けていった・・・

3人は無事に森を抜けた。

「あそこか！！リラ！！」

ロサイルの指差した先には町があった。

「うん。多分あれがフラージヤ。」

「綺麗なところですねゝゝ。私、町を見るのは初めてです。」

「行こうぜ！！」

ロサイルは、ダッシュで町に走っていった。

エリスをおぶっているにもかかわらず・・・

「・・・こけるなよゝゝ・・・。」

ゝフラージヤの町ゝ

「到着~~~~~!!!!!!」

ロサイルの背中にはふらふらになったエリスがいた。

「ロサイルさんって・・・足速いですね~~~~」

ふらふらになりながらエリスが言う。

「我慢しないでいいんだよ、エリスさん。」

後から来たリラもフラージャについた。

そして、リラがあきれた様子で言う。

「大体ロサイル。エリスさんふらふらなの気づいてあげなさいよ・・・」

「

「おお、フラージャだけにふらふらだな~~~~・・・」

（（こいつは一回殺そうか・・・））

不思議とリラとエリスの心の声がハモった。

「とにかくロサイル。エリスさんを入院させよう。」

「そうだな。病院へ行こう。」

3人は病院へ行き、エリスはそのまま入院した。

ロサイルとリラは病院から出て、宿屋に向かおうとした。

「うっし。じゃあ宿屋に行くか。」

「うん。」

2人が宿に向かおうとしたその時・・・

「ロサイル君？」

ある女性が声をかけてきた。

声が出た方にロサイルは振り向く。

「あ~~~~、やっぱりロサイル君だ!!!」

「もしかして・・・ナージャさん!？」

「そうそう。覚えてくれてたんだね。久しぶり!!!」

「お久しぶりです。」

「・・・で何？彼女とデート中??」

「いや、一緒に旅してる仲間です。」

「そりゃそっか。エグレスッタはあんな事になっちゃったもんね。」

「あの~~~~~・・・」

リラが喋りだす。

「あつ、ごめんね。私ナージャと申します。ロサイル君がお世話になってます。」

「あつ、リラです。・・・で、2人はどういう関係??」

「いや、普通に2人ともエグレスッタ出身なだけだ。」

「そうなんだ。エグレスッタの生き残りって2人いたんだね。」

「あと、俺の幼馴染も生きてる。」

「バレンア君の事?」

「はいそうです。だからリラ、結局エグレスッタの生き残りは3人だ。」

リラは意外そうな顔をしている。

エグレスッタの生き残りがロサイルだけだと思っていたのだろう。

「2人とも・・・いつとくけど、エグレスッタの生き残りは4人よ。」

「え!?!」

2人とも驚いた様子だった。特にロサイルは。

「ナージャさん。他にも生き残りがいるんですか!?!」

「結構いるんですね。」

「その人はね・・・」

「~~~~~」

「ロサイル君のおじいちゃん!!」

「嘘!?!???」

突然判明した事。おじいちゃんが生きている。
ロサイルのおじいちゃんはいったいどこに・・・!?

第23話 エグレサッタの生き残り（後書き）

次話もよろしくです。

あと、評価もいただけると嬉しいです。

第24話 フラージャ特訓場(前書き)

24話です。

どろどろ

第24話 フラージャ特訓場

「ナージャさん！本当に俺のおじいちゃんが生きてるんですか!？」

ロサイルは驚いた様子だった。

それもそのはず。

実際にロサイルはおじいちゃんと会ったことが無いのだ。

「ええ、生きてるわよ。もう・・・100歳くらいになるんじゃないかしら？ロサイルは会ったことは無いと思うわ。」

「てことは、エグレサッタ出身じゃないんじゃないの？」
リラが聞いた。

「そうね・・・私もよくは分からないけど、出身はエグレサッタだ
と思うわ。」

「・・・あのさ、ナージャさん。おじいちゃんの名前って分かり
ますか？」

「うん。ヒヨウルス・クロウズさんよ。」

「あと、どこにいるかは・・・」

「おそらく、『ウイニングウインゲンツ』だと思う。」

「・・・ロサイル。そこに行きたいの？」

「よく分かったな。その通りだ。」

リラはクスッと笑った。

「じゃあさ、エリスさんの体調が良くなったら行くつうか。」

すると、ナージャがこっちを見て言った。

「その前に行くところがあるよ。3人には。」

「「「どういうこと・・・!？」」」

「行かなきゃいけないのは、大都会の首都デューナ・・・の教会。」

「え？そうなの？」
「ああ、今はこの腐った世界を変えることが目的だ。」
「それもそうだね〜・・・じゃあさ、デューナに行くのでいい？」
「おう！そうしよう！」
「よし、決定！！！！」
話を終え、2人は寝た・・・

翌朝・・・

「おはよう〜・・・ナージャさん。」
「おはよう。ちょっとロサイル、いい？」
「ん？何？」
「この前ね、炎の手について調べただけど・・・」
「おお！！まじか！！」
「それで、しばらくこっちにいるの？」
「ああ、エリスが治るまでは。」
「じゃあさ、『フラージャ特訓場』に行ってきたよ。」
「何で？」
「炎の手の特訓や、剣技の特訓も出来る。エリスちゃんが治るまで、リラちゃんが行ってきたら？」
「それもいいかもな。んじゃ行くよ。」
「じゃあ、いつてらっしやい。」
「行ってきます。」

第24話 フラージャ特訓場（後書き）

次話は、出来れば明日更新したいと思っています。

第25話 炎のチャージと速術法（前書き）

特訓場に到着です。

「私、道場的などこんなで始めてきたよ。」

2人が周りを見ていると、向こうからトレーナーがやって来た。

「やあ、君たちは初めてだね？」

「はい!!!」

「私はトレーナーのフキチャだ。よろしく。」

「ロサイルです。」

「リラです。よろしくお願いします。」

「よろしく。では、さっそく道場に行こうか。」

2人はフキチャに連れられて道場に行った。

「じゃあ、まずは君達の実力を見させてもらおうよ。前にある的に攻撃してみてください。まずは……リラさんから。」

「はい!」

リラはリュックに入れていた本を取り出して、文をなぞった。

「ウインドトルネード!!!!!!」

リラの手のひらから爆風が吹き荒れる。

的は粉々になった。

「よし、じゃあ次ロサイル君。」

「あの……」

「何だい？」

「マッチを貸してもらえませんか?1本でいいんです。」

「?分かったよ。」

トレーナーは不思議そうな表情で、マッチを取りに行った。

「あ……あ、誰かさんがマッチを台無しにしたせいで……」

「台無しにしたのはシヨウザンだよ。」

「あの異端審問官、シヨウザンって言うんだ……ちなみに女のほうはレミーだよ。」

「そうなんだ……」

トレーナーが道場に入ってきた。」

「はい、マッチ。」

「ありがとうございます。」

ロサイルはマッチに火をつけ、左手で握った。

そして、炎の手を発生させた。

剣にも引火させ、炎の剣を発生させた。

ロサイルは剣を両手で握った。

「炎のビーム!!!!!!」

剣先から一筋の炎の光線が出る。

こちらも、的は粉々になった。

「うんOK!じゃあまずはリラさんから。」

「お願いします。」

「威力は十分だよ。だが、発生が遅すぎる。」

「そういわれてみれば……」

「だから1週間の間に、『速術法』そくじゆつぽうを身につけるんだ。」

「速術法?」

「呪文や魔法を速く出す法だよ。これを使えば、今よりも3倍は速く攻撃できる。」

「3倍も……」

「そして、ロサイル君だが……」

「はい……」

「まだまだ炎の手が使いこなせてない。」

「……」

「ジェットを使っても、他の炎の手を持つものには劣るな。」

「そうですね……」

「君には1週間で、『炎のチャージ』を身につけてもらおう。」

第25話 炎のチャージと速術法（後書き）

次話もよろしくです。

第26話 特訓1日目(前書き)

何か色々出てきます。

では、26話どうぞー!!

第26話 特訓1日目

「リラ」

リラとフキチャは速術法について話していた。

「では、リラさん。この本を読んでくれ。」

「速術の本・・・？」

「速術法の基本は速読。まずはこれを読んでから、この小説を・・・
10分で読め！！！」

「10分！？無理に決まってるじゃないですか！？」

「これが・・・出来るんだな~~~~。はい、すべてこべ言わず読む
！！！」

「は~~~~い。」

リラは、100ページ程度の速読術の本と、300ページ程度の小説を読み始めた・・・

「ロサイル」

ロサイルの課題は炎のチャージだ。

「じゃあ、まず炎の手と剣を発生させて。」

ロサイルは言われた通りに火をつける。

「2つとも前に突き出~~~~す！」

ロサイルは炎の手と剣を前に突き出した。

「そして、自分の体内に炎を注入するんだ。」

「出来ません。ってかやり方が分かりません。」

「では教えよう。炎の手の炎は自由自在に操れる、もとい移動させる事が出来るんだ。だから前に突き出した2つの炎を、お腹に向かって勢いよく注入する。すると、炎のチャージが発生するよ。」

「お腹に向かつて・・・勢いよく!!!」

ロサイルは一気にお腹に炎を注入した。

すると、足から炎の渦が吹き、次第にその炎は全身を包む。

「出来・・・た?」

「完璧じゃないか。それこそが炎のチャージだよ。」

「これがか・・・」

「ただし!!注意が1つある!!」

「・・・何ですか?」

「炎のチャージが発生している時は、炎の手と剣が発生しないからね。使えるのは・・・足技!もといキックだ。」

「キックですか・・・」

「ただのキックじゃない、『チャージングキック』といって、炎をその足1点に集中させて放つキックなんだ。やってみなよ。」

「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!」

.....

「出来ません!!!!!!!」

「練習が必要だね・・・」

「あ~~~~・・・速読術の本読めた~~~~・・・」

その頃リラは速読術の本を読み終えていた。

「あとは・・・これか・・・」

「ラブラブハイスクール」

(これじゃなきゃだめなんだろうか・・・)

恥ずかしい題名だがしぶしぶ読み始めるリラ。

「10分後……」

「あれ？読み終わってる……？」

リラは300ページの小説を10分で読みきった。

「一旦放ってみなさい。ウインドトルネードを。」

「はい……ウインドトルネード!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

すると、指先から手のひらまでに来る時間が大幅に短縮された。

「すご……」

「速かったな。あとは狙いを定められるように特訓だ。」

「はい。」

「チャージングキック!!!!!!!!!!」

ロサイルは大きく跳ぶものの、炎が1点に集中しない。

「くそ……もう1回!!!!!!!!!!!!!!!!!!チャージングキック!!!!!!!!!!」

これまた炎が1点に集まらない。

「また……」

「難しいだろ？チャージングキックは。」

「コツとかあるんですか？」

「いいだろう、教えよう……とはならない。」

「ええっ!?!」

「だがヒントをやる。跳ぶ時だ。」

「跳ぶ時……」

「それがヒントだ。頑張れよ。」

「はい……」

こうして、特訓1日目は終了した。

第26話 特訓1日目（後書き）

3連休の間には、2回は更新したいと思ってます。

第27話 復活！！（前書き）

27話です。

どしどし。

第27話 復活！！

「でさ、フキチャさん。これで速術法は完成なんですか？」

「まだまだだよ。速く出るようにはなっただけど、命中率が低すぎる。」

「確かに・・・」

リラは速く術を出せるようにはなったものの、命中率がめちゃくちゃだった。

「命中率が高くなって、初めて速術法となる。さっ！もう1回だ。」

「ウインドトルネード！！！」

早くもリラの手から爆風が吹き荒れる。

しかし、めちゃくちゃだ。

「・・・しばらく練習が必要だな。」

「はあ・・・なんか遅いのになれちゃってる・・・」

「じゃあ、速いになれるまでだ。」

「ですよね～～～～じゃあもういっちょ！！ウインドトルネー

ド！！！！」

ドカーン！！！！

「・・・何回壁壊されるかな・・・」

「すいません・・・もう1回！！」

「すいませ〜ん・・・」

ドアの方から人の声がした。

「どなたですか？」

「エリスと申しますが、ロサイル君とリラさんおられますか？」

「エリスさん！？」

ドアを開けると元気なエリスがいた。

「エリスさん・・・怪我は？」

「治りました。早いけど退院していいって。」

「そうなんだ・・・」

「特訓はどうですか？」

「ん・・・順調!!!」

「嘘をつかない。リラさん。」

フキチャが言う。

「あ・・・えつと・・・」

「ふふふつ。苦しんでるんですね。」

おとなしい感じなのにズバツと言うなぐ・・・

「私も協力しますよ。特訓。」

「本当に!？」

「はい。一緒に旅してる仲間ですから。で、何を特訓しているんですか？」

「速術法だよ。でも狙いが定まらないんだ・・・」

「速術法ですか・・・私得意ですよ。」

「うそ!？」

「特に本を使った術は、異端審問官などの術より簡単です。」

「そうなの？フキチャさん。」

「まったくもってその通りだ。」

「練習しましょう、リラさん」

「はい!!!」

「じゃあ、ひとまず1回撃ってみてください。」

「また壁が・・・」

「分かった!行くよ!!!」

人差し指1本を立て、呪文をなぞり、パーで広げる。

「ウインドトルネード!!!!!!」

リラの手のひらから爆風が吹き荒れる。

「・・・どつ?」

「遅すぎます。」

「えー！ー！？これでも？」

「手を開くタイミングがです。」

「手を開くタイミング・・・？」

「命中率が低いのは、手を開くタイミングが遅いからです。いままでのスピードに慣れてしまつて、そのスピードのタイミングで手を開いているからです。」

「へえ〜〜〜〜・・・」

「もう一回やってみてください。手を開くタイミングに気をつけて。」

「うん・・・ウィンドトルネード！！！！！！」

リラは言われた通り早めに手を開いた。

するとウィンドトルネードが的に命中した。

「当たった・・・」

「やりましたね！！リラさん！！！！」

「これこそが速術法だ。取得出来たな。」

「ありがとう！！エリスさん！フキチャさん！！」

フキチャがその後と言う。

「後は・・・ロサイル君だな・・・」

「まだ出来てないんですか？」

「ああ、チャーピングキックを学んでいるが、なかなか出来ないな。」

「サッカーとかやった事ないんですかね？ロサイル君は。」

「エグレサッタにはサッカーボールなんてないでしょ？」

「エ・・・エグレサッタ・・・だと・・・」

フキチャが驚いた様子でいた。

「そうですね・・・どうかしたんですか？」

「もしかしてロサイル君の名前は・・・ロサイル＝クロウズか・・・？」

「？」

「そうですよ。」

「・・・あれを持ってくるか・・・」

そう言うとフキチャは倉庫に向かった。

「どうしたんですかね？」

「さあ？」

「まあ、ロサイル君にも協力しましょう。」

「そうだね。」

2人はロサイルの特訓場に向かった・・・

第27話 復活！！（後書き）

次話もよろしくです。

明日には更新したいと思います。

第28話 お父さんの書（前書き）

予定より遅れてすみませんでした。
28話です。

第28話 お父さんの書

「チャージングキック!!!」

ロサイルは大きく跳び、炎を足に集中させようとしたが、1点に集まらない。

「はあゝ・・・また出来ないか・・・」

「ハロゝロサイル。出来そう？」

向こう側からリラとエリスがやって来た。

「あれ？エリスさん・・・治ったの？」

「はい。おかげ様で。」

「そっか。良かった。」

ロサイルはホツとした様子だった。

「で、ロサイル。出来そうなの？チャージングキック。」

「なかなか出来ないんだよ。結構難しいんだ。・・・そーいや、フキチャさんは？」

「何か、ロサイルの本名を知ったら、あわてて倉庫に行ったよ。」

「倉庫に？何か取りにいったのかな？」

「さあ？とにかく、そういう事だから。」

「ありがとう。うっし・・・もう1度!!!チャージングキック!!!」

「!」
頑張るが、やはり出来ない。

「倉庫」

倉庫でフキチャは何かを探していた。

「えっと・・・確か・・・この辺に・・・あった!!!」

フキチャが取り出したのは、ぼろぼろになったルーズリーフだった。

「良かった。幸い、全部はずれてない。」

フキチャは、パンパンと埃をとった。

(待つてる)・・・ロサイル君。チャージングキックを成功させよう!!)

道場)

「チャージングキック!!」

何度やっても炎が1点に集まらなかった。

「ねえエリスさん。これにはコツとかないの?」

リラが尋ねた。

「生憎、呪文系しか出来ないのでから・・・それに、炎の手なんて身近にいなかったし、勉強しようとも思いませんでしたからね。」

エリスも申し訳なさそうに答える。

そのとき、ドアが開いた。

「やあ!おまたせ!」

フキチャが戻ってきた。

「何探してたんですか?」

ロサイルが尋ねる。

「これだよ。」

そう言つてフキチャは、ぼろぼろのルーズリーフを出した。

「汚ねえルーズリーフだな・・・誰のですか?」

「ジョゴウジックロウズ。君のお父さんのだよ。」

「お父さんの・・・!?」

「知つてのとおり、彼はドイノール戦争で命を亡くした。けど、これは知らないだろう。彼は僕の幼馴染で大親友だった。それに彼は世界一の炎の手の使い手と言われた。」

「世界一の・・・」

「普段誰にも見せない物だが・・・息子さんだったら見てもいいだろう。彼が残した、『炎の手の書』を。」

そう言つて、父が残した書を、ロサイルに渡した。

「早速・・・読んでみていいですか？」

「もちろんだ。」

ロサイルはルーズリーフを開いた。

とても薄くて、汚い字だった。

でも何故だか懐かしい感じがする。

色々載っている中、炎のチャージ・チャージングキックのページを開いた。

「なにになに・・・『チャージングキックをする際、よく気づかない者がいるが、重要となるのは跳ぶ時の力だ。しかし、ただ思いつきり跳ぶだけじゃだめ。何故ならその後、力がゆるみ、炎が体全体に行つてしまうからだ。跳んだときの力のまま、空に舞い上がりキックをすると、完璧なチャージングキックとなる。』・・・か。」

言われた通りやってみた。

お父さんの言葉を信じて・・・

跳ぶときに、大きな力を加えた。

さつきよりもずっと高くにいる。

そのままの力で跳んでいると、炎が足にあつた。

そのまま、思いつきりにキックをした。

「大成功だ、ロサイル君。」

「すごいじゃん！ロサイル。」

「やりましたね！！」

3人も褒めてくれた。

「しかし・・・1週間の予定が・・・3日で出来てしまったな・・・」
「フキチャが言った。」

「その上、もう教えることはないな・・・卒業!!!」

「早!!!!!!」

ロサイルとリラが言う。

「2人とも本当によくやった。その上、才能がすごく感じられる。」

「これからも精進しなさい。」

「ありがとうございます!!!」

そう言つて、3人は道場を出て行った。

「なあ、ジヨゴウジよ。お前さんの息子は・・・お前を超えるかも
しれんぞ。天国から見守つてやれ。」

第28話 お父さんの書（後書き）

次話で、フラージャ・特訓編は終了です。
・・・早！！！

第29話 優しく背中を・・・(前書き)

フラージャ・特訓編終了です。

29話どうぞー！！

第29話 優しく背中を・・・

フラー ज्या 特訓場で修行を終え、3人はナー ज्याの家に行った。

「そつか・・・もう旅立つちゃうのか。」

「うん。色々ありがとう。ナー ज्याさん。」

「まあ、もう夕方だし一晩だけ休んでいきなさい。」

「ありがとう。」

「それじゃあ、お休み。」

「お休み。」

そう言つてロサイルは、部屋に行った。

ナー ज्याはエグレスツタ村の集合写真を眺めていた。

皆、今では考えられないほど笑顔だった。

そんな写真にナー ज्याはしゃべりかけた。

「皆・・・あんな小さかったロサイルが、世界を救おうとします。

時がたつて本当に早いね。」

もちろん写真からは返事がない。

「バレンアも、どこにいるか分からないけど、彼ならきっと皆を笑

顔にしている。」

少し微笑みながらナー ज्याは言った。

「だから、2人の背中を優しく押してあげてください。」

写真からは全く返事なかったが、笑ってる写真を見ると快く了

解してくれた様に感じた。

それを感じたナー ज्याも笑った。

（翌朝）

ロサイル、リラ、エリスの3人が起きてくる。

「おはよう、ナージャさん。」

「「おはようございます。」」

「おはよう、3人とも。」

ナージャは朝ごはんを作っていた。
目玉焼きとパンがあった。

出来た朝ごはんを4人で食べる。

その時、ナージャが3人に聞いた。

「3人は、これからどこ行くの？」

「昨日話し合って、ガルナタスに行こうと思います。」

リラが答える。

「ガルナタスか……確か、機械工業がとっても盛んな場所よね？」

「はい。そこから、リカトル キソ・リヤ エブナーファ デューナで行こうと思います。」

「しっかり考えてるのね。これならロサイルの事も安心ね。」

「何だよ。俺1人じゃ危ないみたいなの言い方。」

ロサイルが膨れながら言う。

「その通りなんだけどね。」

ナージャが普通に言う。

「ごちそうさま。よし！行くぞ。二人とも。」

「「うん（はい）！！！！」」

「「お世話になりました。」」

リラとエリスが頭を下げる。

「ありがとな。」

軽くロサイルも礼を言う。

「こっちこそ、貴重な話が出来たよ。ありがとう。旅、頑張ってるね。」

「！！！！」

「「「ありがとうございます」」」
もう1度頭を下げて、3人はフラー ज्याを出て行った。

ナー ज्याはその後、もう1回写真に語りかけた。

「昨日も言ったけど、本当に時がたつのは早いね。ロサイルが私より大きかったです。」

嬉しそうに言ったが、寂しそうにも聞こえた。

でも、写真の皆は笑ってた・・・

第29話 優しく背中を・・・（後書き）

次回は、フラージャ編の設定です。

第30話 最先端の技術、ガルナタス!! (前書き)

30話到達!!!

やっとだ・・・

新章です!

どうぞ!!!

第30話 最先端の技術、ガルナタス！！

3人はフラー ज्याを離れ、ガルナタスを目指していた。ここからは町が増えてきて、発展した世界が見れる。だが、道中には村もある。

そんな最先端の技術を誇った地方に出る。

「おお！地面がコンクリートになってる！！」

「てことは、もう少しだね」

「凄いですね。コンクリートって初めて見ました」

普通の地面がコンクリートに変わっていく。

これは、田舎と都会の分かれ目のような物。

だんだんとガルナタスが近づいている証拠だ。

「お！あそこじゃね？」

ロサイルが指さした先には、大きな塔が真ん中にある町だ。

「そう。あれがガルナタスだよ」

ついに、ガルナタスに到着した。

（ガルナタス）

「すつご~~~~い！！！！！！」

こんな都会を見たことのないロサイルとエリスは、興奮気味だった。リラは色々と旅行したことがある。

当たり前に通っている路上電車。

真ん中に聳え立つツインタワー。

様々な機械が発明されている工場。

飛び交う飛行機やヘリコプター。

2人は宿屋に向かって走っていった。
「・・・全く・・・」
リラはあきれた様子で2人を追った。

～翌朝～

「じゃあナータス工場に行く。文句ないね？」
「は～～～い」
ナータス工場とはガルナタスの中でも、最先端の技術を誇る工場。宇宙空間のような高速道路や、ツインタワーもこの工場が造ったものだ。

見学は自由で、お茶を飲んだり、子供が退屈しないような技術の遊具もあるらしい。

「うっし！じゃあ行くよ！！」
「おーーーーー！！！！」
3人はナータス工場に向かった。

～ナータス工場～

「でっけ～～～～！！！！」
「大きいですね～～～～！！！！」
ここでも興奮する2人。

そこに向こうから人がやって来た。

「こんにちは、案内人を勤めさせていただきます、ノプフラーヌです。よろしくお願いします」

「～～～よろしくお願いします！！！！」

「じゃあ、行こうか」

「～～～はい！！！！」

3人は工場内へ入っていった。

「はわわ〜．．．すごい大きなパイプですね〜．．．」
エリスがキラキラした目で見ている。

「これは、今開発している物なんだ。誰も考えていない最先端技術だよ」

「何なんですか？」

「町の歩く場所をエスカレータにする技術が進んでるんだ」

「町中をエスカレータ!？」

「まあ．．．立つてるだけで移動出来るという事なんだけどね」

「へえ．．．他にはどんなのがあるんですか？」

「バイクに空を飛べる機能をつけたり、書く場所じゃないところに書いちゃった時に、文字自体を違う場所に移動させる器具とかね」
どれも度肝を抜くような発想だった。

「昔は荒れ果てた村だったけど、横の山から金がたくさん見つかったね。それで発展していったんだ」

「人間、頑張ればそんなの出来るんだな〜．．．」

ロサイルが凄いと云った顔で言った。

「まあ、でも俺はちつぽけで温かい村が好きだったけどな」

「そ．．．それも．．．いいかもね」

何故かノプフラ―又は動揺した様子だった。

その頃、ガルナタス入り口付近．．．

「はあ〜．．．これがガルナタスカ．．．」

「ワン!！」

「皆笑って過ぎしやがって．．．今こそが!！」

「「復讐のとき!！」」

「ワン!！」

第30話 最先端の技術、ガルナタス！！（後書き）

次話、久しぶりに戦いの様相です。

第31話 やって来た3人と1匹(前書き)

バトルです(^-^)
なんか久しぶりだな

第31話 やって来た3人と1匹

「っ、ありがとうございます！」「っ、」
3人は工場見学を終え、宿屋に戻ろうとしていた・・・その時！！

ドーーーーーン！！！！

すさまじい爆音がガルナタスに響き渡った。
皆が爆音のした方を向いている。
なんと、宇宙空間のような高速道路が爆発して、一部が粉々になっている。

ドーーーーーン！！！！！！！！

今度はツインタワーが爆発した。
上の方が破損し、破損物が下に降ってきた。
破損物は地面に着陸し、凄い砂煙をあげる。

「どうなってるんだ!？」

「色んなところが破壊されていつてる」

「自然に起きたものとは思えませんね・・・」

3人も何が何だか分からない状況だった。
次々と破壊されていくガルナタス。それを嬉しそうに見る者たちがいた。

「あはははは！！ガルナタスほくかいい」

「あの時の憎しみはこれでは終わらない」

「もつとやるぜ!!」

「ワン!!」

入り口付近から、3人と1匹が入ってきた。

「あいつらか？破壊してるの」

「そうっばいね」

「許せませんね」

「戦うか!!」

「「うん（はい）!!」」

ロサイルはマッチに火をつけ、左手に引火させた。そして、剣にも引火させ、戦闘態勢が整った。

リラはリュックから本を取り出し、本を開いた。

エリスはポーチから札を出し、腰に持っていた弓矢を装備する。

「行くぜ!!」

「「おー!!」」

「ん？何か来るよ？」

「敵か・・・」

「とりあえず・・・あばれるぞ!!」

「ワン!!」

「私からいっくよ〜」

そう言うと、女は木の棒をとりだした。

「ウッドシュート!!」

木が多くに分裂し、凄い勢いで3人に襲い掛かった。

「うおーい！！何か来るぞ！！」

「まかせなさい！！ウィンドトルネード！！」

速術法をフレンジャで身につけたリラは、今までの3倍近くの早さで術を出した。

木はぼろぼろとその場に散った。

「むっ……」

「へっ、結構早いね。速術法か……」

静かそうに喋っていた男が、叫んだ。

「ピッチ！！！！」

「ワン！！！！」

「ゴーシュートボーン！！」

「伏せ札！光の弓剣！！」

ばらばらになって飛んでくる骨を、いくつもの光の矢で散らした。

「本当に意外だ。ガルナタスにまだここまでやれる奴がいたとは……」

「」

「生憎、ここ出身じゃないですよ」

「ミーモ。こいつは俺とピッチが殺^やる。お前はそっちの女を頼む」

「りょっかい！」

「俺はこのガキだな」

「頼むぞ、リキリヨウ」

「分かったよ、ヴァーム」

「さっき見たけど、あんたトルネード術を使えるのね」

「それがどうしたの？」

「なんでもなっい」

(同級生だったら殴り殺してるなこいつ)

こちらは、リラとミーモと呼ばれていた女との戦い。

「ひとまず名乗っとくよ。私はミーモ。ミーちゃんって呼んでいい

「よ」

「私はリラ。ちなみにミーちゃんとは絶対に呼ばない」

「そつ。まあいつか。敵なんだし」

すると、ミーモはまた木の棒を取り出した。

「ウッドハンマー！！！！」

そう叫ぶと大きな木のハンマーが現れた。

「でか・・・」

「死ね～～～」

「うざいな・・・本当に・・・」

速術法を使って、呪文を唱えた。

「トルネードキラーガード！！！！」

風の刃のガードがリラを包み込んだ。

木のハンマーをゆっくり削っていく。

「む～～・・・しづとい・・・」

「まだまだいくよ・・・」

「こっちもだよ～だ！」

第31話 やって来た3人と1匹（後書き）

次話は、ロサイルとエリスの戦闘風景をやるつもりだと思います。

第32話 激闘 ロサイルとエリス（前書き）

32話です。

「た・・・倒せないじゃん」

今のチャージングキックは間違いなくクリーンヒットした。それでもまだまだ立てるといふことは、すでに勝ち目がない。

「ちくしょー・・・」

「ふはははは！諦めたか！」

リキリヨウは高らかに笑っている。

「俺には時間がないからな。さっさと殺しちまいたいんだよ」

「はつきり言っつて、お前の攻撃をかわす自信はある」

「はっ！なめやがっつて・・・」

「初めに名乗っつておこつ。僕はヴァーム。こつちが犬のピッチ」

「ワン！！」

「私はエリスです。正々堂々戦いましょう！！」

そう言っつて、エリスは光の弓剣を取り出した。

「はー！！！！」

弓剣を持ったエリスがヴァームに襲い掛かった。

「ピッチー！！」

「ワン！！」

「ボーンナイトドッグ！！」

そう言っつと、犬のピッチはみるみると凶暴な目つきになった。

一方ヴァームは、とても大きい槍を持っている。

「死んでもらう」

ヴァームが槍を突き出した。

エリスはそれを、弓剣で受け止める。

（力が・・・凄い・・・）

「これで苦しかったらお前は終わりだ」

「え！？」

向こう側から、ピッチが猛ダッシュでこつちに向かっている。

そして、大きな口を開けた。

「え！？ちよっ・・・」

ピッチはエリスの肩に噛み付いた。

エリスの肩からは、血があふれ出す。

「くっ・・・」

「終わりだな」

ヴァームの槍がエリスに襲い掛かった・・・

第32話 激闘 ロサイルとエリス（後書き）

次話はリラの方をやりたいと思います。

第33話 まさかの結末（前書き）

遅れてすみませんでした。
33話です。

第33話 まさかの結末

「それ、ウツドシュート!!」

「何度やっても無駄だつて!!」

リラとミーモは、同じような戦いを繰り返していた。

打たれてはバラバラにし、打たれてはバラバラにする。そういった戦いだ。

「にゅ〜…そろそろ食らつてよ〜」

「食らうわけないでしょ!!」

「まあ、いいや。ウツドシュート!!」

ミーモはまたもや木のシュートを撃ってきた。

「何度やつても同じだつて言ってるでしょ!! ウィンドトルネード」

リラの手から爆風が吹き荒れる。

「遅いよ〜」

リラの後ろから声が聞こえた。このうつとしい喋り方は言うまでもなくミーモだ。

「ウツドハンマー!!」

ミーモは思いつきりリラを叩きつけた。

「くそっ…ん？」

リラは色々と手を動かしてみた。ついでに足や腕、あらゆるところを動かしてみた。

「やっぱり…全然痛くない」

確かにリラはさつき、ミーモのウツドハンマーをモロに食らった。だが不思議なことに、どこも痛くない。背中にちよつとしたかすり傷がついた程度だ。

「もしかして…威力が弱い？」

「にゅ〜…何で普通に立つてられるの〜？」

(威力とかどうでもよくなった…こいつをとにかく殴りたい)

リラはミーモの喋り方にイライラしていた。可愛くもないのに可愛い喋り方・・・これがぶりっ子ってやつか・・・とリラは覚える。
「もう1回食らえ~~~~ウッドハンマー」

「うっとおしい・・・」

リラは速術法を使わずに本をなぞった。速さではなく、最大の威力を出すためだ。

「死ね~~~~」

「お前が死ね。アイストルネードエターナル!!」

アイストルネードとは、比喩物にならないほどの大きな爆風がミーモを襲った。女が怒ると本当に怖いものだ。

そしてミーモはあっけなくやられた。

「・・・まさか、こんなに弱かったとは・・・」

「よ・・・弱くないもん・・・」

あっけなくやられたミーモに、リラは少しあきれた様子だった。

「1つ聞くけど・・・何でガルナタスの建物壊したの？」

「言わな~~~~い」

「アイストルネー・・・」

「ちよっ・・・ちよつと待って!!話を聞いて!!」

「分かった分かった。しょうもない話だったら・・・」

「まじめな話だから!!」

ミーモはこの上ないほど怯えていた。それほどアイストルネードエターナルが痛かったのだろう。

「壊すわけは色々あるけど・・・どうせ言うなら、リキリョウとヴ

アーム両方をやっつけてからでいいかな？」

「構わないけど・・・私たちが負けたら？」

「壊しまくって言わな~~~~い」

「アイストルネー・・・」

「すみません!すみません!」

こうしてあっけない戦いは幕を閉じた。

第33話 まさかの結末（後書き）

次話はエリスの方やりたいと思います。

第34話 あっけない戦い(前書き)

遅れてすみません。

第34話 あっけない戦い

「伏せ札！光の盾！」

エリスが現代の札、伏せ札を出すと、光に包まれた盾がヴァームの槍をはじき返した。

そのまま、弓剣を構えてヴァームとピッチに突っ込んでいった。

「食らいなさい！！！」

一気に突き刺す勢いで、突っ込んでいくエリス。

そこからまさかの一言が……

「ひいひい！！ごめんなさい！」

エリスの勢いが消え、しばらく沈黙が続く。

(今こいつ、ごめんなさいって……)

エリスは、弓剣の先端部分をヴァームに向けてみた。

「ひいひい……」

弓剣の先端部分に完全にびびっている事が判明。何だか弱いものいじめをしているようだ。

エリスとヴァームは話し合った。

「あの……もしかして先端恐怖症？」

「そんなことないよ！全部が怖いよ！」

先端恐怖症より酷かった。

「ふっ……今ので分かったさ。僕には防御力が足りないのさ」

まだ頑張っつてクールキャラを演じようとするヴァーム。横にいる犬のピッチは捨て犬のようになっていた。

「あの……それより聞きたいんですけど……」

「何ですか？」

いきなりの敬語だ。

「何でガルナタスを破壊しようと思ったんですか？」

「それは、他の決着がついてからだ。まっ、ミーモは多分やられるだろうな。あいつも俺と同じ、強がりだ。だが……リキリヨウは強いさ。結構バカだけどな」
（てことは……あとはロサイル君にかかっているんだ……頑張れ、ロサイル君！）

その頃のロサイルとリキリヨウ

スピードは全然ないが、パワーはとても凄かった。ロサイルがいる地面も地割れになっている。あれをくらったらひとたまりもないだろう。防御力も凄まじいリキリヨウには、ロサイルの攻撃は全く効かなかった。フラージャで取得したチャージングキックもだ。

「ほら！少年！かわしてばかりじゃ勝てないぜ！」

「くそっ……」

もちろんスピードが速いロサイルは、攻撃をかわせてはいた。

しかし、攻撃も効かないので、勝てる確率はなかった。

「そろそろ死んでもらうぜ」

上にかわそうと思ったロサイルだったが、上にリキリヨウがいた。

「しまっ……」

「終わりだ。少年。ダイヤモンドパンチ！」

ダイヤモンドを握ってパンチしてきた。

ロサイルは終わった……そう思った。……しかし。

「ん？」

リキリヨウの手から、赤い液体が出ていた。それは血だった。

「いって……！！手え切った！」

どうやら、一番硬いダイヤモンドを握りすぎて血が出てきたようだ。

「いっつて〜！いっつて〜！！」

ダイヤモンドがこちらに転がってきた。何だか面倒くさくなってきたロサイルは、ダイヤモンドを大きく上に投げた。それをめがけてキックした。

「チャージングキック！！」

炎をまとったダイヤモンドがリキリヨウに襲い掛かる。クリーンヒットし、リキリヨウはその場に倒れた。

「ふう………一件落着」

まさかで、2つもあっけない戦いとなった……

第34話 あっけない戦い（後書き）

感想、評価、お気に入り登録お願いします。

第35話 ファルシーとガルナタス（前書き）

早くに次話投稿できました！
35話です！

第35話 ファルシーとガルナタス

この戦いであっけなくやられた3人と1匹。

1番初めに口を開いたのはヴァームだ。

「俺たちの負けだ。約束は約束。話してやる。ガルナタスを壊そうとした理由」

それは、10年前の事……

俺たちはまだ6・7歳。小学1年生の年齢だった。3人が住んでいた場所は、今はガルナタスになっているが、元々は小さな村、ファルシー村だった。けっして裕福な暮らしはできてなかったが、ファルシーの温かい雰囲気が好きだった。いつまでも楽しく暮らせる…… そう思ってた……

あの悲劇が起きるまでは……

その日……村にある連中がやってきた。俺たちは怖くて、家の中から様子を見ていた。だから取引内容はよく分からなかった。しかし、一瞬目を疑うような事を、あいつらはした。全村民の前で、村長を殺したんだ。それで一気に村民たちは恐怖に満ち溢れたさ。もちろん俺たちも……

そしたら次は、村を炎で埋め尽くした。村民たちはあわてて家を飛び出したんだ。そしたらそいつらは次々と村民を殺していった。笑顔で……

そのまま村は破壊され、今は発展した町、ガルナタスになっている。

なんとか生き残った俺とミーモとリキリヨウは、近くの町フラージヤに行った。そこにあつた新聞で驚くべき真実と遭遇したんだ……

『教皇の命令により、ファルシー村消滅。ファルシー村を破壊したのは、異端審問官のガルナタス。今後は、ガルナタスという町名に変えられ、発展してゆく町にすると、教皇は答えた』

この時に俺たちは殺意が芽生えた。教皇を殺す。それしか脳になかった。

そしてこの10年間。俺たちは復讐のためだけに生きてきた。元々能力がなかった俺とミーモは、能力を得るために10年を使った。元々はあつたりキリヨウは、勉強が大嫌いなのに教皇と異端審問官について10年間調べ上げた。ピッチは、ガルナタスに捨ててあつた犬だった。

そして、もっと嫌だったのが、ガルナタスで笑顔で暮らしてる奴らだった。過去の苦しみも知らずに暮らしてるのが本当に腹が立った。いつしか、そいつらも復讐のターゲットとなった。

そして今、復讐の時が来ている……………

「……………そういう事だ」

本当にすべての事を話したんだろう。ヴァームの顔には憎しみが表れている。でも少し悲しそうで、寂しそうだ。

「でも……………やっぱり復讐は間違ってるよ」

「そうですね！復讐はダメです！！」

「……………俺はそうは思わない」

ロサイルの口からはそう答えが出た……………

第35話 ファルシーとガルナタス（後書き）

気に入っていただけたら、お気に入り登録お願いします！

第36話 その強さ(前書き)

ガルナタス編(機械工業の町編)終了!
早かった気もします。

第36話 その強さ

『俺はそうは思わない』

これが復讐に関しての、ロサイルの答えだった。

リラとエリスは、思いもよらない言葉にびっくりしていた。

「ちよっ……何言ってるの！？ロサイル！」

「そうですよ！復讐なんてダメに決まってるじゃないですか！」

当たり前前の反論がロサイルに届く。

するとロサイルはヴァームたちの側に行って、話し始めた。

「まあ、復讐なんて、残るのは悲しみだけだけどさ……本当に寂しいし、悲しいんだよ。自分の大好きな場所や人がなくなっていくのって……」

泣きながら、ロサイルは言った。

その姿を見たヴァームたちは不思議そうに立っていた。

「おいおい、何だよ。お前がそんな被害にあったみたいじゃねえか」
リキリヨウが話す。

それに対して、ロサイルが答える。

「あつたんだ。俺はエグレサツタ村の出身でさ……異端審問官に何もかも壊された。お前達と一緒になんだよ」

「だったら……何故、お前はそんな能力があるのに、復讐しようとして……仇討ちしようと思わなかった!？」

ヴァームが張り上げた声で聞いた。

「俺だって最初は、復讐しか頭になかった気がする。でも、エリスとか見てるとさ……被害にあってるのは、エグレサツタ村じゃなく、全国だって感じたからなんだ。だから復讐はやめて、腐った世界を変えようと思えたわけだな」

「……」

「そのためにも、教皇や異端審問官にあって、直接勝負する気だ。世界を変えるために……」

それを聞いた途端、ヴァームたちは泣き出した。

「おいおい……どうしたんだよ……」

ロサイルが少し慌てる。

「うらやましいよ……君の強さが……仲間の強さが……」

「そうだな……」

「私たちにもこんな強さがあつたら、こんなことしなくて良かったのかもね」

「ワン」

「僕達も、世界を変えよう。平和な世界に……」

「直接対決になったら私たちも戦う」

「だから、それまでに力つけとくよ」

ヴァームたちはそんな決意を述べた。

それはダイヤモンドよりも固いものだろう。

「ありがとう、ロサイル。君のおかげで大切なことが思い出せたよ」
ヴァームたちは深々と礼をした。

「俺たちはもつと強くなって、世界を変えるよ」

「その時はよろしくね」

そう言つて、3人と1匹はガルナタスを出て行った。

「さうて、俺たちも行くか」

「次はどこに行くんですっけ？」

「リカトル村だね」

「よし！行くか！」

「おおー！」

そうして、3人も旅立った……

第36話 その強さ（後書き）

次はキャラ設定です。

第37話 マジックとリカトル村（前書き）

新章です！

第37話 マジックとリカトル村

ガルナタスを後にした3人は、リカトル村へ向かっていた。

「リラ。お前いつチラシなんかとったんだ？」

「ガルナタスでとったんだ。今日明日、サーカスとかマジックとかあるみたいで……」

「サーカスですか……おもしろそうですね！」

どうやら、リカトル村では今日明日にサーカスとマジック大会があるようだ。

「なあリラ！それ見に行こうぜ！」

「いいよ。でも、サーカスは時間的に見れないね」

「じゃあ、マジック大会を見ましようよ」

田舎者のロサイルとエリスは、どちらかというとサーカスの方が見たかったんだろう。でも、マジックにも興味津々だ。

そのまま、リカトル村へ向かっていった。

「リカトル村」

リカトル村は、サーカスを終え、マジック大会がもうすぐ始まるころとしていた。

「お！いいタイミングじゃん。ほら、ロサイル！エリスさん！」

「「おー！」」

ロサイルとエリスのテンションは最高潮だ。

すると、司会がステージに上がってきた。

「さあ！本日の第2イベント！マジック大会を開催します！本日は、話題沸騰中のこの方に来ていただきました！どうぞ！」

司会がそう言った後、後ろのほうから人が出てきた。もちろんそのマジシャンだ。

その時、ロサイルは目をこすった。

あの黒いマント、ステッキ。そこだけでは何の変哲もないが、特徴的な赤色の帽子。懐かしい感じがずつとしていた。その男の名は……
「話題沸騰中のマジシャン。『バレニア＝ウルビーノ』さんです！」
「バレニア……」
バレニアとは、ロサイルの幼馴染でエグレサツタ村の出身だ。戦争の1日前に一流のマジシャンになるべく旅立ったのだ。
バレニアが何回かマジックをやっていくが、小さい頃から練習していたものばかりだった。
それが、ロサイルにはちよつと嬉しかった。
大盛況のまま、マジック大会は終了した……

「バレニア・楽屋」

「ふう〜……お疲れ！」

「お疲れ様です」

マジック大会を終えたバレニアは楽屋にいた。

すると、1人のスタッフが話しかけてきた。

「ウルビーノ様。お客様がお見えになつておられます」

「え〜……帰しておいてよ。本当に知り合いか分からないし……」

「しかし、同じ出身地だと言つておられるのですが……」

「同じ出身地……」

「よー！」

すると、スタッフの後ろから声が聞こえた。

「ロサイル……ロサイルなのか!？」

「そうだけど。バレニア」

久しぶりの再開に、2人とも嬉しそうだ。

「私たちは席を外しましょうか」

「はい……」

スタッフの2人は楽屋を出て行った。

「ロサイル。どうしてここに……」

「エグレサッタから来たんだ。知ってるだろ？ 異端審問官が村を破壊したこと」

「うん……てつきりロサイルも巻き込まれちゃったと思ってて……」

「バーカ。そんな簡単に死ねるかよ」

その日は、ずっと話をしていた。

エグレサッタの事、マジックの事、教皇の事。とにかくたくさんだ。

「でさ、ロサイル。そっちの2人は？」

バレンアが言っている2人とは、リラとエリスのことだ。

「こいつらは、一緒に旅をしている仲間だ」

「リラと申します」

「エリスです」

「僕はバレンア。ロサイルの幼馴染なんだ」

そこからは、4人で話し合い、楽しい1日を過ごした。

その夜……

「ここがリカトル村ね」

「ああ、明日から破壊する村だ」

第37話 マジックとリカトル村（後書き）

次話はいつらも出てくる……

第38話 再戦（前書き）

あいつら登場！

あいつらいる話個人的に楽しい……

38話でござい！

第38話 再戦

その夜に、なかなか眠れずに目が覚めたのは、ロサイルとバレンアだった。

「眠れないの？ロサイル」

「ああ、何だか眠れない」

ロサイルはぼんやりと窓の外を見た。

するとそこには、ついさつき入ってきたと思われる2人組がいた。それを見たロサイルの目つきは鋭くなった。

「どうしたのロサイル？そんな恐い顔して……」

「……異端審問官だ」

「まさか……エグレサツタを滅ぼした!？」

「ああ」

リカトル村に入ってきたのは、エグレサツタ村を滅ぼした異端審問官だった。

何をするかは分からないが、嫌な気がしてならない。

「ちよつとロサイル！異端審問官、僕達の宿に入ってくるよ！」

異端審問官がロサイルたちの泊まってる宿屋に入るのが見えた。

覗き穴から確認すると、隣の部屋に入っていくのが見えた。

なんと、隣の部屋になってしまった。

「ちよつとロサイル……隣になっちゃったよ……」

慌てた様子のバレンア。それに対してロサイルは……

「盗み聞きするぞ」

攻撃的だった。

「ちよつ……何言ってるの!？」

「あいつらの事だ……きつとまた何かたくらんである」

こうなったロサイルはとめられないと悟ったバレンアは仕方なく盗み聞きすることにした……

というわけで、異端審問官の会話である。

「シヨウザン。今回はこの村を滅ぼして盛んな町にするそうよ」

「ガルナタスの再現か……」

「ええ。滅ぼすことなら……簡単でしょ？」

「そうだな。こういった小さな村は、大きな力を持っていないからな」

「エグレサッタと陰陽の隠れ里も楽勝だったものね」

「……………ああ。そうだな……………」

「ロサイル……………あいつら滅ぼすって言ったよね？」

「ああ。間違いなく」

異端審問官はまたもや、小さな村を滅ぼすようだ。

そしてそれを発展した町にする……………

「ったく。小さな村の居心地も知らないで……………何考えてるんだ、教皇は」

「本当だね。こういふところの幸せを知らないんだね……………」

そう会話をした後、ロサイルはベッドにもぐった。

「ロサイル眠くなった？」

「明日に備えて睡眠をとるだけだ」

その返事を聞いたバレンアはニツと笑った。

「じゃあ、僕も寝よつと」

バレンアもベッドにもぐった。

（翌日）

ロサイルは、寝ていたリラとエリスに事情を話した。

「あいつらまた……………」

「阻止しましょう」

「ええ。協力する」

2人とも快く賛成してくれた。

「さあ、やるわよ。シヨウザン」

「ああ」

シヨウザンは杖を高く上げ、炎の球を作り出した。

その球を投げようとした瞬間……

炎の球に1本の矢が刺さった。

「何だ!？」

その矢はずつと光り続けている。

「久しぶりだな。異端審問官」

「お前か……ロサイル」

その矢はエリスの物で、炎の球を投げるのを阻止した。

「つくづくとお前らは邪魔をするんだな……」

「んじゃあ、陰陽の隠れ里の仕返しと行くぜ!」

そうして戦いは、シヨウザンとロサイル&バレンア。

レミーとリラ&エリスに分かれて対決となった……

第38話 再戦（後書き）

次話はロサイル&バレンアです。

バレンアの戦い方は、個人的に楽しい……（本日2回目）

第39話 マジック爆弾（前書き）

遅れてすいませんでした。

テストがあったので……（まだ終わってないけど……）

第39話 マジック爆弾

ロサイルとバレンアは、異端審問官のシヨウザンとバトルを始めようとしていた。

場所は、村から外れた山だ。

ロサイルはマツチに火をつけ、左手で握りつぶした。そして、炎の手を発動させる。

バレンアは、シルクハットとステッキを取り出している。どんな戦い方をするのかは、ロサイルも知らなかった。

シヨウザンは、剣を取り出して、戦闘態勢になっている。

「始めようか。ロサイル」

「ああ」

「もう、隠す技はないからな……最初から全力で行くぞ」
シヨウザンはそう言うと、スッと消えた。

陰陽の隠れ里でやられたフォーース技とかいうやつだ。突然に消えて突然にどこかに現れ、不意をつかれる厄介な技だ。

シヨウザンはロサイルの目の前に現れた。

それに反応したロサイルはすぐに剣を振る。

だがすぐに消え、気づいたときにはロサイルの後ろにいた。

「やっぱり遅い！」

シヨウザンは一気に斬りかかった。

しかしそこにロサイルの姿はなかった。

「何……」

ロサイルはシヨウザンの後ろにいた。

炎のチャージ状態で、瞬間でかわしたのだ。

「くらえ！チャージングキック！」

チャージングキックはシヨウザンにクリーンヒットした。

地面に手足をつけ、シヨウザンは後ろに下がった。

「へえ、ロサイルってそんな技持ってたんだ」

バレンアは隣で感心していた。

「感心しないで、お前も戦えよ」

「分かったよ」

そう言うと、バレンアは箱を持ってきた。

ロサイルとシヨウザンは今は何をするか分からなかった。

そしてバレンアは、箱のふたを開けた。

「ささ！シヨウザンっていう異端審問官さん！この箱に入って！」

その言葉を聞いて、2人は理解した。

「いやだ」

「何で？」

「剣で刺すだろ」

その答えが返ってきたとき、バレンアはロサイルの元へと行った。

「異端審問官って賢いんだね。ばれちゃった」

「普通に分かるぞ」

「じゃ……じゃあ！違う技にするよ」

そう言うと、バレンアは赤い球を空に向けて投げた。

するとその球は、爆発を起こした。

「これ使える？」

「使える使える」

「よし！」

バレンアはシヨウザンに接近していった。

そして赤い球を投げた。

さっきの爆発を見ていたシヨウザンはもちろんかわした。

それに対して、バレンアは突撃し続けた。

そしてバレンアはニツと笑った。

すると、8つの赤い球が現れた。

「なっ……」

「僕はマジシャンなんだ。赤い球くらいいくらでも出せる！」

バレンアは、8つ一辺に投げた。

シヨウザンのところで大きな爆発が起きる。

どこからも出てくる気配はなかったが……

「遅い……」

シヨウザンはフォース技を使って、バレンアの後ろにいた。

第39話 マジック爆弾（後書き）

次話は、リラ&エリスとレミーです！

第40話 即終了の戦い(前書き)

40話達成だ！

……その割には残酷な話になってしまった。

それと、遅れて申し訳ございませんでした。

第40話 即終了の戦い

一方、リラとエリス、レミーは、ロサイルたちとは違った草原にいた。

「久しぶりだね。リラ皇女」

「久しぶり。こちらの女性も見覚えあるでしょ？」

「ああ、あるな。陰陽の隠れ里の少女じゃないか。生きてたんだな」

「あれくらいじゃ死なないよ」

「そうか……じゃあ、始めようか」

そう言つと、レミーは杖から剣を引き抜き、戦闘態勢になった。

リラも本を開き、エリスは札を使って光の弓剣を装備した。

「じゃっ、私から行くよ。ちよつと試したいものがあるからね」

レミーがそう言った。そして、剣を構えて突進してきた。

リラは本を開き、呪文で対応した。

「ウインドトルネー……」

「ド」を言う前には、目の前にレミーがいた。

「なっ……!!」

そのままレミーは、リラを斬りつけた。そのままエリスの方にも突進し、エリスも斬りつけた。

レミーは、手をグーパーして、にこつと笑った。

「やっぱり凄いな……これは」

凄く満足そうに言った。

「リラ皇女、陰陽の隠れ里の少女。準備体操は終わり。今から本気の戦いといきましょう」

リラとエリスは、血を流しながらそれを聞いていた。あの速さでまだ準備体操なのだ。そのことについて、2人は驚くしかなかった。

「じゃあ、もう1回行ってみようか」

そう言つて、レミーはまた剣を構えた。

「トルネードキラーガード！」

リラが咄嗟に呪文を唱えた。リラとエリスの周りに風の盾が出てきた。しつかり対策をした。……だが、

「意味ないよ。リラ皇女」

トルネードキラーガードをあっさり破って、リラに迫った。

「うそでしょ!？」

レミーはまたもやリラを斬った。

リラはその場に倒れて、動けなくなった。

「陰陽の隠れ里の少女は傷つけないであげるよ。今度は逆の立場になっちゃったね」

そう言って、レミーは去って行った。

*

「リラさん！リラさん！」

リラは血を流したまま、意識が回復しない。

エリスはリラを背負って、リカトル村を目指した……

第40話 即終了の戦い（後書き）

次話、ロサイル&バレンアのほうです。

第41話 滅ぼされた村

リラとエリスをあっさり倒してしまったレミーは、再びリカトル村へと帰っていった。

「はあ〜……あの2人、弱かったな〜」

そう言つて、レミーは右手を見る。

「これが『じゆんきんこうせき純金鉱石』の能力か……」

ニツと笑いながら、リカトル村を見る。

「もつと試してみたいな……初めに、リカトル村を滅ぼすか……」

そう言つて、レミーはリカトル村へと向かった。

*

赤い球（爆弾）の爆風に巻き込まれたと思われたシヨウザンだったが、光のフォースでバレンアの後ろに移動していた。

「嘘でしょ？」

「遅いよ……」

バレンアにシヨウザンが斬りかかった。もちろんかわす余地などない。

「チャージングキック！」

そのところに、炎のチャージ状態から、ロサイルがシヨウザンにチャージングキックを命中させた。そのおかげで、バレンアはしつかりとシヨウザンとの距離をとった。シヨウザンは、後ろに吹き飛ばされた。

「俺たちは2人で戦ってるんだ。それを忘れるなよ！シヨウザン！」

「そうだったね。だが、レミーの方はもう終わってるだろうね」

フンツと笑いながらシヨウザンは言った。

それについて、2人とも疑問そうな表情だ。

「……リラ達が弱いとでも？」

「違う。レミーが……強すぎるんだよ」

「何でそんなこと言えるんだよ!?」

「さあ? 勝つたら……教えてあげるよ。そして、君たちは何故関係のない場所全てを救うかも教えてくれ。僕が勝つたら……」

「またかよ……」

この展開は、陰陽の隠れ里と同じだ。バレンアは意味が分からないだろう。ロサイルにはしつかりと分かった。本当のリベンジマッチしたいと……

「バレンア……ここは俺に……」

その時、リカトル村から大きな爆発が起きた。煙がモクモクと上がっている。

「まさか……レミー!」

シヨウザンがリカトル村へ向かおうとした。それをロサイルがとめた。

「シヨウザン。俺との勝負は終わってない。バレンア! 様子見てきてくれるか? シヨウザンとは……決着をつけなきゃいけないんだ」

「分かったよ。見てくる!」

バレンアはリカトル村へと走っていった。

「さあ始めようぜ。あの時のリベンジマッチだ!」

「さっさと倒して……リカトル村に行く!」

2人は剣を抜いて、突進していった……

*

エリスはリラをおぶってリカトル村の病院を目指していた。決して大きな病院ではないが、応急処置程度ならできるはずだ。そんな状況でリカトル村を見ると、大きな爆発が起きているのに気づく。

「あれは……」

エリスは思わず独り言をもらした。

「相当やばいことになってるんじゃない……」

エリスも急いでリカトル村を目指した。

*

レミーはリカトル村を滅ぼした。それでも満足しない表情だ。

「そうだ……この先のキソーリヤ、エブナーファも滅ぼすか……」
レミーは笑いながらキソーリヤへと向かっていった。

それぞれの戦いが激しさを増してきた。

果たしてロサイルたちは勝利できるのか……？

第41話 滅ぼされた村（後書き）

次話、いろいろとごちゃごちゃです！

第42話 激化！戦いと破壊

ロサイルとシヨウザンは、引き続きバトルを繰り広げていた。

「ロサイルも、少しはレベルが上がっているようだね」

「少しって思ってるで大怪我するぞ」

そう言つて、ロサイルはシヨウザン目掛けて突っ込んでいった。炎のチャージ状態で、目にも留まらぬスピードで、シヨウザンの前につけた。

「チャージングキック！」

そのまま、チャージングキックを仕掛けた。だが、シヨウザンはすぐに反応し、剣で受け止めた。

「甘いぞ……ロサイル」

「甘いのはお前だ！」

その瞬間に、炎のチャージを解除して、炎の手と剣の状態に戻った。そのまま一気に斬りかかる。シヨウザンもそれはかわせずに、そのまま斬られてしまった。

「強くなつたね……ロサイル」

「当たり前だ」

「なら……これでどうかな？」

すると、シヨウザンの姿が消えた。ライトフォースだ。いきなり消えて、どこからでもいきなり現れて、そのまま攻撃されたりしてしまふ厄介な技だ。この技をロサイルはやぶったことがない。

ロサイルは精神統一した。しっかりシヨウザンのいる場所を見る。後ろに気配を感じた。

「そこだ！」

ロサイルは勢いよく剣を振った。しかし、斬った感触がない。

「後ろだ！ロサイル！」

シヨウザンは後ろにいた。そのままロサイルに斬った。今度はロサイルが斬られてしまった。

「ちくしょー……」

「さあ、まだまだ行くよ！」

「こっちもだ！」

2人は再び剣を構えた。

*

一方バレンアは、リカトル村を目指して走っていた。

先ほど、リカトル村から大きな爆発が起きた。理由は分からないが、とにかく大惨事には違いない。

バレンアがリカトル村を目指している道中、リラをおぶったエリスと出会った。

「あつ、エリスさん」

「バレンア君！」

「どうしたんですかその傷！？リラさんなんか、特に……」

「異端審問官のレミーにやられて……」

エリスはうつむきながら答えた。

「そんなに強いんですか……レミーっていう異端審問官は……」

「あんなの……レミーじゃなかった」

「へ？」

「まるで、破壊にしか興味がない目をしていた。おそらく、彼女らはリカトル村を滅ぼし、発展した町に変えようとしているんだと思う」

「……詳しいんですね」

「私の出身地、陰陽の隠れ里も、新聞によってはそうだったから……」

その時、また爆発が起こった。しかし、リカトル村ではない。もっと遠いところだ。

「荒れてますね……とにかく、リカトル村を目指しましょう！……ここからは、僕がリラさんを背負います！」

「うん！行こう！」

2人はリカトル村へと走っていった。

*

そのころキソーリヤでは……

「ははははは……… 凄いよ……… 純金鉱石………」

レミーは、キソーリヤも滅ぼしてしまった。

「さあ、次はエブナーファだな………」

レミーは、エブナーファへと向かっていった。

第43話 レミーの意思

ロサイルとシヨウザンは変わらず激しい戦いを繰り広げていた。だが、まだフォース技が敗れないロサイルの方が、若干不利だった。シヨウザンは、炎のチャージのスピードにもちゃんと付いていつている。

「ロサイル……君も分かっているだろう？君のスピードじゃ、僕には勝てない」

「そんなこと知るか！」

ロサイルは、左手にグツと力を入れた。炎の球をシヨウザンに向けて投げる。

「こんな遅い球、通用しない」

あっさりとかわしてしまっただが、かわした先には、炎のチャージ状態のロサイルがいた。

「しまっ……」

「チャージングキック！」

炎が飛び散るキックは、シヨウザンにクリーンヒットした。

シヨウザンは、その場で膝を付き、蹴られた腹部を押さえた。

「くそ……君は不意打ちが上手だね……」

「お前は学習能力がないんじゃないの？」

「……ははは。それはこっちの台詞さ」

そう言うと、シヨウザンは光に包まれて消えてしまった。フォース技だ。ロサイルも少し戸惑ったが、ニツと笑みを浮かべた。

「いつものパターンでいくと……」

まず、今の俺の方向の後ろに出てくる。その後、振り向いたときの後ろをいつも突かれる。……ということとは……

「今向いてる方向に斬ればいいんだ！」

ロサイルは思いつきり剣を振った。……だが……

「残念。今度は早すぎたね」

後ろからズバツとシヨウザンに斬られた。

かなり深く斬られたようで、立つことが困難になった。

「ははは……またこんな展開か……」

ロサイルがそう言った。そして、剣を両手で握った。

「お前も来いよ……あの時の戦いみたいにさ……」

そういわれたシヨウザンは、笑みを浮かべて、両手で剣を握った。

「いいだろう。これで終わりにしてやる」

2人は一気にパワーを注入させた。そして、それを解き放つ。

「炎のビーム！」

「光のビーム！」

2つの光線が、一直線に飛び出した……

*

バレンアとエリスは、急いでリカトル村へと走っていた。大きな爆発があったのは、何かの危険信号のようだった。

そして、頑張つて走った結果、早くにリカトル村につくことが出来た。しかし……

「凄いことになってるな……これ」

バレンアたちが見た光景は、灰になったリカトル村だった。

「とりあえず、ここでリラさんの応急処置をしましょう。こんな状態だったら、誰も近寄らないでしょう」

エリスは、リラが持っている救急箱を取り出して、応急処置を始めた。バレンアは、異端審問官に警戒しながらリラを見守っていた。

リラの応急処置が一段落ついた時に、村に誰かが入ってきた。

「誰だ！？」

バレンアは入ってきた人に問いかける。

「おや？その姿は……陰陽の隠れ里の少女と、死に掛けのリラ皇女、そしてマジシャンのバレンア君か？」

正体は、異端審問官のレミーだった。凄く満足そうな表情で、こつちを見ている。

「何しに来たんだ？ここにはもう用はないはずだ」
バレンアが険しい表情で問いかける。

「おっと、そんな怖い顔をしないでくれよ。私はシヨウザンを迎えに来ただけなんだけど……結構手こずっているようだね……」

「……」

「君達に伝言を頼むよ。レミーは先にデューナに行ったって伝えておいてくれ」

そう言つて、レミーは村を出ようとした。

「ちよつと待てよ！」

「どうしたんだい、バレンア君」

バレンアが大きな声でレミーを呼び止めた。

「何で、こんなにも村を破壊していくんだよ……」

「教皇様の命令でね……こういったちつぽけな村を、素晴らしく発展した町に変えるためだよ」

「そんなことのために……温かい村を壊してるって言うのかよ!？」

「そういうことさ」

「テメーは間違つてると思わないのか!？」

「思わないな。むしろ正しいさ」

バレンアは我慢の限界のようだ。一気にレミーに突っ込もうとしたが、それをエリスが止めた。

レミーはクスツと笑いながら村を出て行った。

「何で止めたんですか!？」

「いま突っ込んでたら、確実に死んでたよ」

その返事が返ってきて、バレンアは歯を食いしばるしかなかった。

「それより……ロサイル君は大丈夫かな……?」

「大丈夫です。あいつは勝ちます」

そして、3人はロサイルの帰りを待った……

第43話 レミーの意思（後書き）

次話、ロサイルVSシヨウザン決着です。

第44話 ショウザンの意思(前書き)

前回と同じようなサブタイトルにしてみました！
ロサイルVSショウザン決着です！

第44話 ショウザンの意思

陰陽の隠れ里の時と同様、2つの光線が衝突する。2つとも一歩も引かず、ほぼ互角の戦いとなっている。

すると、一瞬ロサイルのビームの威力が弱まった。何が起きたか分からないショウザンだったが、そのまま光を注入し続けた。

「僕の勝ちだ。ロサイル」

「それはどうかな？」

何と、ロサイルの手には数本のマッチがあつた。ビームの威力が弱まったのは、片手で発射をしていたからだ。

マッチ全てに火をつけて、左手に注入した。すると、さっきよりも遙かに大きな炎のビームが発生した。

ショウザンの光のビームは耐え切れず、押し負けてしまった。

「こんなことが……」

「今回は……俺の勝ちだ」

ショウザンは、その場で倒れた。苦しそうにしている。もう動けないだろう。

「……僕の負けだな。約束通り、質問に答えようじゃないか」

お腹を抑えながらショウザンが言う。

「何で、村を破壊したりする？ 教皇の命令だとしても、何でそれに従うんだ？」

「……それが異端審問官の勤めだろ？ ただそれだけのことだ」

「お前は……このままでいいと思ってるのか？」

「……」

この質問の後は、長い沈黙が続いた。何故か、凄く悩んでいる。つつきり俺は、「思ってる」と答えると思ってた。

「……悪いがノーコメントだ。他にはあるのか？」

「ある。レミーが強いつて事だ。確かに強くなったかもしれないが……いくらなんでも早すぎないか？ リラ達だって、しっかりと成

長している」

「……それは、純金鉱石だ」

「純金鉱石？」

「以前、お前達と戦っただろう？ 陰陽の隠れ里で。そのときの秘宝って覚えてるか？ それが純金鉱石だ。人間の体内に取り込むことによつて、絶大な力を手に入れることが出来る。教皇様のために強くなるなら当然の選択だがな」

「やっぱりだ。シヨウザンは心の奥では教皇のやっていることを間違っていると感じている。もし、あいつが純金鉱石を使っていたら、ロサイルにやられるわけがない。リラでも簡単に半殺しの状態にされてしまっているのだから。」

「他はあるか……？」

「もう十分だ」

「そうか。なら俺は、レミーの元へに行く」

「そう言つて、シヨウザンはリカトル村へと向かおうとした。」

「シヨウザン！」

「……何だ？」

「間違つてると思つてるなら……行動に移してみるよな！」

「……デューナで待つてるぞ。ロサイル」

「その言葉を残したシヨウザンは、リカトル村へと行った。」

「同様にロサイルもリカトル村へ向かった……」

第44話 ショウザンの意思（後書き）

次話、小さな村のマジック編終了です。

第45話 笑顔の世界に……（前書き）

小さな村のマジック編完結です。

第45話 笑顔の世界に……

シヨウザンとの戦いを終えたロサイルは、リカトル村を目指して歩いた。ボロボロになった服の影響で少し肌寒かった。

歩くこと数分、ロサイルはリカトル村についた。

「これは……」

今のリカトル村を見て、何も言えなかった。来たときはあんなに活気のある村が、今はもう焼け野原だ。村民は誰1人いない。宿屋があった場所に誰かいたのは分かった。格好を見て、すぐにバレンアだと理解する。

「あ！ ロサイル！」

ロサイルに気づいたバレンアがこつちにやってきた。エリスもこつちを見た。だが、とても不安げな表情だった。

「あの異端審問官とは……？」

「俺が勝った。色んな情報を聞き出せたな。……それより……」

ロサイルの目に入るのは、やはり今のリラの状態だ。シヨウザンのいう事が当たっていた。すぐにやられたかは分からないが、かなりの怪我を負っている。しばらく目を覚ませないだろう。

「それとロサイル君……言わなきゃいけない大切なことがあるんだ

……」

エリスが強張った表情で言った。

「大切なこと？」

「うん。この先に、キソーリヤ、エブナーファがあるでしょ？ そこ……レミーに破壊されてしまったの」

ロサイルは驚いた表情を浮かべた。その表情は次第に怒りと化した。

ロサイルは何も言わず、リラを背負い、2人に言った。

「だったら、デューナに行くまでだ。あそこなら、リラの治療もちやんとしてくれる」

「そうね。行きましょ！」

「……僕も行っていいかな？」
バレンアがしぶしぶ言った。

「僕、皆を楽しませるためにマジシャンになったでしょ？　こんな世界じゃ……誰も楽しめないと思うんだ。だから……一緒に行かせてくれ！」

バレンアは、その場で頭を下げた。

ロサイルとエリスは、目を合わせてうなずく。

「当たり前だろ！　こっちこそよろしくな！」

「一緒に世界変えよ！」

「よし！　そうと決まれば、デューナへ行くぞ！」

『おー！！！』

かくして、4人はデューナへと向かっていった……

*

シヨウザンは、デューナにたどり着いた。

「あら？　結構遅かったのねシヨウザン」

レミーが笑顔で出迎える。

「……まあな」

「純金鉱石って最高ね。だって、あんなにも簡単に色んなもの破壊できるんだもん」

「……」

シヨウザンは黙って聞くしかなかった。

「ご苦労だったな2人とも」

ある人が2人に声をかけた。

すると、2人はすぐに礼をする。

「特にレミー。なかなかの活躍だった」

「ありがとうございます」

「まさか……エグレサッタの少年がここまでしぶとくやりますとは

ね……正直驚きです。次はおそらくここに来るでしょう。そこで…

…確実に息の根を止めなさい」

「……」

「かしこまりました……」

『教皇様』

第45話 笑顔の世界に……（後書き）

次回は設定です。

第46話 一大決心（前書き）

新章です！

第46話 一大決心

ロサイルたちは、次の目的地キソーリヤ、エブナーファが破壊されたため、そのままデューナへと向かっていた。ここからは山道になっていて、かなり急な坂道があったり、でこぼこ道があったりする。その上、ロサイルはリラを背負っているので、なんとも苦しい状況だった。

リカトル村から一緒にいるバレンアも、急な坂道に苦戦している。エリスは、もう狂って、とつても笑顔だ。

その道中に、破壊されたキソーリヤに通りがかった。キソーリヤはとつても田舎だが、作物がとつても新鮮で野菜料理が盛んな村だった。それが今は、畑すらどれか分からない。

「これもレミーがやったのか……」

「おそろしい物だね……純金鉱石って」

改めて、純金鉱石のおそろしさを知る。純金鉱石は、体内に取り込むことよつて絶大なパワーを手にすることが出来る。その代わり、脳内が破壊のみで埋め尽くされる。ロサイルとバレンアは純金鉱石の力に面したことはないが、エリスは目の前でリラが倒れるのを見ている。本当におそろしかったと言っている。

その後も、デューナを目指して歩いていった……

*

シヨウザンは教会内にある自分の部屋で考え事をしていた。それはロサイルに言われた言葉だった。

『間違つてると思つてるなら……行動に移してみるよな！』

一体自分はどうしたいんだろう？ 教皇にこのまま仕えていいのか？ 仕えるのが異端審問官だ。そんなの分かつてる。でも、ど

ここに抵抗したい自分がいる。

シヨウザンは自問自答を繰り返した。

「おい、シヨウザン」

「はい」

「そろそろ話し合いだ。集合せよ」

「分かりました」

言ったのは教皇だ。今度は何を命令するんだろう？ どうせ破壊や都会化に違いない。

……何かもう嫌だ……

講堂に異端審問官が集まり、教皇の話聞いた。

「では、今後は北国へと行き、北国の発展を目指そう」

やっぱりだ。教皇はもう破壊しか脳にない。実際、俺の故郷も破壊された。……レミーによって……

「そして、これからデューナにやってくるであろうエグレサッタの少年の息の根を止めよ」

『はい！』

予想外の出来事が起きてしまった……ロサイルが……殺される？

ロサイルは敵なのに……何故か教皇に怒りがある。

シヨウザンはその日、一大決心をした……

次の日……

レミーと教皇は、北国の方を目指そうと教会を出ようとした。その前には……

「どついう事だ？ シヨウザン」

ここからは行かせないと、とうせんぼうをしているシヨウザンの姿があった……

第46話 一大決心（後書き）

次話、どうなるシヨウゼン……？

第47話 教会侵入作戦（前書き）

遅れてすみませんでした。
テストがあったもので……

第47話 教会侵入作戦

そのころロサイルたちは、もうすぐでデューナというところまで来ていた。

ロサイルのたちの目の前にはもうデューナが見えていた。大きな塔が目印の首都デューナ。この世界の崩れの始まりの場所。そしておそらく終わりの場所でもある。

「もうすぐですね」

「ここまで見えてるとやる気出るな」

エリスとバレンシアはもうちょっと、と懸命に足を進めている。

そう、もうすぐ……

大激戦が始まる……

*

一方教会の出入り口では、シヨウザンが教皇たちの行く手を阻む形になっていた。

「どういってもりなんだ。シヨウザン」

「もう……いいじゃないですか！　ここまで国民を傷つけるのが教会の者の役割ですか！？」

もうその決心が揺らぐことはなかった。鋭い目つきのシヨウザンは、ずっと教皇とレミーを睨み続けている。横にある海の波が荒くなってくる。

「はははは……何を言っているんだシヨウザン。国民を傷つけるのが役目ではないさ」

「何だ……分かってるんじゃないですか」

そこで教皇がニツと笑った。

「ただ、裏切り者は殺すまでだ」

「え!？」

教皇は剣先をシヨウザンに向けて突進した……

*

ついにデューナの門までやってきたロサイルたち。何の躊躇もなく入っていく。

「わああああ! すっげー!」

「すごいですよおおお!」

「マジ感動だあああああ!」

結局田舎者の3人はテンションMAX。ガルナタス以上の都会なので、ガルナタス以上の人々がいる。……はずなのだが。

「やけに人が少ないですね」

エリスが頭に疑問符を浮かべる。確かに人が少ない。というかない。

「早めに宿に行ったほうがいいな」

ロサイルが言った。

「でも、リラさんが……」

「異端審問官を倒したりしている以上、俺たちはこの町ではお尋ね者のようなものだ。変な騒ぎにならないうちに行ってしまうおう」

その意見に納得したエリスとバレンアは、急いで宿屋に向かった。

何とか宿屋にたどり着いたロサイルたちは、今後の事について話した。

「これからは、もちろんのこと教会に侵入する。そこで教皇の全ての思惑を知ろう」

「でも、正面からじゃ行けるわけないじゃないですか。町の人とはもかく、教会内には必ず私たちの情報がいつている」

「そこなんだよな……」

正面から行った場合、教会の僧侶に見つかる。それだけならば大

丈夫なのだが、教皇やレミーを呼ばれるとかなりまずい。かといって、裏口など知らない。

その時、外でたくさんの人の足音が聞こえた。窓から覗いてみると、教皇、レミー、他何百人もの僧侶がデユーナを出て行くのが見えた。

その様子を見たロサイルはニツと笑った。

「チャンスだ。今から侵入しに行くぞ」

「その方がいいね！」

「ええ」

2人とも賛成のようだ。

3人は勢いよく宿屋を飛び出した……

第47話 教会侵入作戦（後書き）

次話、教会に侵入！

第48話 教会の資料

ロサイルたちはすぐに教会へ向かった。海の上に聳え立つ教会がライトアップされていて、とても綺麗だった。大きな橋で教会と中央デューナは結ばれていて、長い長い橋をロサイルたちは渡っていた。

その時、橋の真ん中で1人の男性が倒れていたのに気づく。お腹から血を出していて、とても苦しそうだった。一応息はしている。

「もしかして……シヨウザンか!？」

ロサイルはすぐに駆け寄った。あの杖にマント。間違いなくシヨウザンだった。

ロサイルの声を聞いたシヨウザンは、苦しそうにゆっくりとロサイルたちのほうを見た。

「ああ……ロサイルか」

正面から見ると凄い傷だった。いつもの青いマントが赤色に染まっている。背中からも出血しているようだ。

「どうしたんだよ!? その傷!」

「君の言うとおりにしただけだ。僕の信じたことを行動に移した。そうしたらこうなったんだよ」

「ってことは……教皇にやられたのか」

すぐに推測できた。シヨウザンを殺そうとしたのは教皇だ。シヨウザンはきつと村を破壊する政策に反対したのだから。そしたら…

…このざまか。どこまで頭の逝ってるやつなんだ、教皇は。

「すまないが救急車を呼んでくれないか? ついでにその少女も乗ればいいだろう?」

「ああ、分かったよ。教会の電話借りるぞ」

「ああ」

ロサイルは教会の中に入っていった。綺麗な女神の像が立ってい

る。そこから前の方にあるドアを通ったところに電話があり、それを取って救急車を呼んだ。

橋の上へと戻ってきたロサイルは、シヨウザンに救急車を呼んだことを伝えた。

「ありがとなロサイル。その代わりと言ってはあれだが、教会の中は自由に見ていい」

「いいのか？」

救急車がやってきて、シヨウザンは運ばれた。

「当たり前だ。俺たちはもう……見方なんだからな……」

シヨウザンはそう伝えて病院へ向かった。

その後、ロサイルたちは教会の中に入っていった……

*

ロサイルたちは資料が集まっている場所に行き、今回のことについてしっかりと読んだ。

……村町化政策

村、里、集落などを破壊し、発展した町を作る政策。このことについては、村民等の命は考えずにすぐに破壊してしまう。村民は発展した世界にするための必要な犠牲と考える。

上のが今回の政策の内容だ。村民の命を必要な犠牲と書いてある。……悲しいやつらだな。人を犠牲にするなんてな。必要な犠牲といわれた奴に支えられてこの世界があるのにな……

その資料をそつとしまった。

それから教皇たちの居場所も調べた。行った場所は『北デューナ』。名前の通り北にあるデューナだ。そこで……全てが終わるのかもしれない。この腐った世界の終了。それを夢見て……

教会を出たロサイルたちは、教皇たちが向かった北デューナに向かおうとした。すると……

「お前達がエグレサッタの少年率いる集団か……」

1人の近衛騎士がやってきた。

「俺の名はデラス・クラーズケン。近衛騎士だ。お前たちは異端審問官を怪我させた。教皇様への反抗という重罪を犯した。俺について来い。お前らは……死刑だ」

「は？」

いきなりの死刑宣告。どうなるロサイルたち……？

第48話 教会の資料（後書き）

次話、ロサイルたちはどうする……？

第49話 近衛騎士からの宣告（前書き）

遅れて申し訳ございません。

第49話 近衛騎士からの宣告

突然やってきた近衛騎士に死刑宣告をされたロサイルたち。異端審問官を死に追い詰めたことは重罪で、逃げても全国指名手配されている。死刑宣告の後そう言った。

もちろんロサイルたちは捕まる気なんて全くない。こんなところで死んだら何も変えれない。

沈黙が続く中、ロサイルは懸命に逃走方法を考えた。

すると、バレンアが耳元で小さく囁いた。

「僕が今だって言ったときに、全力で走ってね」

そう言うと、バレンアは近衛騎士に近づいていった。

「ほほう、指名手配犯のわりにはおとなしいな。まあいい。さっさとこっちに……」

「今だ！」

その掛け声と共にロサイルとエリスは走り出した。

バレンアは掛け声を言った後、すぐに爆弾を地面にたたきつけた。

辺りは白い煙で包まれて、近衛騎士の目に映るのは真っ白な世界だろう。その白い煙の中をロサイルたちは駆け抜けていく。そしてそのままデューナ脱出を目指した。

「くそ……煙玉を持っていたとは……だが、デューナからは逃げられませんよ」

デューナの入り口付近に着いたロサイルたち。だがそこには、何百人という近衛騎士がいた。後ろからはさっきの近衛騎士がやってくる。

「さあ、もう逃げ場はありません！ さっさと捕まってください！」

今度こそ追い詰められた。煙玉を使っても捕らわれるのがオチだろう。けど……やっぱりここで死ぬわけにはいかない！

そう思ったロサイルはマツチを取り出した。火をつけて左手で握りつぶす。炎の手が発生し、剣にも引火させ、いつもの戦闘体勢になる。そしてエリスとバレンシアに「俺の肩につかまれ」と言った。それから視線を近衛騎士に戻す。

「悪いな。俺らはまだ死ぬわけにはいかないんだ。じゃあな！」
そう言うつと、炎の手と剣をジェットとして使い、空を飛んで逃げた。

「逃げられたか……まあ、どうせあの場所で会うことになるだろう……」

近衛騎士はデューナに戻って行った。

*

一方デューナ病院。リラは状態が良くなり、体も自由に動くようになっていた。もうすぐ退院できるそうだ。大きく伸びをしたその時……

「リラ！ デシャナーダ！ 逮捕する！」

いきなり近衛騎士が入り込んできた。

「何がそうなるかさつぱり分らないんだけど？」

怪我の状態も良くなり、これからまた冒険について考えようとしてたところを、いきなり逮捕すると言われたら……もう何が何だかさつぱりだ。

「説明は後だ。お前は死刑囚なのだからな」

今説明しろ。どこからどうなったら死刑になるんだ？ 最近の近

衛騎士はバカなのか？

「おい近衛騎士ども。その人から離れる。命令だ」

同じ部屋の患者からの声だ。思いっきり命令口調だし。

「貴様、誰に向かってそんな口を……っておおお！？ こっ……これは失礼しました！」

そう言うつと近衛騎士たちは去っていった。最初から最後までよく

分からなかった。

「えっと……ありがとうございます。お名前は……？」

「名乗る必要はないさ。知っても何の得もないよ」

ムスツとしながらリラはもう1回寝込んだ。

もうすぐ退院だ！

こうして、リラの状態は回復に向かっていった。

波乱になってきた世界。それもあと少しで終わりだ。

第49話 近衛騎士からの宣告（後書き）

次話、これからの計画とリラと患者の人と……

第50話 ファスニード大陸大戦（前書き）

50話達成だ〜！

あと少して終わりですが、最後までお願いします！

では50話どうぞ〜！

第50話 ファスニード大陸大戦

デューナ病院に入院しているリラは、とつても疑問に思うことがあった。それはどうして隣の部屋の人間が指示を出したら近衛騎士どもが去っていったかだ。テレビなどを観ていると、教皇や異端審問官は北デューナに向かっていてデューナにはいないはず、つまりは近衛騎士に命令できる権限を持っているものが数少ないということだ。出来たとしても近衛騎士のお偉いさんくらいだろう。そのお偉いさんが命令してここに来たのだから、隣の部屋の人間は近衛騎士じゃないことが分かる。

「……いつたい誰なんだろう……？」

リラはさつきからそのことしか頭になかった。明日は退院出来る日で気分もうきうきしているはずなのだが……それでも隣の部屋の人が気になる。

そんなことを考えながら夜を過ごし、考えているうちに眠っていた……

*

翌朝、いよいよ退院出来る日がやってきた。もう1度口サイルたちと旅ができるのだ。そのことはもちろん嬉しかった。

「……お礼だけ言つところかな。」

でも近衛騎士を追い払ってくれたことには変わりない。カーテンをそーっと開け、病室に入っていた。その患者を見たりラは、何も言葉が出なかった。

「異端審問官の……シヨウザン……」

「ああ、君か」

驚きしかなかった。何故異端審問官のシヨウザンがこんなところ

にいる？ 教皇たちについていったのではないのか？ その疑問についてはすぐに理解できる。

「その傷、ロサイルにやられたもの？」

「……………まあ、そうかな」

やはりそうだ。怪我の影響で教皇たちについていけなかったのだ。けどもう一つ、最大の疑問がある。

「何故助けたの？ 敵である私を」

異端審問官や教会側からすれば、リラたちは最大の敵といっても過言じゃない。ここまで計画を邪魔されながら見過ごすわけがない。そんな敵をシヨウザンは助けたのだ。

「俺は自由になった。だから自由に動いている。それだけだ」

それがシヨウザンの答えだった。

「わけ分らないけど……………もう私行くよ。次あうときも……………負けないから」

「ちよつと待ってくれ！」

リラが病室を出ようとした時に、シヨウザンがリラを呼び止めた。

「……………何？」

「いい事を2つ教えてあげるよ。聞いておいて損はないと思うよ？ というか得ばかりだと思う」

そう言ったシヨウザン。『得』という言葉に弱いリラは、仕方ないな〜といった感じでシヨウザンの部屋にあるイスに座った。

「まずはロサイルたちの行き先だ。彼らは北のほうに飛んでいった」「飛んでいった!？」

「まあ、色々あってね。それで彼らの行き先は……………『ウイニングウインゲンツ』だと思う。方角的にもぴったりの所だし、彼らの体力は限界寸前。北デューナで休むなんて事はしないと思うからさ」

「なるほどね……………」

リラがその時思ったことがある。

……………ウイニングウインゲンツって……………あの人がいる場所じゃ

なかったっけ？

「で、2つ目は……大戦争だよ」

「大戦争!？」

「ああ。すでに教皇はウイニングウインゲンツ、オーシャンアイランド以外の場所を全て支配している。その2つを支配すれば教皇は新世界の王だ。だから今度行われる『ファスニード大陸大戦』で、全てを終わらせるつもりだろう」

ファスニード大陸大戦ということはファスニード大陸全てを巻き込むということになる。

ちなみにファスニード大陸というのは、北西にある大陸で、エグレサツタ村、オーシャンアイランド、フィリップアイランド、陰陽の隠れ里、フラージャ、ガルナタス、リカトル村、キソーリヤ、エブナーファ、デューナ、ウイニングウインゲンツ、北デューナ、それら全てが含まれる。その大陸を全支配する日が近づいているということなのだ。

「そんなこと……絶対させない！ 命を捨てても世界は守る！
ファスニード大陸を……人殺しの世界には絶対しない」

その決意をシヨウザンに言った。どんなことがあっても倒れないという決意を。

それを聞いたシヨウザンは小さく笑った。

その後、リラは退院し、ウイニングウインゲンツに向かった……

第50話 ファスニード大陸大戦（後書き）

次話、ロサイルたちはどこに向かう……？

第51話 憧れた異端審問官

リラはデューナを離れ、ロサイルたちが向かったであろうウイニングウインゲンツに向かった。樹氷の森の中にある小さな村、ウイニングウインゲンツはリラの記憶ではあの人が住んでいた場所だったのだ。それを考えると何としても行かなければいけない気がした。大きなリュックを抱え、リラは北上していく……

*

ロサイルがジェットで飛んで降りた場所は、樹氷の中にある大きな広場だった。真ん中に噴水があるが気温が低すぎて水が凍っていた。あまりの寒さで体がずつと震えていた。

「それにしても寒いですね〜」

「全くだよ」

エリスとバレンアも腕をこすっている。

「それでこれからどうするんだ、ロサイル？」

「この寒さは耐えられないから野宿は避けたいな……だけど、地図はリラが持つてるからここがどこら辺なのか分からないし……」

地図はいつもリラのリュックに入っている。そのリラはたった今デューナを出発したところで、待つのには何日もかかる。それ以前に会えるかも分からない。

その時、エリスが近くにあつた看板を指さした。

「あの看板見てくださいよ！ ここから先、ウイニングウインゲンツって書いてありますよ！」

「お！ それは村じゃないか！ 早速行こう！」

エリスとバレンアは看板に従って進もうとした。その時ロサイルは、ウイニングウインゲンツという単語から、あることを思い出していた。

たしかそこって……あの人が住んでいるんじゃない……

ロサイルのいうあの人というのは、リラのいうあの人と同一人物である。

おじいちゃん……

そう、ウィニングウインゲンツにはロサイルのおじいちゃんがいるのだ。フラー ज्याの町で、エグレサッタの生き残りのナー ज्याに言われたことだ。

「……あのさ、ナー ज्याさん。おじいちゃんの名前って分かりますか？」

「うん。ヒヨウルス・クロウズさんよ。」

「あと、どこにいるかは……」

「おそらく、『ウィニングウインゲンツ』だと思う。」

何がともあれ、行く価値は絶対にある。そう思ったロサイルは先に進んでいったエリスとバレンアを追った……

*

シヨウザンはリラが出て行った数時間後に退院し、今は教会の講堂に来ていた。窓に飾られたステンドグラスが太陽の光を青色に変えてシヨウザンを包み込んでいる。そんな講堂の真ん中に大きな女神の像が立っている。それを見ながらシヨウザンは、過去の事を思い出した。

俺は小さい頃、強くて正義感があって役目でもないのに皆を守っている異端審問官を見て、異端審問官になったんだよな。

シヨウザンは昔、誰かの役に立つ仕事があった。だから警察になろうと思っていたのだ。だが、シヨウザンの故郷キソーリヤは、教皇の命令により破壊された。それに立ち向かっていったのがシヨウザンのいう異端審問官だった。結局キソーリヤは滅んでしまった

ものの、死者が少ない人数ですみ、彼はキソーリヤの英雄だ。まだ小さかったシヨウザンは、それが異端審問官の仕事なんだと勘違いし、異端審問官に憧れた。その後、当時の教皇は殺され、ファスニード大陸に平和が戻ったと誰もが思った。

それから10年後が今だ。再び邪悪な心を持った教皇が現れ、10年前の再現をしているようだ。キソーリヤもレミーの手によって再び破壊された。

シヨウザンは心の中で思った。

今度は俺が世界を守る。ファスニード大陸に本当の笑顔を取り戻すんだ！

その決意を胸に、シヨウザンは北デューナに向かっていった……

第51話 憧れた異端審問官（後書き）

次話、それぞれが大戦争への準備を開始する！

大激戦の首都デューナ・大戦争へのカウントダウン編クライマックス！

第52話 大戦へ(前書き)

大激戦の首都デューナ・大戦争へのカウントダウン編終了です。

第52話 大戦へ

ロサイルたちは樹氷の森を進んでいき、とうとうウィニングウインゲンツに到着した。真つ白な雪で覆われた村は、太陽の光で雪がキラキラして、村も輝いているようだ。

「ここがウィニングウインゲンツか……」

何だかエグレサッタ村に似ているように感じたロサイル。もちろん北にあるので寒いのだが、何か違う温かさを感じる。

「あ！ お客さんだ！」

「へ？」

村の少年が大きな声でロサイルたちを見て言った。

「お前ら、どこから来たんだ？」

「俺とこのマジシヤンはエグレサッタ村、こっちの女の子が陰陽の隠れ里だ」

「エグレサッタ村？ ……てことは、ヒョウルス・クロウズと知り

合いか？」

「はい！」

「そっかそっか。俺について来い。案内してやるよ。そっぴや自己紹介がまだだったな。俺はファルダン・ウォーストだ。さ！ 着いて来い！」

ロサイルたちはファルダンに案内されて、ヒョウルスの下へ向かった。

*

「だいぶ進んできたかな」

リラはすでに樹氷の森に入っていて、今は大きな広場にいた。真ん中にある噴水の水が凍りついていて、太陽の光で反射してとても綺麗だ。

リラは地図を広げ、現在地と目的地との位置関係を確認した。

「おー！ もうすぐじゃん、ウイニングウインゲンツ！」

やっとロサイルたちと合流できる。合流して話したいことがたくさんある。リカトル村から今まで何があったか。そして、ファスニード大陸大戦のことも……

リラは目的地であるウイニングウインゲンツを目指して走り出した。

*

「教皇様。いよいよ3週間後に大戦が行われます」

「ははは。ついにこの世界が私のものになるんだな」

ここは北デューナの教会。教皇がいる部屋には、異端審問官のレミーがいる。ファスニード大陸大戦まで残り3週間。その時にファスニード大陸が教皇のものになる。

「本当に大きな戦争になりますよね。大陸全てを敵に回すのですから」

「他にもオーシャンアイランドやウイニングウインゲンツにも使節を送るからな」

ファスニード大陸大戦は主に北デューナで大きい戦いがあるが、協会側はまだ占領できていないオーシャンアイランドとウイニングウインゲンツにも使節を送り、各地で戦争を起こすそうだ。

「さあ、準備を始めようか。ファスニード大陸大戦の……」

こうしてファスニード大陸大戦への準備が始まった。

開戦まであと3週間……

第52話 大戦へ(後書き)

次話は設定です。

第53話 祖父（前書き）

新章です。

第53話 祖父

「ここだよ」

ファルダンについて行つた場所は何の変哲もない普通の家だった。もちろんここにロサイルのおじいちゃん、ヒヨウルスが住んでいるのだが。

「ヒヨウルスさん、入りますよ」

ファルダンはそう言つてヒヨウルスの家の中に入つていった。ロサイルたちもそれに続く。

家に入るとヒヨウルスが暖炉の前にある揺り椅子に座りながらコーヒーを飲んでいる。外の寒さとは変わつてとても温かい部屋だ。

「おお、ファルダンか。……そつちの3人は？」

「私はエリスと申します」

「僕はバレンアです」

バレンアの名前を聞いて、ヒヨウルスは驚いた表情を浮かべた。「君、バレンア君なのか!? 大きくなつたな」

ヒヨウルスは昔エグレサツタ村に住んでいたので、ロサイルといつとも一緒に遊んでいたのももちろん知つているし、遊び相手になつたこともあつたのだ。異端審問官の1件で死んだと思つていたがマジシャンとしての活躍を知つたときはとてもホツとしたそつだ。

そして、ヒヨウルスはロサイルのほうを見た。

「お前も大きくなつたなロサイル……お前はわしの顔なんて覚えてないだらう?」

「悪いけどな」

ロサイルの声を聞いた途端にヒヨウルスは涙を浮かべた。バレンアが無事なのは前々からテレビで分かつたが、ロサイルの安全は今会つまで分からなかつた。ロサイルが生きているか死んでいるか、それですつと悩んだ日もあつたそつだ。無事でよかつたという涙なのだらう。

「そちらのお嬢さんは一緒に旅をしている人か？」

「はい」

「ロサイルがお世話になっているな」

「いえいえ」

こうして一通り自己紹介は終わった。

「ところで何の用件でここに来たんだ？」

ヒョウルスに会いに来たのはたまたま着地した場所がウイニングウインゲンツが近かったというのがある。どうせそこに行くならヒョウルスに会おうと思ったのもある。でもロサイルが今1番聞きたいことが1つあった。

「俺たち、教皇と戦って世界を変えようと思うんだ。それで、今のままじゃ教皇どころか、異端審問官にすら勝てない。俺たちの特訓に付き合っしてほしいんだ」

ヒョウルスは色々な戦闘の仕方を知っている。炎の手、陰陽師などもだ。教皇に勝つにはそれしかない。ロサイルは考えたのだろう。「いいだろう。ただし、生半可な気持ちではかかるなよ」

「分かったよ」

こうして最後の特訓が始まる。

*

「ついたぞ〜！ ウイニングウインゲンツ！」

そのころリラはようやくウイニングウインゲンツに到着した。市役所に向かい、ヒョウルスの家を教えてもらい、ヒョウルスの家に向かった。

第53話 祖父（後書き）

次話、特訓開始！

第54話 炎龍波と体内炎龍波（前書き）

短すぎます。

特訓とかはやりづらい……

第54話 炎龍波と体内炎龍波

ヒヨウルスの所は実戦で強くなるのではなく、言葉で覚えて強くなるというものらしい。まあ、特訓場がないからなのだが。

「まずはロサイルだな。炎の手にはまだ最大の技がある。それは『えんりゅうは炎龍波』という技。炎の剣を左腕にあて、左腕を炎で纏わせてそのまま発射する。これが炎龍波。2つ目は『たいたいえんりゅうは体内炎龍波』。これは自分自身が炎龍波となつてぶつかつていく技。だが捨て身の技。下手すれば死ぬ。いざというときに使う大技だ」

ヒヨウルスから教えてもらった技名は炎龍波という技。炎の手を使った技の中でも最強クラスで、どんなものをも打ち砕く威力だという。そして体内炎龍波。自身が炎龍波となり攻撃する技。炎龍波の何倍もの威力を持つが、捨て身技で全身がボロボロになるといわれている技だ。

次にエリスのことについてだ。

「陰陽師か。この世界の陰陽師は札を出すタイミングが最重要となつてくる。自らの強化技、獣の召喚。それらのタイミングがずれると話にならないほどだな」

陰陽師は自らを強化する札、すなわち最新型の伏せ札と、獣を召喚する元のスタイルの札、切り札を使う。それらのタイミングで勝負が決まるといっても過言ではないほどに重要なのだ。

特訓はしないといつても、試しにするのはいいということ、ロサイルたちは樹氷の森へと向かった。

その道中に懐かしい顔に出会ったのだ。

「あ！ ロサイルじゃん！」

「リラ！」

デューナで別れたリラと再開できたのだ。リカトル村での戦いの

時に純金鉱石を使ったレミーに深い傷を負わされ、意識がなかった
ので仕方なく入院させ、一足先にウィニングウイングンツへとやっ
てきたロサイルたち。元気になったリラは3人を追いかけてやっと
追いついた。

「3人で何してるの、こんなところで」

状況の分からないリラが問います。

「ちょっと試したい技があつてな」

そう言うとロサイルはマッチを取り出し左手で握りつぶした。炎
の手が発動し、剣にも引火させる。

そして言われた通りの手順でやった。炎の剣を左腕にあて、左腕
に炎を走らせる。そのまま左腕を前に突き出す。すると、炎の龍が
うねりながら飛び出した。これが炎龍波だ。

「おー！ 凄い大技じゃん！」

リラも驚いた様子だった。

さっきの炎龍波は地面にあてたが、大きくへこんだ。これから相
当な威力なのが分かる。

これがあれば……教皇も倒せるかもしれない！

そんな新たな希望も生まれた。

そしてロサイルたちはウィニングウイングンツに戻って行った。

第54話 炎龍波と体内炎龍波（後書き）

！ 次話、ウィニンググウィングェンツを旅立ち、北デューナを目指します

第55話 平和な世界で……（前書き）

早いですが北国の祖父・最後の特訓編終了です。

第55話 平和な世界で……

樹氷の森での炎龍波試しうちが終わり、ロサイルたちはヒヨウルスたちにお礼を言い、教皇たちのいる大戦争の本拠地、北デューナに向かおうとしていた。教皇率いる新たな世界が勝つか、国民たちが望んでいる平和な世界が勝つか、始まりか終わりを決めるような大事な戦い。そして絶対に負けられない戦いが始まるつもりである。

ウイニングウインゲンツに滞在していたのは2日程度で、大戦争にはまだまだ時間がある。残りは2週間と5日だ。

ウイニングウインゲンツから北デューナまでは結構距離があり、普通に歩いてても1週間は余裕でかかるくらいだ。単純計算でついたときにはファスニード大陸大戦まで1週間と5日ある。ということ、かなり時間的には余裕がある。

ウイニングウインゲンツには村への入り口が4つある。北デューナ方面とデューナ方面とガルナタス方面がある。そして入り口といつてはなんだが、港からエグレサツタ村にすぐいける。

4人ともが北デューナ方面に向かおうとしたとき……

「ちよつと待つて！ 皆！」

ヒヨウルスの家まで案内してくれたファルダンがロサイルたちを呼び止めた。

「ヒヨウルスさんから皆に伝言だよ」

「伝言？」

「うん。ファスニード大陸戦争のことをテレビでやってたみたいなんだけど、今日発表になったことがあつたんだ」

「それは何ですか？」

「教会、つまりは教皇の手下つてなるかな。それらがまだ占領できていないオーシャンアイランド、ここウイニングウインゲンツに進

行してくるんだ。見ての通りここは力のない村だ。色んな場所から行き来できるという事でいままで占領されなかったが……今回はかりはそうもいなくてね。そこでお願いだ。4人の中の誰かがここに残って、戦ってほしい」

教皇が占領できていない場所は北デューナ、オーシャンアイランド、ウイニングウインゲンツの3つで、初めは北デューナのみで行われる予定だったが、現世界の最高権力者教皇は、たくさんの近衛騎士や僧侶を派遣して、オーシャンアイランド、ウイニングウインゲンツでも戦争を起こそうと考えた。

現在のウイニングウインゲンツは強さが全然ない村。そこでヒヨウルスやファルダンは力を持っているロサイルたちに1人でいいからここに残ってもらおうよう頼んだのだ。

「そういうことなら私が残ります」

真っ先に残ることを宣言したのはエリスだった。

「正直、私は北デューナで戦うほどの力を持っていません。でも、寒い中でも温かさを持つ村を破壊させたくない。いいですか、ロサイル君？」

「ああ、全然構わない」

結局エリスはウイニングウインゲンツに残り、3人で北デューナを目指そうとしたとき、リラもある心を抱いていた。

「ねえロサイル、バレンア君。私はオーシャンアイランドに行ったらダメかな……？ 一応私の故郷だし」

故郷が破壊されるかもしれないという状況に、不安を抱いていたリラ。自分の故郷を守りたいという心が芽生えていた。

もちろんそれに関して2人は快くOKを出した。

エリスはウイニングウインゲンツに残り、リラはオーシャンアイ

ランドに帰り、ロサイルとバレンシアは北デューナに向かうことになった。

そして最後にロサイルが言った。

「次に4人で会うときは平和な世界で遊ぶときだ！」

その声に3人は「おう！」と返事し、それぞれの目的地に向かった……

第55話 平和な世界で……（後書き）

次話、最終章！

「最後の戦いへ」
です！

北国の祖父・最後の特訓編の設定は最後の戦いへと一緒にやります。

次話、それぞれの目的地に向かうロサイルたち。
そんな時、バレンアが思ったことは……？

第56話 それぞれの準備（前書き）

めっちゃ短いです。

早くバトル描写がやりたいvazであった……

第56話 それぞれの準備

ファスニード大陸大戦に向けてそれぞれの行き場所へと向かう4人。ロサイルとバレンアは北デューナ、リラはオーシャンアイランドへ向かっている。エリスはウィニングウインゲンツで待機だ。

そして雪道を通って北デューナに向かうロサイルとバレンア。そこでバレンアがふとこんなことをつぶやいた。

「本当にここまで来たんだね……」

「……本当だな」

ロサイルたちには実感というものがあまりなかった。ついこの前まではしゃいで遊んでた少年達が、世界を変えるべく北デューナに向かっているのだ。バレンアが旅立ったのも、エグレサツタ村が滅ぼされたのも全てが昨日のことのように感じる。

「もうこれはエグレサツタ村の皆だけの思いじゃないよね？」

「当たり前だろ。滅ぼされたところ……国民の思いを背負ってるんだ」

その答えを聞いてバレンアはニコツと笑った。

そして寒い寒い道を通っていった。

*

ウィニングウインゲンツから船に乗ってオーシャンアイランドを目指すリラ。その距離はとても遠い。ウィニングウインゲンツは北のほうにあり、オーシャンアイランドは最南端の島だからだ。

というわけで、長い船旅になるのだが……

「ははははは！ 気持ち悪い！」

久しぶりの船にいきなり船酔いしたリラ。だからトイレの近くに
いるのさっ！

そんなことはどうでもいいのだが、リラは1つ思うことがあった。
今の私の力で勝てるだろうか？

リカトル村の事件以来、ずっとその事が気になっていた。あの時
リラは純金鉱石によって絶大なパワーを手に入れたレミーにあっさ
りと負けてしまった。その事がずっと気になっている。私は弱いん
じゃないかと。

またその事を思ってしまったリラは、リュックの中から本を取り
出し、酔いながらも解読し始めた。

船はオーシャンアイランドへと向かっていく……

*

ウイニングウインゲンツに残ったエリスはヒヨウルスのところ
泊まる事になり、陰陽師について色んなことを学んでいた。

札を出すベストタイミングの話や、獣と身体強化とのコラボ技な
どだ。

「これが、『狼斬』おおかみぎりという技だ」

「斬殺狼と光の帯剣ですか……」

今教わっているのは狼斬という技。使う札は斬殺狼という伏せ札。
それと光の帯剣という切り札だ。この2つにより、とてもすごい剣
技が出来るのだ。

「でも……どつちも使ったことない札なんですよね」

「樹氷の森で試しに使ってくるといい」

そういわれたエリスはすぐさま樹氷の森を目指し、狼斬を試しに
いった。

世界を変えるために……

それぞれが目的を果たそうとしている。

ファーストド大陸大戦まであと2週間と3日。

第56話 それぞれの準備（後書き）

次話、長い船旅の末、オーシャンアイランドについたリラ。
懐かしい人たちと再会。

第57話 帰還（前書き）

準備の様子って本当に書きづらいです。

オーシャンアイランドでの話ですが、めっちゃ短いです。

ご了承ください。

第57話 帰還

長い船旅の末、やっと故郷オーシャンアイランドに帰ってきたリラ。生温かい風、港に飛び交うかもめ。にぎやかな市場。何も変わっていないかった。

オーシャンアイランドで起きた海賊事件。あれからもう数ヶ月がたっている。そんな風に全く感じなかった。あの後ロサイルと一緒に旅立ったのだ。それが昨日の事のように感じてくる。

海賊に壊された市場も普通に再開している。リラはただホツとした。にぎやかな市場を通り抜けてオーシャンアイランドの城へと向かっていった。

リラの目の前に聳え立つ大きな城。半年振りに帰って来た。城に入ろうとしたとき、警備員の人に止められそうになったが、リラの顔を見て「失礼しました！」と深く頭を下げて入れてくれた。

海賊に荒らされてしまった城も、半年が過ぎると以前と変わらないう様子になっていた。作りも何にも変わっていない。リラは王室へと直行した。

王室の前へとやってきたリラ。早速ドアを開けてみると懐かしい顔がいつぱいあった。皆が驚いた顔でリラの姿を見ている。

「リラ……皇女……？」

一番最初に声を出したのはユガだった。リラの側近でとっても優しいおばあちゃん。

「久しぶり。ユガおばあちゃん」

リラも笑顔で声をかける。

その後、リラの部屋でユガと話し合いをすることに。

「どうしてこんな急に帰ってきたの？」

ユガが普通に質問をする。今はファスニード大陸大戦がもうすぐ始まるうとする時期。今の状況で帰って来るのは不思議だった。

もしかして教皇軍がオーシャンアイランドに襲撃することを知らない？

ここは最南端の島。それに対して北デューナは最北端の町。ガルナタスのテレビ・ラジオ配線がヴァームたちに破壊されたため、情報が伝わりにくいのが現状だ。

「もうすぐ北デューナでファスニード大陸大戦があるのに……」

「行われるのは北デューナだけじゃないんだ」

「え？ それってどういうこと!？」

「オーシャンアイランドは今となれば数少ない教皇の支配下じゃない島。ウィニングウインゲンツで情報を得たんだ。襲撃されるのは支配下になっていないウィニングウインゲンツとオーシャンアイランドだって。もちろん戦争の中心は北デューナだけど他の2つも激しい戦いになるに違いない。だから戻ってきたんだ」

「そうだったんですか……」

ユガも納得したようだ。この理由がなければすぐに怒っていたことだろう。そして何かを強く決心したような表情でリラに言った。

「なら、私も戦います。いや、オーシャンアイランド全勢力を挙げ、戦いましょう!」

「うん!」

ユガは皆にそれを報告しにいった。

こうしてファスニード大陸大戦まで、オーシャンアイランドは戦いに向けての準備を進めていった……

第57話 帰還（後書き）

次話、ついにやってきた北デューナ！
そこで戦いの準備が始まる。

第58話 懐かしい顔

険しい雪道を何日間か歩き、ついに北デューナまであと4kmとなった。ファスニード大陸大戦もあと1週間で始まる。少しゆつくりめのペースでやってきた2人だった。

「ふう〜、もう少しだねロサイル」

「そうだな。ここまで大変だとは思わなかった」

かれこれ2人は1週間歩き続けている。そのうえウィニングウィングと北デューナの間には宿や道の駅は1つしかなく、体力はもう限界寸前だった。とりあえずふかふかのベッドで寝たかった。まるで大雨の日の学校の帰り道だ。

そのままロサイルたちは止まることなく北デューナを目指して歩いていった……

*

「やっと……着いた〜！」

「はあ……疲れた〜」

やっと北デューナに到着したロサイルとバレンア。これでやっと休憩できる……とは2人とも思っていないかった。

なんせここは教皇軍の者たちがいっぱい集う場所。1番計画の邪魔をしているロサイルたちを泊まらせたり、商品に触れさせたりはしないはずだ。北デューナは入り口付近は警備があまりしっかりしていないのであっさり入ることは出来た。問題はここからどうするかだ。

「なあ、バレンア。マジックでここに宿を作ってくれ」

「ごめん。僕そこまで出来たマジシャンじゃない」

バレンアのマジックでもどうにも出来なかった。出るものといえればペットの鳩くらいだ。

「あと1週間何して過ごす？」
「ん〜、ずっと僕のマジックでも見てる？」
「そんな糞つままない生活嫌だ」
しばらく沈黙が続いた。
結局その日は北デューナから出て、門の近くで野宿をした。

*

翌日、再び北デューナに入り込んだロサイルとバレンア。といってももちろんやる事がない。ということとでそこら辺を、ぴったんかん〇ん並にぶらぶらしていると……
「ん？ お前ロサイルじゃないか？」
1人の男性が声をかけた。もちろん見覚えのある男性だ。ペットの犬もロサイルに挨拶をする。その男性は……
「もしかして……ヴァームか？」
「そうそう。ガルナタスのヴァーム」
何と北デューナにはガルナタスで戦ったことのあるヴァームがいた。すごく弱かったのを覚えている。あれからも随分と日が経ったものだ。

となると、もちろんバレンアはヴァームの事を知らない。バレンアはロサイルとヴァームが話しているときに、（何かバームクーヘンみたいな名前だな）と思っていた。
「それで、そっちの人は？」
ヴァームがバレンアに問いだす。
「僕はバレンアハウルビーノです」
「うそ！？ あのバレンア!？」
ヴァームはバレンアのことを知っているようだ。どうやらヴァームの仲間のミーモがバレンアの大ファンらしい。可愛い顔をしていると。ちなみにマジックより顔を見ている人だ。

「それでロサイルたちは何をしてるの？」

「それがな……俺たち教皇側からしたら思いっきり指名手配犯なんだ。だからさ、泊まることも出来ないし、遊ぶことも出来ないんだよ」

「別に遊ばなくてもいいんだけどね」

事を説明したロサイル。そしたらヴァームが「だったら家に来いよ」と言った。もちろんお言葉に甘えさせてもらい、ファスニード大陸大戦まで泊まらせてもらった。

そしてファスニード大陸大戦の日がやってくる……

第58話 懐かしい顔（後書き）

次話、ついにファスニード大陸大戦開幕！
北デューナから戦争は始まります！

第59話 開戦（前書き）

旅行に行つてたため更新が遅れました。すみません。
いよいよ開戦です！

第59話 開戦

ついにこの日がやってきた。世界中が良い朗報を待っている中で始まるファスニード大陸大戦。ロサイルとバレンアはヴァームの家にいて、窓を通して外の様子を見ていた。たくさんの飛行機が南の島へと向かって飛んでいくのが分かる。そしてウイニングウインゲンツにはたくさんの近衛騎士が戦車で向かっていた。

北デューナに教皇軍以外で残っているのはロサイルたちのみ。その他の住民たちは、1、2日前に違う場所へ避難をした。

「けどさヴァーム。お前たちは避難しなくてよかったのか？」

「当たり前だろ。俺たちは戦うためにしばらくここに住んでいたんだ」

これで教皇軍に反対するのは北デューナで6人となった。だが苦しい状況は変わらない。数々の近衛騎士や僧侶が襲ってくるに違いない。

するとバレンアが「だったら雑魚どもは一掃すればいいじゃん」と恐ろしいことを言ってきた。しかしバレンアは懐に爆弾を持っているし、ロサイルの炎龍波を使えば難しいことじゃない。とりあえずその作戦を決行することにした。

「よし、行くぞ」

ロサイルたちは家を出て、教皇のいる大教会を目指した。

*

大教会にやってきたロサイルたち。その一番奥には教皇の姿があった。ロサイルたちの存在に気づくと教皇はロサイルたちに話しかけた。

「やはり来ましたか、エグレサッタの少年」

「当たり前だろ」

「本当にあなたたちには手を焼かされます。あなたたちがいなければ私の計画は完璧だった。以前、近衛騎士にも聞いたでしょう？ あなたたちは死刑囚です。今から執行します。この場でね！」

すると、数え切れない数の僧侶と近衛騎士が襲い掛かってきた。「さあ、殺してしまいなさい！」

教皇の一言で全員が剣を構えて突進してくる。すると、近衛騎士たちの所で大きな爆発が起きた。近衛騎士たちは簡単に吹き飛ばされ、たくさんの者が倒れた。そしてその後、赤い龍が飛んでくる。「炎龍波！」

ロサイルの左手から出た炎の龍の衝撃波が僧侶達に襲い掛かる。僧侶達も簡単に吹き飛ばしてしまった。

「貴様ら……！」

「おい教皇。なめてかかるなよ。大怪我するぞ！」

ロサイルは剣先を教皇に向けて言った。そして教皇の方へ向かって走っていった……

*

一方ウィニングウインゲンツでは、どんどん近づいてくる戦車の音が聞こえてきた。戦闘態勢はしっかり整っている。みんなはヒヨウルスがこの日のためにつくったバズーカを構えていた。そして戦車が来たときにみんなで一斉に発砲した。

戦車は大きな炎を上げ、もう使い物にはならないほどに焼けてしまった。これで向こう側の大きな戦闘力の1つは免れた。

「ふゝ、作戦大成功だな」

ヒヨウルスもひとまずは安心した様子。だがこのままではもちろん終わらない。戦車の中からどんどんと出てくる近衛騎士たち。浅い傷を負った者がほとんどだった。そして戦車の中からエリスが1番恨んでいる人物が出てきた。

「お久しぶりです。村長」

「ふん、エリスか」

陰陽の隠れ里の村長だった。あの事件で村長は教皇とグルだった事を知り、エリスは絶対にファスニード大陸大戦に参加してくるだろうと思っていた。自分のところに来てくれるとまでは思っていないかったが、これはこれで好都合だ。

「村長、里のみんなの仇をとらせてもらいます」

「やれるものならやってみな」

こうしてウイニングウインゲンツも大戦争が始まった……

第59話 開戦（後書き）

次話、オーシャンアイランドにもやってきた教皇軍。

第60話 レミィの襲撃(前書き)

いや、初めてこの作品でレビューを貰いました！

アクセス数もすごく増えましたし、お気に入り登録件数も増えました！

しかも60話達成！ いろいろめでたいな〜¥(^^)ノ

これもこの作品を読んでくださっている読者様のおかげです！ 感謝感謝！

では、60話どうぞ！

第60話 レミーの襲撃

一方オーシャンアイランドにも教皇軍はやってきた。大きな音を空に響かせながら飛行機で。

ぞろぞろと降りてくる近衛騎士たち。どうやらオーシャンアイランドには近衛騎士しか来ていないようだ。

だが、前にテレビで見たことあるような顔なかりだ。近衛騎士の総隊長だったり。オーシャンアイランドには近衛騎士の最高戦力で向かってくるようだ。

オーシャンアイランド側にも、リラやキルト、ユガなどの力を持った人たちが揃っている。

すると近衛騎士の総隊長が大きな声で言った。

「今から我々はオーシャンアイランドを破壊する。守りたいのならば力づくで守って見やがれ！ 行くぞ！」

そう言っ、近衛騎士たちは突っ込んで来た。

リラ達も勢いよく突っ込んでいった……

*

一気に突っ込んできた僧侶や近衛騎士を一掃したロサイルたち。

今は教皇に向かって全力で走っていた。するとロサイルの前に……

「教皇様の所へは行かせはしない」

異端審問官のレミーがロサイルの前を塞いだ。バレンアが一瞬立ち止まったが、ロサイルを信じ、そのまま走っていった。だが、ロサイルの後ろにはヴァームがいた。

「助太刀するぜロサイル。弱くたっていないよりはマシだろ？」

ヴァームと一緒に戦ってくれることになった。

だが相手は純金鉱石を取り込んでいる。生半可な気持ちと実力じゃ勝てない。

「行くぞ！ レミー！」

ロサイルはマツチに火をつけ、左手で握りつぶした。炎の手と剣を発動させ、その炎を体内に取り込んだことにより、炎のチャージ状態になった。

ヴァームとピッチもボーンナイトドッグを発動し、ピッチはとても凶暴な目つきになり、ヴァームは大きな槍を装備する。

早速レミーがこちらに突っ込んで来た。ロサイルは瞬間的な速さでかわしたが、ヴァームたちはもちろんその速さには適わない。だが、ヴァームは槍を構えて立ち向かおうとした。

「かわせないなら……止めるまでだ！ ピッチ！」
「ワン！」

ピッチとヴァームでレミーの剣の一撃を受け止める。だがとてつもない威力に2人は押され気味だ。

「ぐ……くそっ……！」
2人が必死で耐えている時に、ロサイルはレミーの後ろに回っていた。
「チャージングキック！」

足に炎を集中させ、全力でレミーを蹴った。だが……

「こんな力でよくここにのこのこと現れたな」

何と片手でロサイルのチャージングキックを止めてしまった。そのうえ、片手で剣を持っているのにピッチとヴァームをまだ押している。

「嘘だろ！？」

そのまま2人と1匹を弾き飛ばしてしまった。
地面に倒れてしまったロサイルは思った。

これが……純金鉱石の力……こんな化物に勝てるのか……！？

ロサイルたちは再び立ち上がり、レミーに立ち向かった……

第60話 レミィの襲撃（後書き）

次話、因縁の対決エリスVS村長！

P.S.

設定を全て消しました。

逆に見づらいと思ったので。

もちろん話自体に影響することはないので。

第61話 衝撃行動(前書き)

今回はウィニングゲインズでのお話です。

第61話 衝撃行動

一方、ウイニングウインゲンツでは、陰陽の隠れ里でのあの戦いから再開を果たしたエリスと村長がバトルを始めようとしていた。2人とモ札をだし、戦闘態勢をとる。

「エリス。お前にわしは倒せん。斬殺狼！」

陰陽の隠れ里でのバトルの時に召喚してきた獣を、この場でも召喚してきた。相変わらず大きな獣だ。すぐに食いに来そうな迫力だった。

だがエリスももちろん勝つ気で勝負に挑む。

「倒せますよ。私には背負っているものがあるから。獅子剣獣！」

エリスは、大きなライオン（獅子）を召喚した。そのライオンの鬣たてがみが鋭い刃になっていて、こちらも何もかもを斬り捨ててしまいうな迫力だった。

「始めようか エリス」

「ええ。そのつもりです。行け！ 獅子剣獣！」

エリスの声と共に勢いよく走り出す獅子剣獣。村長もすっかり對抗し、斬殺狼に命令をして、獅子剣獣と斬殺狼が衝突しあった。だが、獅子剣獣が若干押され議身だった。

「ははは、これ程度ではわしは倒せんぞ。エリス」

「それはどうですかね？」

何と獅子剣獣と斬殺狼が戦っている最中に、エリスは伏せ札の光の弓剣を召喚していた。すでにエリスは弓剣を構えており、いつでも攻撃できる状態だった。

そのまま村長の肩に目掛けて、思いっきり弓剣を刺した。

村長はかわすことが出来ずに、肩から大量の血を出し、その場で膝をついた。

その瞬間、エリスは斬殺狼に矢を放ち、斬殺狼を消滅させた。

「なるほど……そうきたか」

「私は以前の私じゃないです。ロサイル君たちとの旅で色々な経験を
をして、色々な困難を乗り越えてきました。本気で来ないと……死
にますよ?」

「ははは……少しは楽しませてくれるじゃないか、エリス……だが、
そんな大口を叩けるのも今だけだぞ?」

そう言つと、村長はポケットの中から何かを取り出した。それを
見てエリスは驚いた表情を浮かべた。

「純金鉱石……!」

「たった今からこれをわしの体内に取り込む。そうすれば……この
村民どもの命はおしまいだ! もちろんエリス、お前のもな!」

そう言つて村長は体内に純金鉱石を取り込んだ。

エリスは以前、純金鉱石を取り込んだ相手と戦ったことがある。
だが、惨敗した。しかもこちらは2人。向こうは1人だった。10
秒くらいでリラが血まみれになり、エリスはどうすることもなかつ
た。

つまりは純金鉱石の脅威さは分かっている。勝つこともかなり困
難だ。それでも……勝つしかないのだ。

純金鉱石を取り込んで覚醒した村長。さつきまでとは外見は変わ
らないが、それでも違う人に見える。(毎日見てきた優しい顔も、
もう見れないんだな)とエリスは心の中で思った。

エリスは覚悟をもう決めている。それでも村長は裏切り者。許し
ておくわけにはいかない。

エリスが獅子剣獣に村長を攻撃するよう命令しようとしたその時

……

「エリス、死んでもらう」

そう言つた村長。するとさつき消滅させたはずの斬殺狼が生き返
り、あっさりと獅子剣獣を倒してしまった。

「なっ……!」

「獣の心配している時間はないぞ。エリス!」

すでに後ろには村長がいた。もちろん反応できるはずもなく、村長が召喚していた小刀で、深く肩に刺されてしまった。

真っ白な雪が赤色に染まった瞬間だった。大量の血が流れてしまったエリス。もう動けない状態だった。

村長はそれを嬉しそうに見ていた……

第61話 衝撃行動（後書き）

次話、オーシャンアイランドでも戦争が幕を開ける！

第62話 立ちふさがった近衛騎士(前書き)

短いですorz

第62話 立ちふさがった近衛騎士

勢いよく突っ込んでいったリラ達。もちろん狙いは近衛騎士の隊長だ。

しかしそう簡単に通してもらえはるはずもなく、多くの近衛騎士たちが立ちふさがった。近衛騎士たちは剣を構えてこちらを攻めてくる。

それに対してリラは、ロサイルたちがとった行動のように一掃作戦に出た。

「ウインドトルネード！」

爆風が近衛騎士たちに襲いかかった。

近衛騎士たちはあつという間に吹き飛ばされ、残っているのはリーダー格のみだ。近衛騎士は新人が多く、ベテランというのが少ないため、大きな勢力を持つものは少ないという。

リラが一掃した際にキルトやユガが一気に近衛騎士団の代表格の方に向かって走っていった。

これで戦力はほぼ同等となった。

しかし、近衛騎士は国を保護しているような存在。そんな簡単に勝てるはずはない。

メンバーも有名な人たちが揃っている。隊長のジールス、副隊長のザメサ、もう1人の副隊長のノイキル。それらが1番困難となってくる敵だろう。

リラはもちろん隊長のジールスに向かっていった。オーシャンアイルランド側で1番戦闘力のあるリラが隊長を狙うのは妥当だろう。

しかし、リラの前には違う近衛騎士が立ちふさがった。

「どいて！ ウインドトルネード！」

リラは先ほどの新人近衛騎士たちと同じように吹き飛ばそうと思っただ。

しかしその近衛騎士は普通に立ち止まって、リラの攻撃をあつさ

りを受けてしまった。余裕の表情を浮かべて、ウィンドトルネードの爆風を簡単にはらってしまった。

「隊長格だけが最強だと思うなよ？」

その男はクラースケンという男。クラースケンは以前、デューナでロサイルたちに死刑宣告をしたが逃がってしまった近衛騎士だ。その男が今度はリラの前に立ちふさがっている。位から考えると、隊長ほどは高くないが、教皇軍からしての最も注意すべき犯罪者に死刑宣告を任せられるので、そこそこの位にはついている。

「は、簡単に通してもらえないわけだ」

「当たり前だろ。お前らはただの反逆者だ」

そう言っただけでクラースケンは剣を構えて一気にリラに突っ込んできた。他の近衛騎士たちとは比べ物にならないくらい速く、構えもしつかりしたものだ。

「トルネードキラーガード！」

速術法を使って、瞬時に反応したリラは自分の周りに刃の風の盾を作り、クラースケンからの攻撃を防いだ。

クラースケンもそれを突き抜けるような攻撃力はなく、後ろに下がってしまった。

「なるほど。お前もそう簡単には死んでくれないようだな」

「当たり前でしょ。私たちは少人数で立ち向かってる反逆者なんだから」

「ははは、楽しませてくれるな！」

こうしてリラの戦いは幕を開けた……

第62話 立ちふさがった近衛騎士（後書き）

次話はロサイルたちのほうをやります。

第63話 教皇の側近

純金鉱石の影響で圧倒的な力をほこるレミーに立ち向かっているロサイルとヴァームとピツチ。だが、その力は想像を超えていた。ロサイルは今更ながらリラが死に追いやられたことを納得した。

だがどこかに弱点はあるはず、と、ロサイルは必死で弱点を探した。この世に無敵など存在しないからだ。

しかし、どこを見ても弱点がない。なにもかもが最強な純金鉱石を取り込んだレミー。勝てるはずがないような戦いになっている。

(だったら……)

ロサイルは炎のチャージ状態で一気にレミーに接近していった。その速さに当たり前のように反応するレミーは、剣を取り出して、ロサイルに向かって振り下ろす。

ロサイルはそれを見越して接近したのか、すでに剣を取り出して、レミーの攻撃を両手で持った剣で受け止めた。

だが、その攻撃はずしりと重く、耐えるのが精一杯だった。しかし、これもロサイルは見越して攻撃を受け止めたのだ。

炎のチャージ状態を解除して、普通の炎の手と剣の状態に戻る。それからずしりと重い攻撃を受け止めるのをやめ、レミーの剣をわざと振り下ろさせる。

そしてその一瞬の隙に、炎の腕を発動させて、すぐさま発射する。

「しまっ……」

「炎龍波！」

炎の龍の波動がレミーに襲い掛かる。一瞬出来た隙に技を発動させたので、レミーの速さでもかわせなかった。

「いっけええええええ！」

レミーはその攻撃を、近くで、モロに受けてしまったため、大ダメージとなった。

レミーはその場で膝を付いていたが、かなり傷がついていた。
「少しは楽しませてくれるようじゃないか」
「まあね。こんなところでやられるわけにはいかないんで」
レミーは再び立ち上がり、ロサイルの方を見た。

*

一方バレンアたちは、それほど強くない下っ端の僧侶たちが次々と襲い掛かってくるので、簡単に倒れていき、教皇のいる場所へと向かっていった。

その塔に、あきらかに他の人とは違うオーラを持った人が目の前に現れた。

「ここから先へはいかせんぞ。反乱者」

そういつてその男は剣を構えて立ちふさがった。

見た感じ、異端審問官ではなく、かといって近衛騎士でもない。それから考えて、バレンアは正体が分かった。

「はーん。教皇の側近つてわけだ」

「そういうことだ」

バレンアたちはすでに教皇のいる高い塔の前にいた。そんな大事なところを任せられるなんて、側近のような強い奴で信頼がある奴じゃないと任せないと思ったからだ。

もちろんバレンアは引き下がるつもりはなかった。

そしてそのまま対決へとなる。

「行くよ！ ミーモさん！ リキリヨウ君！」

『おっ！』

3人は教皇の側近に向かって突っ込んでいった。

第63話 教皇の側近（後書き）

次話もバレンアくんたちです。

第64話 レミーの猛反撃

教皇がいる塔の入り口までやってきたバレンア、ミーモ、リキリヨウの3人。その前に現れた教皇の側近。さすが教皇のいる塔の入り口というだけあって、門番は相当強いやつを出してきた。

「ならばやろうか。死んでもらうぞ、反逆者ども！」

そう言っただけで目に留まらぬ勢いでバレンアに向かって走ってきた。ジェット機のような速さだった。

そしてそのままバレンアの心臓を貫いた。

「な……」

「嘘でしょ……」

リキリヨウとミーモも、信じられないような目で見ていた。戦い開始早々にバレンアが心臓を貫かれてしまった。どんな頑丈なやつでも、心臓に深く剣が刺さったら死ぬだろう。

誰もがバレンアは死んだと思ったが……

「さすがは反逆者。器用だな」

「マジシャンに不可能なことはないのさっ！」

バレンアはすでに側近の後ろに立っていた。

さっきやられたバレンアの体は分身で、戦闘が始まる前からこういった仕掛けをしていたのだ。

それからバレンアは赤い球の爆弾を取り出し、側近に目掛けて投げつけた。

側近のところまで大きな爆発音が鳴り響く。とても大きい爆発で、普通の人なら木っ端微塵になるところだが……側近は普通の人じゃなかった。

「そう簡単にやられはせんぞ！」

「やられると思ってないよ！」

バレンアはまた新たなマジック攻撃を用意していた。無数のトラップが側近に襲い掛かる。あまりの数の多さと速さに、さすがの側

近もかわせなかった。いくつかの箇所を切っけてしまい、血が出てしまった。

「お前、名は？」

「バレンア＝ウルビーノ」

「ほう……あの天才マジシャンか。おれは教皇様の側近、ランス＝キルエツトだ。楽しい戦いが出来そうじゃないか」

ランスは嬉しそうにバレンアを見た。バレンアほど強いやつが久しぶりなのかもしれない。

ちなみにミーモトリキリヨウはあまりの格の違いに腰が抜けていた。

*

レミーに炎龍波をモロに当てたロサイル。レミーは相当なダメージを負ったようで、結構苦しそうだった。

ヴァームはこれで勝負が決まったとも思っていた。そしてロサイルの成長ぶりにも驚いていた。

だが、こんなところで簡単に終わるレミーではなかったのだ。ロサイルはそんなこと、百も承知だった。

破壊に取り付かれてしまったやつが、一番破壊した奴を破壊できないで終わるはずがないと。

もちろん終わることはなかったのだが、そこからの攻撃には度肝を抜かれた。

「こうなったら、ここ全てを滅ぼしてやる」

「何!？」

そう言ってから、レミーは空に手をかざし、大声で技名を叫ぶ。

『炎の流星群!』

すると、本当に大きな炎の流星群がロサイルたちに襲い掛かった。その大きさは東京ドームと同じくらいと言っても過言ではなかった。そしてその大きな流星群がロサイルに襲い掛かった……

第64話 レミーの猛反撃（後書き）

次話、ロサイルの結末は……

第65話 炎の流星群

レミーが降らせた炎の流星群。それは本当に大きい物で、東京ドーム1個分くらいの大きさはあった。こんな大きさの攻撃がいくつも降るとなると、北デューナどころか、全世界が滅びるかとも思う。しかし、ロサイルのような何も使っていない人間に、ここまで追い詰められた純金鉱石を使ったレミーの焦りがこの結果だろう。

こうして追い詰められているうちに、脳内はどんどん破壊という考えに侵食されてしまう。終いには、仲間や、教皇までも傷つけるような行動に出てしまった。

哀れだなとロサイルは思う。

それより今はこの状況をどう切り抜けるかだ。

ロサイルは炎のチャージ状態になって、バレンアの元へと駆けていく。

するとそこで……

「逃がすか！ ロサイル！ クロウズ！」

レミーがロサイルに指を向けて、魔法を放った。

「移動封印！」

その魔法に気づくのが遅れたロサイルは、魔法を食らってしまった。攻撃魔法ではなく、痛くもかゆくもなかったが、動けなくなってしまった。

この状況で動きを封じられるのは非常にまずい。そのロサイルが動けなくなってしまった場所に、炎の流星群の1つがロサイルの方にやってきていた。

「嘘だろ……」

すごい勢いでこちらにやってくる。もちろん避けられるはずがない。ロサイルはもがいてその魔法を解こうとしたが、解けるはずも無く、ただただ炎の流星群がこちらに来るのを待つだけだった。

そして無残にも、ロサイルは炎の流星群を食らってしまった。
ロサイルの倒れた姿があった。どこにも力が入っていないような、
まるで……遺体だった。

それに動揺せず、バレンアはすぐに1つの炎の流星群に向かって飛んだ。

「ちよつとバレンア！ お前死ぬ気か！？」

リキリヨウが心配した表情で見ている。けどバレンアは炎の流星群に向かって飛び続ける。

「今は、あれを何とかしないといけないんだ」

そう言つて、かぶっていたハットを、炎の流星群に向けて技を発動させる。

「ラージハット！」

するとさつきまでバレンアの頭の大きさだったハットが、みるみる大きくなり、結果的に炎の流星群の1つの大きさにまでなった。

そしてその穴に炎の流星群を入れる。

すごい勢いで、すごい力を持っているため、バレンアは耐えるのに無理があった。

バレンアの考えからすると、これからはじき返さなければいけないらしい。

（やるんだ。世界を救うために！）

バレンアの全ての力をここで出し切ったといつてもいいくらいの力で、攻撃に耐えた。

すると、ハットの中から、たくさんの炎の不死鳥が飛び出す。

「行け！ 炎の不死鳥！」

不死鳥は流星群に向かって飛び立っていった。

第65話 炎の流星群（後書き）

次話、不死鳥が炎の流星群に挑む！

第66話 かけた命と危ない命

バレンアがマジックによって出した無数の不死鳥。それらがレミ
ーの出した炎の流星群に向かって飛び立っていく。

不死鳥は決して死ぬことのない鳥。どんなに弾かれても、また立ち向かっていく。そうしているうちに、炎の流星群の数が減ってき
た。

終いには全てを消し、炎の流星群からの脅威は逃れた。

そしてバレンアはランスの方を振り向く。

「さあ、邪魔も消えた事だし、再開しよう……と、言いたいところ
だけど、やめにしないか？ こっちにはまだ無数の不死鳥を持って
いる。あんたに勝ち目はないと思うんだけど？」

「はっはっは、本当に面白い奴だな。冗談もいいところにしとけよ。
こんなところでやめて教皇様のところへ行かす側近がどこにいる？」

「それもそうだよね……やっぱ戦うしかないか……」

「ああ、戦うしかない。それと、決して死なない鳥、不死鳥を持っ
ていたら無敵気取りか……笑わせてくれる。不死鳥が死なないなら

……」

喋りながら、ランスは剣を突き出し、目に留まらぬ速さでバレン
アの方に向かって走った。

あまりの速さにバレンアは反応が出来なかった。

そしてそのまま、肩に剣が刺さってしまう。

「不死鳥を持っている本人を殺すまでだ」

バレンアはその場で膝をつき、肩を抑える。

肩からは大量の血が溢れ出していた。肩を押さえている手も、す
ぐに赤色に染まってしまふ勢いで。

その場で苦しそうにしているバレンアに、ミーモトリキリヨウが
駆けてくる。

「おい、大丈夫か!？」

「大丈夫だよ……これくらい……」

再び立ち上がって、バレンアはランスの方に向かって歩いていく。リキリヨウはそれを見ているだけだった。

「……本当にこれでいいと思う、リキリヨウ?」

「ミーモ……」

「だってこれじゃあ、今までの私たちと変わらない! ただ弱くて、
見てるだけで……」

「……………」

ミーモは泣きそうな顔で言った。それと同時に、リキリヨウも頭
の中で色んなことを考えた。

ロサイルたちは、自分のやるべきことのために、自分の全て
命までをもかけている。俺らはどうだった? 復讐なんて、いいこ
とではもちろんなかったが、命までかけたか? 死んでも成し遂げ
ようと思ったか? 思っていなかった。だって俺たちは弱かったか
ら。人に頼ってばかりいるやつらだから。今だって、ただ怖くてビ
クビクしているだけ。仲間のヴァームは、命をかけている。仲間の
ために。だったら……

リキリヨウは、ミーモのほうを見て、力強く言った。

「命……かけてみるか」

「うん!」

2人はランスの方へ向かって歩き出した……

*

一方、炎の流星群の被害を受け、ほぼ生存不可能なロサイルは、
何とか生きていた。(ヴァーム調べ)

本人曰く、炎属性だったから、炎は左手に最大限吸収されたので、
威力が落ちた、そう言っていた。

だが、とても動ける状態ではなく、ただ地面に倒れているだけだ

った。

そこに、あいつがやってくる。

「哀れだな。こんな形で最後を迎えるとは」

「……………」

レミーは剣の先をロサイルに向けている。それを落とされたら、もうロサイルの命はない。

「私はお前を確実に殺す義務がある。お前には引っ込んでもらわずに移動封印！」

すると、ヴァームの動きも封じられてしまった。まさに絶体絶命だ。

「さらばだ、エグレサツタ村の少年……………」

レミーは剣を勢いよく振り下ろした……………」

第66話 かけた命と危ない命（後書き）

次話もバレンア&ロサイルです。

次々話からウイニングウイングンツの方をやっていきます。

第67話 立ち上がった戦士たち（前書き）

今回で一旦ロサイルたち、北デューナの方は終了です。
いや！ また後で北デューナ描写ありますからね！？
かなり後になるかもしれませんが……
では67話どうぞ！

第67話 立ち上がった戦士たち

リキリヨウとミーモの2人は歩き出した。仲間のために、命をかけるために……

もちろん2人も、自分たちはランスに敵わないことを知っていた。この3人の中でも1番強いバレンアが大量の血を出してしまうから。たった1回の攻撃で、こんなにもバレンアをボロボロにしてしまったから。

それでも2人は後に引かなかった。もう決心したから。

「おい！ 教皇の側近！ 俺たちが相手だ！」

何も迷うこともなく、リキリヨウはそう言った。ミーモも、いつもの可愛い子ぶった表情ではなく、鋭い目つきでランスを見ていた。「どういっつもりだお前ら。まさか、俺に勝てるんでも言うのか？」ランスも鋭い表情で返す。だが、ひるむことなく、リキリヨウは言う。

「勝てるわけねえだろ。俺たち弱いから。けどな……バレンアはお前より強い奴と戦わなくちゃいけねえんだ！」

「……………」

「つまりだな。俺たちはバレンアに先に行ってもらうために、この戦いを引き受けるという事だ」

人差し指をランスに向けて言い放った。

教皇の側近なんていう強い奴に勝てるはずがない。そんなの理解している。でもバレンアに先に行ってもらうために、この戦いを引き受ける。

そんな思いの中に、言葉に出さなかったものがあった。

そして……俺たちはこいつと戦わなくちゃいけない。バレンアが教皇と戦わなくちゃいけないみたい……

そんな考えに対して、バレンアは反対だった。

「自分たちが勝てないのを知っている？ なおさら反対だ！ それはつまりお前たちが死……」

バレンアが喋っているのをリキリヨウが妨げ、ミーモが言った。

「大丈夫、もう……」

『死ぬ覚悟は出来てるから……！』

「でも……！」

「どういったって引かないぞ。俺たちは決心した」

バレンアはその決心に押され、塔の方を見た。

「絶対……死ぬなよ」

そう言っつて、バレンアは塔を昇り始めた。

*

レミーは勢いよく剣を真下に下ろした。ロサイルの心臓を狙って、真っ直ぐに落とす。

ロサイルは大ダメージで、速く動けないし、ヴァームは移動封印で動きが封印されている。

絶体絶命のピンチだ。それを嬉しそうにレミーは見ていた。

「さらばだ……エグレサッタの少年」

ロサイルの心臓にもうすぐ剣が当たりそうになったその時！

1人の男性がその剣を弾き、ロサイルの危機一髪の状態を救った。

「誰だ！？」

「死にかけの人間に止めを刺す。好かない趣味だな、レミー」

「お……お前……！」

その姿を見たとき、ロサイルも驚いた。

青色の杖から剣が伸び、その剣でレミーの剣をはらってくれたのが分かる。その見慣れた剣に、綺麗なブルーのマント、整った顔立ち……

『シヨウザン!!』

そう、異端審問官のシヨウザンだった。

「シヨウザン、どうしてここに？」

「ここに来るのは当たり前だろ？ それより速く行け。お前がいるべき場所はここじゃない。塔のてっぺんだ」

そう言っつて、シヨウザンは杖から綺麗な白色の呪文をロサイルにかけた。すると、さっきまであった痛みが、少し消えた。

「さっきよりはマシになったはずだ。さあ、行け！」

「ありがとう！」

ロサイルは全速力で塔に向かった。

「さあレミー、始めようか」

「純金鉱石を取り込んだ私に勝てると思うか？」

「勝てるさ。それをロサイルが教えてくれたからね」

2人ともが剣を構え、因縁の対決が始まった……

第67話 立ち上がった戦士たち（後書き）

次話、ウィニングウィングンツの方は……どうなるエリス!?

第68話 妖精たちの手助け（前書き）

今回からしばらくウィニングウィングンゲンツでのお話です。
終わり次第、オーシャンアイランド。
そして最終決戦、北デューナです。
よろしくお願ひします！

第68話 妖精たちの手助け

一方、ウイニングウインゲンツ。

村長が純金鉱石を体内に取り込み、絶大なパワーを手に入れ、あつという間にエリスを血だらけにしてしまった。

その一撃はずっしりと重く、エリスも立てずにいた。

「はは……あははははは！！ 哀れだな、エリス」

そう言った村長。エリスには破壊を喜んでいるようにしか聞こえなかった。そう、すでに純金鉱石特有の、破壊しか脳に残らなくなる症状が出ているのだ。

「さあ、終わりだエリス！！」

先ほど一瞬でエリスを血まみれにした小刀で、村長はエリスの心臓を狙った。

エリスは何も出来ず、ただ、死を待つだけだった。

エリスは静かに目を閉じた……

「……あれ？」

エリスはまたゆっくりと目を開いた。自分がいる場所はウイニングウインゲンツ。真っ白な雪がたくさん積もる幻想的な村。そして自分の所だけ、雪が真っ赤に染まっている。

そう、エリスは死んでいなかった。

「どうして……？」

すると、遠くから声が聞こえた。

「女の子がいるところに俺の姿あり。光速のスナイパー、ファルダ
ン参上！」

かつこよく登場したのは、ウィニングウインゲンツにいるロサイルのおじいちゃんの知り合い、ファルダンだった。そこでエリスはファルダンに声をかける。

「それはただのストーカーですっ!!」

それを聞いた途端、ファルダンはショックを受けていた。「せつかくの登場シーンが……」と、嘆きながら。

だが、ファルダンの手助けは非常にありがたいものだった。ファルダンがいなければ死んでいたからだ。

「感謝します」

「はいよ!」

そう言っただけでエリスは、札入れの中から、新たな伏せ札を2枚取り出した。

そのうちの1枚をファルダンに向けて放った。

「伏せ札! 攻撃妖精!」

その札から赤い妖精が召喚され、ファルダンに向かって飛んでいく。その妖精はファルダンの後ろにつき、サポートする形になった。攻撃妖精は、一時的に攻撃力を高め、ファルダンのような銃を使う者は、とつてもその銃が軽く感じるようになる。そのため、すばやい動きが取れるようになるのだ。

「へへっ、サンキューな、エリスさん」

「それで少し粘ってもらえると嬉しいです」

そしてエリスは、もう1つの札を自分に向けて放つ。

今度は白い妖精が召喚され、エリスの周りを包み込む。

「なるべく早くお願い……回復妖精」

回復妖精は、そのままのとおり回復をしてくれる妖精で、傷を治していつてくれる。

だが、全回復にはかなりの時間がかかる。だからしばらくはファルダンに粘ってもらおう作戦だ。

そうしてエリスは、回復を始めた……

「じゃあ始めようか、村長さん」

「お前など、簡単に捻り潰してやる」

こうしてウイニングウイングの戦争も始まっていった。

第68話 妖精たちの手助け（後書き）

次話、ファルダンVS村長。純金鉱石を取り込んだ村長にファルダンは対抗できるか……！？

それと、10月14日の金曜日まで更新は出来ません。なぜかという、そう、テストが迫ってくるのです。では、僕も純金鉱石を取り込んでテストに……

ドカツ！ バキツ！ ドカンツ！（ロサイルたちからの制裁）

……炎のチャージを使って頑張ります！（汗）

第69話 過ちの弾（前書き）

遅れてすみません。

テストがあつたので遅れました。

……え？ 何でUBKは更新出来てるんだ？

あはははは！ それは金曜日の18:00ぎりぎりだったから、頑張って更新したのさ！

それからはまあ……いろいろな用事がありまして……結局、今日になっちゃいました。

すみません！

第69話 過ちの弾

攻撃妖精のおかげで力がみなぎってくるファルダんと、純金鉱石を取り込んだ最強人間の村長。その2人の戦いが始まる。

村長はすぐさま小刀をファルダンに向け、勢いよく走り出した。もちろんファルダンは抵抗できるはずもない。ライフルという遠距離攻撃の武器で戦うからだ。村長は近距離でも遠距離でも対応できるのに対して、遠距離だけのファルダンは圧倒的に不利だった。ファルダンは防戦一方で、ライフルで攻撃をはじめたり、小刀での攻撃をかわしたりするだけだった。

「ほらほら！ 避けてるばかりじゃ勝てないぞ！」

「……………」
ファルダンは無言でかわし続ける。

正直、ファルダンは攻撃をすることをあまり考えていなかった。これはあくまでも時間稼ぎ、と、自分に言い聞かせていた。

だが、隙あれば、といった感じで攻撃は考えている。せっかくエリスが攻撃力を上げてくれたのだから。

すると、村長が急に攻撃をするのを止め、ニヤツと笑って、エリスのほうを向いた。

「お前が戦う気がないのなら、戦う気のあるこいつと戦うまでだ」
そう言って、村長はエリスに向かって突っ込んでいった。純金鉱石で強化されたスピードは、まるでジェット機だった。

純金鉱石を取り込んだ状態の村長の攻撃を、正面から深く受けたエリスは、回復量が半端でなく、時間がかかっていた。今の状況で村長と戦うのは非常にまずい。

「くそっ……………」

ファルダンは、無理だと分かっている、村長に向かって発砲した。

その様子を見て、更に村長は口を吊り上げる。

そう、これは村長がおびき出した作戦。

それに気づいたときには、もう遅かった。

村長の目の前にいたのはエリスだ。その村長に向けて発砲をした。だけど、そんな普通の弾、純金鉱石を取り込んでいる村長には、ボクシング映画でよくある、スローモーションのパンチを避けるような感覚なのだ。つまりそのまま避けられると……

「エリスさん！！ 逃げて！！」

「えっ！？」

もちろん反応できるはずもなく、ファルダンが放った弾はエリスの肩を貫いた。村長はそれを表情変えずに見る。

自分のミスでこうなった。自分のミスでエリスさんがさらに深い傷を負ってしまった。自分の思考ミスでこうなった。

そのことを考えたファルダンは、エリスに聞いた。

「エリスさん。回復妖精の力だと、全回復にどれくらいかかる？」

「…… 1時間は…… かかるかと……」

「1時間か……」

それを聞いて、ファルダンは村長のほうを向いて、力強く言った。

「おい。そんなに戦いてえなら戦ってやるよ。覚悟しな！」

「ふん、覚悟するのはそっちだろうが……」

そして攻撃を開始したファルダンと村長の本当の戦いが幕を開けた。

第69話 過ちの弾（後書き）

次話、激闘のファルダンVS村長！ その結末は……！！？

第70話 誓いが果たせず……（前書き）

70話達成！

みんな褒めて褒めて！

すいません。調子に乗りました。

これからもよろしくお願いします。

第70話 誓いが果たせず……

ファルダンはすぐさま村長に銃を向ける。そして迷うことなく発砲。

村長にはもちろん当たるはずなく、あっさりかわされてしまう。

「おおー、容赦ないね。ならこっちも本気で行くか」

そう言っつて村長は札を取り出した。それは新型の札、伏せ札だった。

「出でよ！ 刃龍！」

はりゅう

その札から全身が刃物で覆われた龍が召喚された。普通の剣よりは切れ味がよさそうだ。

「伏せ札の……召喚獣!？」

それに驚いたのはエリスだった。正直ファルダンには何がすごかったのか分からなかった。

昔からある札、切り札は獣を召喚する物が多い。普通の陰陽師が使うようなものだ。

一方で新しい伏せ札は、武器や身体能力を上げる物が多い。

その伏せ札での獣を召喚するものは極めて少なく、『伝説の伏せ札』といわれるほどだ。

その獣が目の前にいる。力は計り知れない。

「どんなものであれ、僕が撃ち抜いてみせる」

ファルダンは銃口を刃龍に向け、すぐに発砲する。その弾は刃龍にしっかり当たった。だが、全身が刃物で覆われている刃龍にとつては、痛くもかゆくもない。

そして、雄叫びを上げながら、ファルダンに向かってやってくる。

ファルダンは必死でかわすしかなかった。近戦は全くといっていいほど出来ないのです、ただただかわし続けるだけ。

くそっ！ このままじゃ……勝てない！

心の中でそう思った。時間稼ぎなんていつせいいことはもうしないと誓った。正々堂々と戦うことを誓った。だからこんなところで負けるわけにはいかない。

ファルダンはポケットから小さなハンドガンを取り出し、刃龍に向けて連射した。

でも、やはり全てを弾き返してしまう。

ただただ迫ってくる刃龍。少しでも触れたら即大怪我。そんなサバイバルの中で、ファルダンは必死に食らいついていた。

「おいおい……こいつ弱点とかないのかよ!？」

不意にそんな独り言まで言ってしまう。

すると、それに対して後ろから返事がきた。

「ないよ。弱点は。それと、逃げ道も」

そう、村長だった。

すでに小刀をファルダンに向けている。かわせる余地はない。

そして、村長はその小刀で一気に刺した。

大量の血が溢れ出した。

「すみません……エリスさん……」

そう言っただ倒れた。

真っ白な雪が、エリスの時と同様に赤く染まっていく。

「充分です、ファルダンさん」

エリスはすでに立ち上がり、戦闘態勢に入っていた。

回復妖精を2体召喚して、回復スピードを高めていたのだ。

「しづといな、お前も」

「このまま死ぬわけにはいかないんで」

そしてエリスと村長の戦いが再び始まる……

第70話 誓いが果たせず……（後書き）

次話、再戦！

ウィニングウィングエンツもクライマックス！

第71話 光速の発動術

回復妖精とファルダンが少しでも粘ってくれたおかげで、そこそこ傷口が治ったエリス。万全ではないとはいえ、十分戦える状態となった。

しかし村長はすぐさま小刀を構え、構えていないエリスを勢いよく刺した。

もちろんかわせるはずもなかった。

「ははははは……エリス、これで分かっただろう？ 普通の人間はどうあがいても純金鉱石を取り込んだ人間には勝てないのだ!!」
大量の血が溢れ出す。またウイニングウインゲッツの白い地面が赤色に染まる。

「また雪が血で赤く染まったな、エリス」

「……そうですね……でも、その血は誰のだと思いますか？」

「何を言っている!？」

エリスはすつと右肩に手を添えた。村長もエリスと同じ行動をとる。そしてエリスはその手を見た。また村長も同じ行動をとる。

すると村長の手には、赤い血が付着していた。

「なっ……!!」

そう、その血は村長の肩から出たものだった。

エリスは瞬間的に『光の弓剣』を召喚していた。矢のような剣と小刀では、明らかに弓剣の方がリーチが長い。そのリーチの長さで勝ったのだ。

「お前……なぜそんなに早く召喚できた!？」

「仲間が速術法を教えてくれたからです」

エリスは、この戦争が始まる前に、リラと連絡を取っていた。リラが無事にオーシャンアイランドに到着することが出来たという報告のためにだ。そのときにこんな会話をしていたのだ。

*

「もしもし、リラです」

「あ、リラさん！ 無事にオーシャンアイランドに着いたんですね」

「うん。こつからみんなと最後の準備を進めていくんだ。エリスはどう？ 特訓は順調？」

「ん〜……順調っていえば順調なんですけど、順調じゃないっていえば順調じゃないんですよね」

「どういうこと？」

「今までの召喚の中で一番強いものを召喚できる力を手に入れたのですが、発動までに時間がすごくかかってしまってます。ウィニングウインゲンツにだって、すごく強い人が来ると思ってます。その人に発動時間が遅いとこの技は通用しないと思いますから。そこら辺は順調じゃないんです」

「……速術法を使ってみたら？」

「速術法？」

「うん、配達は戦争までに間に合うと思うから、速術法についての本、約100ページと、小説「ラブラブハイスクール」を送るね。これを10分で読むんだ」

「ちよつと待つてください。色々気になることがあります。まず、10分で読むのは不可能ですし、何ですか、そのダサイタイトルの小説は？」

「ずべこべ言わずに読む！」

「は〜い……」

*

「で、速術法についての本を読んだ後に「ラブラブハイスクール」を読むと、10分で読めたわけですよ。案外これが陰陽師にも使え

るものだと思って、ラッキーだなーって」

エリスはある札を取り出し、村長に向けた。

「光の弓剣できり続けても十分勝てますが……生憎そんな力残っていないので、これで終わりにします。覚悟してください、村長！」

そう言っってエリスは最強の札を召喚した……

第71話 光速の発動術（後書き）

次話、ウイニングゲウインゲンツでの激闘がついに決着！
勝つのはエリスか、村長か！？

第72話 世界が変わる瞬間（前書き）

今回でウィニングゲインゲンツでのお話は終了です。

第72話 世界が変わる瞬間

エリスは回復妖精と光の弓剣を札に戻し、新たな札を取り出した。そしてその2つの札を召喚した。

「斬殺狼！ 光の帯剣！」

1つの切り札と1つの伏せ札を召喚した。それは陰陽の隠れ里での戦いの時に里を滅ぼした狼と、エリスの身長くらいの帯剣が現れ、その2つを合体させた。

すると、狼が金色に輝きだして、牙の1つが大きな帯剣と化した。

「これが必殺の札技……」

『おおかみけん
狼剣！』

金色の狼が村長に襲い掛かる。

しかし、村長も引き下がるはずがなく、同じ技で対抗しようとした。

「お前に出来るなら私にも出来る！ 狼剣！」

斬殺狼と光の帯剣を召喚し、村長も狼剣を召喚した。

しかし、うまく発動せず、そのまま札に戻ってしまった。

「なぜだ！？ エリスに出来てなぜ私には出来ない！？」

「教えてあげますよ……この斬殺狼……あなたのなんですよ村長」

「何！？」

「陰陽の隠れ里のみんながこの前送ってくれたんです。つまりは陰陽の隠れ里みんなの思いが詰まってるんです。もちろん、優しいころのあなたの思いも……」

そうして狼剣が村長を襲った。

こうしてウイニングウインゲッツの激戦は幕を閉じた……

*

ヒヨウルスも雑魚を片付け終えたみたいで、その真っ白な地面にぺたんと座っていた。

「おう、終わったか」

「はい」

「しっかし驚きだな。純金鉱石を取り込んだ奴に立ち向かえるなんて。しかも勝つなんて」

「そりゃあ、怖かったですよ。でも……ロサイル君やバレンシア君、リラちゃんだったら絶対に立ち向かうだろうなって……」

ヒヨウルスは煙草の煙を口の中からたくさん出して、少し嬉しそうに笑い、そしてエリスに言葉を投げかけた。

「行かなくていいのか？ 北デューナ」

「え？」

「元気があるなら行ってこい。あそこは間違いなく激戦区だ。2人で勝てるとは思えないからな。純金鉱石を取り込んだ奴が多数いる」
「でも、ここからじゃ遠いですよ？」

「家の横にあるスノーモービルに乗っていけ。それにお前は北デューナに行く必要があるんだ」

またヒヨウルスはたくさん煙を口から出した。そして、こう言って送り出した。

『行って、見てくるんだ。世界が変わる瞬間を』

その言葉を聞いてエリスは何も言わずにスノーモービルに乗った。そして大きな音を上げながら北デューナへと行ったのだ……

第72話 世界が変わる瞬間（後書き）

次話、オーシャンアイランド！

第73話 南の島の決戦（前書き）

今回からオーシャンアイランドです。

これが終わり次第で、再び北デューナに戻ります。

第73話 南の島の決戦

一方そのころのオーシャンアイランド。

近衛騎士の多くが流れ込んできたオーシャンアイランドは、北デューナやウイニングウイングンツよりは楽そうだ。近衛騎士には新人が多くいて、ベテランが少ない。つまりは教皇や村長といった飛びぬけて大きな戦力を持つ者が少ないという事だ。

そんなオーシャンアイランドで激戦を繰り広げるリラは、近衛騎士のクラースケンと戦っていた。

クラースケンは重罪を犯したといわれていたロサイルたちに死刑宣告をした男だ。そんな重要なことを任せられているのだから、こそこの信頼があるのだろう。

その戦いは今も続いていた。

*

クラースケンはしつかりと剣を構え、リラの方へと走っていった。

「トルネードキラーガード！」

リラの周りに風の刃のガードをはり、その一撃を防いだ。

「まったく、厄介な技持ってるんだな」

クラースケンはトルネードキラーガードの刃で、剣を持っていたほうの手を少し切っていた。剣を握る力が弱くなっているのがリラには分かった。

ならばここが決着をつける時だ、とも。

リラは本を開き、今まで唱えたことのないところの文字をなぞる。それをクラースケンのほうへと向け、一気に放つ。

「アイスサルトトルネード！」

無数の氷の刃が目にも留まらぬ速さでクラースケンを襲っていた。もちろんクラースケンはかわした。だが。

「トルネードキラーガード！」

クラースケンの着地地点にいたリラが、無数の風の刃をそこにはついていた。

空中で身動きがとれるはずもなく、クラースケンは刃に飲み込まれた。

勝利を確信したリラは、隊長格のところへと歩を進めた。

*

そしてリラ、キルトといった有力者は隊長ジーラスの元へとやってきた。

「クラースケンをあっさり破るとはな」

ジーラスは噛んでいた風船ガムを地面に吐き捨て、そしてゆっくりと立った。

「ま、予想通りっちゃあ、予想通りだな」

ジーラスはゆっくりと剣を引き抜いた。そしてジーラスの横で立っていた副隊長のザメサ、ノイキルの2人も剣を構える。

「新人近衛騎士ども、よく見ておけ。近衛騎士は、力だけで勝つもんじゃないんだ」

そうして、オーシャンアイランドでの頂上決戦が幕を開けた。

第73話 南の島の決戦（後書き）

次話、決戦開幕！

ジーラスVSリラ、ザメサVSキルト、ノイキルVSユガと愉快な仲間達。

第74話 兄の影流

ユガたちは、近衛騎士の副隊長ノイキルとバトルを展開しようとしていた。

ノイキルはつい最近副隊長に就任した新人副隊長で、ザメサほどの力は持っていなかった。

「ふゝ、副隊長としての初仕事がこんな大きなものになるとはな…
…ただの雑魚の排除か」

深く息をはいてノイキルはユガたちのほうを見た。それに対してユガは少しにやけてノイキルに言った。

「ただの雑魚？ 生憎そこまで弱くないんだよ」

「ほう、ばあさんが相手か……」

「倒せるもんなら倒してみな、こいつらを！」

「つておゝい！ すっげー、人任せじゃねえか！」

ノイキルはしっかりとツツコミを入れた。さすが副隊長！

という茶番(?)は置いといて、戦闘が始まった。

ノイキルは次々とオーシャンアイランドの兵士達を斬っていく。

リラたちが新人近衛騎士たちをあっさり倒したように。

しかし、その兵士の中で唯一ノイキルの攻撃に太刀打ちできる者がいた。

ノイキルの重い一撃をしっかりと受け止め、その剣を被^{はら}う。

「少しは出来るやつがいるようだな」

「そんなことを近衛騎士の副隊長に言ってもらえるとは光栄だね」

「……名は？」

「ワーズ」デ」シャナード。オーシャンアイランド組リーダーのリラの兄だ」

そう、その男はリラの兄、ワーズだった。剣士になるための勉強をしていて、しばらく留学していた。最近になってオーシャンアイランドに帰ってきたのだ。その腕は簡単に破れるものではない。

やっと太刀打ちできる相手が見つかったノイキルは、嬉しそうに剣を構えてワーズの方へ走っていた。

とてもすばやい攻撃で、かわすことは誰も出来ない、そう思えるほどだった。

ワーズはもちろん避けようとはせず、剣でその攻撃を受け止めた。そしてその剣に、どす黒い妖気のようなものをワーズは注入した。すると、ノイキルの影から1本の刃が飛び出し、そのままノイキルを刺した。

「なっ………！」

ワーズが剣に注入したのは「影流^{えいりゅう}」というものだ。これに触れたものの影から刃が飛び出すという、とても厄介な技だ。

しかもこのオーシャンアイランドは年中晴れなため、いつでも影が出来る。

ワーズにとってはとても都合のいいところだった。

「ふっ、もうどうしようもないか………」

ノイキルも剣に何かを注入させ、剣先をワーズに向けた。

「もう最大の技を使っちゃうよ。負けたら意味ないから」
ノイキルは最大の技を発動させた……

第74話 兄の影流（後書き）

次話、早くもワーズとノイキル決着！

かなり意外な手で……っと！ これ以上はネタバレに！

出来れば今日に更新しようと思います。

受験前でパソコンが使えなくなる前に完結を目指しているので、これからなるべく早めに更新しようと思います。

第75話 光と幻影と強風

ノイキルもワーズ同様、剣にあるものを流れさせて、最大の一撃を放とうとする。

「食らえ、光流！」

しかし、ワーズとは違って白い光が剣から溢れ出している。違うのは色だけで、攻撃方法などは何も変わっていないかった。

さっきのワーズの影流は、影から剣が飛び出し攻撃した。

ノイキルが使った光流は、能力は一緒なので、出てくるところは光のある場所。向こうは向こうでオーシャンアイランドは好都合な場所だった。

「太陽かつ！」

ワーズがそれに気づいたときにはすでに頭上から大きな剣が襲い掛かってきていた。ワーズはかわせるはずもなく、頭を思いっきり刺された。大量の血と内臓が少し飛び出るような映像が目の前に広がった。

「所詮こんなものか。影をうまく使いこなせていない」

「お前は光をもっとうまく使いこなせてねえけどな」

目の前には何1つ傷がついていないワーズがいた。

「なっ……なぜ!?!」

「幻影は得意分野でね」

そう言ったのはユガだった。知らぬ間に幻影をかけていたのだ。

ワーズは普通にかわせていたのだ。それがノイキルには思いっきり刺されたように見えていた。

そして自分の影と、剣の光で影が増え、さっきよりたくさん刃がノイキルに襲い掛かっていた。

「敵が2人いるっていうことをすっかり忘れてたみたいだね」

ノイキルはその場で倒れ、立ち上がれなかった。

*

一方、ザメサと戦っているキルトは逆に押されていた。近衛騎士もう一人の副隊長ザメサは、ユガが得意としている幻術、幻影の使い手で、その腕は世界一とも言われている。

キルトはその幻影に騙されることが多かった。斬ったと思ったら斬られている。

その強さにキルトは手も足も出なかった。

「ふう……こんなもんか」

そう言っただけでザメサはその場で座り込んだ。

「俺も眺めてとこかな。別に世界がどつちに傾いてもええし」

キルトは悔しくて悔しくて仕方がなかった。でもどうしようもない。

「まっ、自由のほうがあええけどな」

そう言っただけでザメサは煙草の煙を吐き、隊長ジールラスとリラの戦いを眺め始めた。

*

そしてリラとジールラスは互角といった勝負だった。しかし、若干ジールラスが押していた。

というのも、剣と呪文ではスピードが桁違いだ。速術法もこんなに速い相手には意味がない。それでもリラはうまく隙を見て攻撃を放っていた。

「ウインドトルネード！」

一瞬の隙を見逃さず、ジールラスが止まるそこを見てウインドトルネードを放った。

ジールラスに切り返す時間はなく、ウインドトルネードをモロに受けた。

「やった？」

しかし、ジーラスは普通に立っている。少し髪が乱れただけだった。

「なんだこの技は？ ただの強風じゃないか」

「なめられたもんだね……」

果たしてこの隊長に勝てるのか……

第75話 光と幻影と強風（後書き）

次話、オーシャンアイランドでの頂上決戦！
リラVSジーラス

第76話 危険な暴風域（前書き）

ザメサ扱いやすいつ！

関西出身の僕は、いつか関西弁キャラを使いたいと思っていたのですが、先走ってしまい、無理やり色Iに入れちゃいましたww
頑張って標準語にする必要ないからいいな。

第76話 危険な暴風域

リラのウィンドトルネードをただの強風としか感じなかった近衛騎士隊長ジーラス。特訓を経てパワーアップしたはずの技が、隊長にとつては痛くもかゆくもない。少し髪が乱れただけだった。

すると今度はジーラスの方から仕掛けてきた。それにすぐ反応できたリラはすぐに構えを取る。

だが、反応できたと思つたのは、オーシャンアイランドの人たちだけだった。近衛騎士たちは安心した表情で見ている。

そう、リラはもう斬られていたのだ。

「う……うそ……」

リラにはジーラスが地面を一蹴りしかしていないように見えた。

そして、これからリラに攻撃を仕掛ける……はずだったのだ。

その光のような速さで斬ってしまった。これからではなくもう攻撃を仕掛けていたのだ。

「そんな……リラ皇女が……」

「あ……ありえない……」

島民の人々も驚きを隠せず、動揺していた。オーシャンアイランドの大將があつさりとなられてしまったのだ。動揺するのも無理はない。

「あんな速さがこの世に……」

キルトも驚きを隠せず、ただただ言葉を失って見ているだけだった。

「あの人の凄いとこはここなんやな」

ザメサが嬉しそうに見ていた。地面に座り、元々細い目を更に細くして、豊かな表情で言った。

「あの人の凄いとこはパワーやない。スピードや。あの譲ちゃんも

あんまり苦しそうやないやろ？ パワーやったら俺やノイキルの方が上や。でもそのパワーも当たらな意味ない。それで知らん間に負けとんや」

キルトにわざわざ説明した。キルトから見たザメサの表情は、ただ観戦を楽しんでいるように見えた。リラがどこまでジーラスに対抗できるか楽しみそうな雰囲気だった。

キルトは体勢を変えずに、またその戦いに目をやった。

ザメサが言ったとおり、リラはそれほどのダメージを受けていなかった。レミーの一撃のほう为重そうだった。

それからリラが反撃をしようとしたとき……

「遅いぞ」

またもや斬られてしまった。まだ全然立っていられるが、これを何回も受けているとダメージが蓄積され、終いには動けなくなってしまうだろう。

そうなる前に、と、リラは体勢を立て直すのではなく、本を開いて呪文を唱えた。

「トルネードキラーガード！」

体勢を立て直していらなくても、パワーのないジーラスならこの壁を破れないと思ったのだ。

見事にその作戦は成功し、体勢を立て直すことに成功した。

「やはりこの程度ではいかないか……」

「あくまでも大将なんでね！」

リラは再び呪文を唱えた。今度はリラから仕掛けていく。

するとリラは技を発動させず、魔法陣を自分の周りに持ちながら、ジーラスのところへと全力ダッシュしていった。そして、ジーラスの目の前で技を発動させる。

「デンジャーストリーム！」

発動と同時に空高く飛び上がったリラ。地面では風の刃がジーラ

スを囲んで攻撃をしている。そう、この技はただの強風ではなく、色んな物が混じって飛んでいる。台風時の暴風のように。その名のとおり、「デンジャー」な技だ。

出口がないと、どれだけスピードが速くても逃げられはしない。ジーラスはただ暴風が修まるのを待った。

暴風が止むと、体かなりの傷を負ったジーラスがいた。

「……やはり一筋縄ではいかないようだな」

「一気に攻めてくのが私流だから！」

「見た目に似合わず豪快だな」

そう言つとジーラスは剣をさっきとは違う持ち方にし、リラに言った。

「だったら俺も豪快にいつてみるか」

そういつて技を発動させた……

第76話 危険な暴風域（後書き）

次話、ジールラスが最大の技を発動！？

第77話 飛んだ刃と八つ裂きの場所（前書き）

ラッキーセブン！……どうでもいいか。

だらだらやり続けてとうとう77話まできちゃいました。

もうすぐ80話だな。ちょうどそれくらいでオーシャンアイランド終わりそうです。

完結まであと少し！

こんな作品をいつも読んでくださってありがとうございます。

第77話 飛んだ刃と八つ裂きの場所

ジーラスはさっきと違った構えをとり、リラだけを見て、技を放った。

剣を縦に持ち、剣先を自分の方に向けている。左手でしっかりと柄を握っている。そして空いている右手を剣先に添える。そして一気に右手をおろした。普通は右手に穴が開いて血だらけになるところだが、ジーラスは何の怪我也負わずただ平然と立っている。

リラにも一体何が起こったのか分からなかった。ただ、「豪快にいく」とジーラスは言った。だから絶対的に大きな技なんだ、と、リラは考えていた。

そう、その攻撃は半端なく大きな技だったのだ。

リラの目の前に広がったのは、たくさんの数の刃が飛んでいる情景だった。

「行け！」

ジーラスがそう言うと、刃たちはリラに襲い掛かる。よく見るとジーラスは剣を持っていなかった。あの剣の刃の部分を小さな刃に変え、空中に飛ばした。しかもその刃はジーラスの命令どおりに動く。絶体絶命といっていいほどのピンチに陥ったのだ。

リラは襲い掛かった刃をかわしていくが、すぐに違う刃が襲い掛かってきているため、完全に全部避けることができなかった。

こうなったら、とリラが本からまた呪文を唱える。

「トルネードキラーガード！」

リラの周りを風の刃が包み込み、ジーラスが出した刃を弾いていく。もちろん何度も襲い掛かってくるが、その度に跳ね返す。もちろんあの刃の威力も落ちてくる。かなり好条件な状況へと一変した。

と、思ったのは、またもやオーシャンアイランド側の人々だけだった。

「嘘でしょ!？」

何と、そのトルネードキラーガードの中にジーラスが入ってきていた。剣を持っていないから戦えないとはいえ、あの瞬間にいつのまにかこの中に入ってきていたことに驚きだった。

「ん〜、讓ちゃん、ちよつと危ないよな〜」

ザメサがまたもやキルトに説明しだす。

「ちゃんと理解してるんやろか？ こっちは国の護衛任されとるんやで？ 剣がなくなつて戦えるわ」

ザメサが言ったとおり、剣がなくなつてジーラスは戦える。

ジーラスは、思いつきりリラのお腹を蹴った。

とても重い一撃で、リラはお腹を押さえてその場に膝をついてしまった。

「ぐっ……!」

「もはやここまでだな。普段ならここでやめるが、息の根を止める必要がある。死んでもらうぞ」

そう言つて、ジーラスはリラの襟部分を掴み、トルネードキラーガードの風の刃の方へ投げた。

あのガードは全てが刃で出来ている。どんな人間も、どんなダイアモンドも、いずれは粉々になる。

そんな場所へ向かつて放り投げられたリラ。

どうやっても、助かる方法はなかった……

第77話 飛んだ刃と八つ裂きの場所（後書き）

次話、リラの運命は……！？

第78話 煙の人と衝撃波

リラはトルネードキラーガードの刃の中へと投げ込まれた。いくつもの刃がリラに襲い掛かる。

「……これまでか」

勝利を確信したジールラスは、消えてなくなったトルネードキラーガードの場所から離れ、去ろうとした。そのとき……！

「デンジャーストリーム！」

ジールラスをかなり傷つけたあの特技が発生した。

この技はリラしか発生させることができない。

それにジールラスは構えを取っておらず、たちまちその暴風へと飲み込まれていく。

「なぜ……生きている……」

リラは空にいた。そこから狙いを定め、ジールラスにデンジャーストリームを放ったのだ。

「また新たな呪文を使ったんだ。『スモークパーソン』っていう技。スモークパーソンとは、リラ自身が煙となり、どんな攻撃をも受けなくなってしまう、いわば究極奥義だ。」

その影響でジールラスに投げ飛ばされた後、煙となってトルネードキラーガードを通過し、空高くジャンプし、ジールラスに向かってデンジャーストリームを放った。これが投げ飛ばされた後のリラの行動だった。

「ふう……ここまで手こずるとは……」

デンジャーストリームでかなりの傷を負ってしまったジールラス。だが、本人は動けなくても、刃は動けるのだ。

「やっつけてしまえ！ あの女を！」

ジールラスが刃に命令し、空中で身動きがとれないリラに向かって襲い掛からせた。

刃はすごい勢いでリラに襲い掛かる。

しかし、煙となつてゐるリラにはまったく効かない。刃がリラの心臓部を貫いても、すぐに心臓部が煙と化し、そのまま通過してしまふ。

ジーラスも予想外の展開に焦つてゐる。

どんだんリラを斬るように命令する。だがリラをすり抜け、どんだん島の建物を破壊していつてゐる。

それに少し嫌気がさしたりラは、ジーラスに止めを刺しに行つた。しかし……

「所詮はお前、煙だろ？」

ジーラスは飛んでいた刃を自分のところに戻し、またいつもと違つた持ち方をした。

「なら、このオーシャンアイランドすべてを破壊すればお前に逃げ場は無いわけだ」

「なっ！」

ジーラスの剣が赤色に光り出し、それを地面に突き刺す。その突き刺した場所から赤い衝撃波が巻き起こり、オーシャンアイランドを包み込んだ。

ここの誰もが逃げる余地はなかつた……

気づいたらそこはまぎれもないオーシャンアイランド。なのだが、何もかもが滅びてしまつてゐる。……はずだつた。

「お前……」

ジーラスが放とうとした衝撃波はオーシャンアイランドを包み込み、滅ぼすことができなかつたのだ。ある青年が起こした行動によつて……

「やりすぎやで……隊長」

近衛騎士の副隊長、ザメサだった。

そのザメサが起こした行動は、衝撃波が巻き起こった地面を手で押さえたのだ。おかげでザメサの手は血だらけだった。

「ここは……壊したらあかん……」

ザメサは強い目をしていた。

第78話 煙の人と衝撃波（後書き）

次話でオーシャンアイランド終了です。

それからは戻って北デューナ。

ファスニード大陸大戦もクライマックス！

第79話 好きだった島（前書き）

今回でオーシャンアイランドは終了です。

第79話 好きだった島

「ザメサ……お前……」

思わぬところで体をはったザメサはその場でばたりと倒れた。もう、その手は使い物にならないんじゃないかと思うくらいひどい傷だった。

だが、リラたちには分からないことが1つあった。

どうして自分の体の一部を捨ててまでこの島を守ったのか。

それがまったく分からなかった。

それについてキルトが聞いたです。

「どうして……そこまでしてオーシャンアイランドを守ろうとしたんだ？」

「えっとね……実は僕の生まれた場所なんだ。ここ」

それを聞いたみんなは驚きを隠せなかった。あの近衛騎士の副隊長、ザメサがオーシャンアイランド生まれだったという事実。

「生まれがここだけで、出身はファスニード大陸より西にあるフアルキナ大陸。だけど、この島の雰囲気が好きだったんだ。みんなが笑ってすごしてる。笑顔が絶えなかったこの島が好きだったんだ」

その島を破壊しないように体をはったわけだ。手がつぶれているだけで、話す分には何の問題も無い。そこらへん、鍛えられている。そのことを打ち明かしたザメサは、ジーラスのほうを見て、あることを言い放った。

「もう俺らの負けや。今の隊長やったら譲ちゃんに勝てへんわ」
そう、負けを認めたのだ。

こうしてオーシャンアイランドでの激戦は幕を閉じ、また平和へと歩を進めていくのだ。

すると、オーシャンアイランド特有の新聞配達カモメがみんなに新聞を配布する。

『教皇の塔に反逆者、バレンアールウルビーノが突入。ロサイルックロウズも塔に向かってる』

そんな記事が書かれていた。

それを嬉しそうに、でも心配そうに見ていたリラに、ユガがリラに話しかける。

「行くかい？ 北デューナ」

「え？」

「行きたいんだろ？ あの2人が心配だから。止めやしないよ。一緒に世界、変えてきな」

リラの顔がパアッと明るくなり、大きくうなずいた。

すぐさま潜水艦に乗り、北デューナへと向かっていった。

最後は全員で世界を変えるために……

第79話 好きだった島（後書き）

次話、北デューナ！ 果たして世界を変えられるのか！？ 真最終章

へ！

今回、超短くてすみません。

第80話 最終決戦の幕開け（前書き）

80話達成！

これからもよろしく願いします！

第80話 最終決戦の幕開け

シヨウザンからの助太刀を得て、教皇がいる塔を駆け上がったいくロサイル。その少し先にはバレンアがもうすぐてっぺんというところまで来ている。

「ちくしょー、この階段上っていくの面倒くさいな……」

そう思ったロサイルは炎のチャージ状態になり、一気に階段を駆け上がった。いった。

するとバレンアにあっさり追いつき、2人でてっぺんを目指していく。そしてついに……

「ようこそ。てっぺんへ」

教皇の元にたどり着いた。風穴から吹いてくる風がロサイルたちの髪の毛を揺らす。

ついにここまでやってきた。こいつを倒せば世界は変わる。これが最後の戦争となり、少しずつ平和を作っていく。

そうしなければならぬ。この戦いだけは絶対に負けてはいけぬ。

「しかし、こんなに早くここまで来るとは。なかなか強いんですね」

「いや、違うな」

「何!？」

「たくさん仲間がいたからこんなに早く来れたんだ。レミーの戦いを引き受けてくれたシヨウザンとヴァームとピッチ。側近の戦いを引き受けてくれたリキリヨウとミーモ。ウイニングウインゲンツで戦っているエリス。オーシャンアイランドで戦っているリラ。一緒に戦っているバレンア。みんなと一緒にだったからの結果だ」

それを聞いて教皇は高らかに笑った。

「仲間? そんなもの何の役に立つ? 信じられるのは自分の力だ」

「けだ」

「純金鉱石に頼ってるやつがよく言うぜ」

ロサイルは剣を抜き、炎のチャージ状態から普通の状態に戻り、剣に引火させる。そして炎の手も発動させた。

バレンアも色々マジック道具を出し、戦闘準備をする。

それに対して教皇は何の準備も行わず、ただ立っているだけだ。

そしてロサイルは剣を教皇のほうに向けて言い放った。

「俺達が……未来を変える」

「そんなことお前如き出来るわけ……」

教皇が「ない」を言う前に大きな爆発が起きた。ロサイルはゆっくりと横を見る。するとバレンアがいくつもの爆弾を手に持ち、いきなり教皇に向かって投げたのだ。

(相変わらず不意に爆弾投げるんだな……)

ロサイルは心の中でそう思った。

煙がおさまると、そこには平然と立っている教皇がいた。

「……これくらいで倒せると思ったか？」

「思っわけないじゃん」

バレンアは普通の顔で答える。思っていないならなぜ投げたのか。

「まっ、宣戦布告っていうことで」

「おもしろい……」

こうして決戦が幕を開けた。

第80話 最終決戦の幕開け（後書き）

次話、シヨウザンは……

第81話 同期の格下

一方でシヨウザンとレミー。シヨウザンは剣を抜き、構える。それに対してレミーも剣を抜き、少し笑いながらシヨウザンに話しかける。

「本気で勝つ気なんだな。純金鉱石を取り込んだ私に」

「そのつもりだからここにいるんだが？」

「なめられたもんだな……」

そう言つとレミーは剣をしまい、両手を広げて言った。

「ハンデとして傷を負つてやる」

「なめられたもんだな、はこつちのセリフだよ。まあ、そういうことなら遠慮なく。後悔しても知らないよ？」

そう言つてシヨウザンは地面を思いつき蹴つてレミーのほうに突っ込んでいった。剣をしっかりと構え、そしてレミーの腹部を勢いよく斬つた。すると大量の血がレミーの腹部から溢れ出した。

思ったよりも威力が強かつたのか、レミーは少し表情を歪めた。

「……今度は私の番だ」

レミーはしまつていた剣を抜き、シヨウザンと同様に地面を思いつき蹴つて突っ込んでいった。勢いよく剣を振り上げ、シヨウザンの前に来たところで振り下ろす。

しかし、レミーに手ごたえは感じられなかった。

シヨウザンはあっさりとしてレミーの攻撃をかわしていたのだ。魔法を使つていないのもレミーだから分かる。

「……どうしてかわせた？」

「脳が破壊に侵食されすぎなんだよ。どういふ事かはネタバレになるから言わないけど」

「私は無敵だ。お前なんぞにかわせるはずなどないのだ！」

それに対してシヨウザンは鋭い眼差しで答えた。

「この世に無敵なんていない！」

その答えを聞いた途端、レミーはむきになってシヨウザンに襲い掛かった。剣を大きく振り上げ、勢いよく振り下ろす。するとレミーの目の前に赤色の世界が広がった。血だ。レミーは笑顔になり、シヨウザンに問いかける。

「どうだ！ やはり私は無敵だろう！」

「……それ、誰の血だと思う？」

シヨウザンは何一つ傷ついていない。むしろ目の前がふらふらするのはレミーのほうだった。

そう、その血はレミーの物だった。

「なっ……！！！」

驚くレミーを見て、シヨウザンは変わらない表情で言った。

「最強の技を出さないと、今の君は僕に勝てない」

それを聞いてレミーは悔しそうな表情を浮かべた。無敵だと思っていた自分が、同期の格下にこんなにもあっさりと不利な状況にされてしまったからだ。

腹部にかなり傷を負ってしまったレミーは、最強カードを出すしかなかった。

「いいだろう。出してやる。後悔しても知らないぞ？」

「そのセリフ、そっくりそのまま君に返すよ」

そして2人は最強の技を発動させた……

第81話 同期の格下（後書き）

次話、シヨウザンとレミーの因縁の対決が決着！

第82話 ライト・フォースと毒針

レミーは空に手をかざし、ロサイルに大怪我を負わせたあの技を発動させた。

「炎の流星！」

しかし、もうレミーに力が残っていないのか、「群」ではなく1つの大きな流星だった。それは流星群の時の1つより遥かに大きく、全てをそれに託したようだった。

「移動封印！」

そしてロサイルの時と同じように移動を不可能にし、確実に炎の流星を当てようとする。

シヨウザンもロサイルと同様にもがくことしか出来ずに、ただただ炎の流星が迫ってくるのを待っていた。

そして、炎の流星がシヨウザンに衝突する。

大きな爆発音が北デューナに響き渡り、誰もがそつちに目をやった。煙が収まる。そこにはシヨウザンの姿はなかった。レミーの勝利だ。

「最強の技を出させた事を後悔しているかな。天国で。いや、地獄か」

レミーはそう言って笑い続ける。やはり純金鉱石に敵う者はいない。それを証明して見せたのだ。

「後悔してないよ？」

「なっ………！！」

と、今回も思っていただけだった。

シヨウザンは全く傷ついておらず、それどころかレミーの後ろ側に回りこんできていた。

「どっして………」

「君だつて分かつてるだろ？ この移動封印の弱点を。移動封印は確かに便利で、戦いを有効に進める能力を持っている。だが、1つ弱点がある。熱に耐え切れないということだ。間近に炎の流星が迫ってきたとき、わずかな時間、逃げるすぎがある。それを、僕の必殺技、『ライト・フォース』でかわしたというわけさ」

「そんなはずはない！ あのエグレサツタの少年は、体に炎を纏つた状態でも移動封印は解けなかった！」

「自分だつて分かつてるんだらう？ 純金鉱石が抑えきれないのを」

「ぐっ……！」

「終わりだよ」

そう言つてシヨウザンは剣を高らかに上に挙げ、振り下ろし、レミーを斬つた。

大量の血が溢れ出し、レミーがその場で倒れる。

本当に証明したのは、強さは物では手に入らないというシヨウザンの答えだった。

一方でリキリヨウとミーモは、教皇の側近ランスと戦いを繰り広げていた。

しかし、2人の実力では敵うはずもなく、2人は劣勢に回つていた。

「……よくこんな実力でここに現れたな」

「……………」

ランスはその場に座り込み、リキリヨウたちを見た。

「無駄に体力使つてしまったな」

ランスは話にならない、と座つたのではなかった。少し体の調子がよくないらしく、それがだんだん悪化してきて座つたのだ。

「雑魚はこういう狡いマネが好きなんだな」

「生憎な……」

リキリヨウはあのガルナタスでの戦いの後、強くなるために研究をしていたのだ。

そこで見つけたのが毒針。相手がじわじわ弱っていくのならリキリヨウたちにとって勝機はある。ミーモとの連携で、戦闘開始直後に毒針を刺したのだ。

毒が回る前にやられてしまったが、今はランスの体中に毒が回っている。

「俺たちの目的は果たしたぜ……ロサイル、バレンア……」

こうしてリキリヨウたちも足止めに成功していた。

第82話 ライト・フォースと毒針（後書き）

次話、頂上戦争が本格的に開幕！

ロサイル・バレンシアVS教皇！

第83話 頂上決戦の幕開け

塔の頂上にやってきたロサイルとバレンア。バレンアが不意に投げた爆弾が宣戦布告となり、頂上決戦が幕を開けた。

ロサイルは炎のチャージ状態のまま教皇の方へと走り、いきなり後ろをとった。

「チャージングキック！」

教皇の首元をしっかりと蹴る。見事にクリーンヒットだ。

しかし教皇はびくともせず、平然とその場に立っている。

そしてロサイルの方に手をかざし、呪文を唱え、魔法を発動させた。

「バーストボム」

教皇の手のひらから大きな爆発が起こり、その爆発はロサイルを巻き込む。かなりの大きさの物なので、食らったら大きな傷を負うに違いない。

いきなりロサイルは大怪我を負ってしまい、地面に倒れた。

しかしその隙にバレンアは攻撃態勢に入っていた。自分の周りに多くのトランプカードを纏わせ、それを教皇に向かって発射する。

52枚のトランプが教皇に襲い掛かり、教皇の服を破った。

「……想像以上だな。本当に純金鉱石を取り込んでいる奴と戦えるとは」

教皇が破れた服の部分を見ながらそう言った。

「そこそこの力を出さなければすぐ終わらないそうだな」

教皇は球を取り出し、魔法を発動させる。

「コントロールジャグリング」

すると教皇の手の周りで球が浮き、自由に動き回っていた。

教皇はバレンアに攻撃するように命令し、球は命令どおりに動き、

バレンアに襲い掛かる。

しかしかわせないほどの速さではなく、バレンアはあっさりとかわしてしまった。だが、その場で球が光だし、その光はバレンアを包み込んだ。

「バーストボム」

気づくと教皇がバレンアの側にいて、ロサイルを倒してしまった爆発をバレンアにも食らわせてしまった。

バレンアもその大きな威力に耐え切ることは出来ず、地面に倒れてしまった。

その様子を見て教皇はポツリとつぶやいた。

「そう簡単には死んでくれないみたいだな」
「当たり前だろ」

ロサイルが後ろにいつの間にかいて、手をしっかり開いて教皇に向けている。

「炎龍波！」

レミーに大きな怪我を負わせた大技を教皇に思いつきり食らわせた。これもクリーンヒットだ。

さすがにこの技には耐え切れなかったのか教皇もかなり傷つき、地面に膝をついた。

「……やはりここまで来たことはあるな」

教皇の手は更に光だし、今までとは比べ物にならない技を発動させようとしていた。

「私も本気を出すとしよう。あなたたちを確実に殺すために」
そう言って教皇は大きな技を発動させた。

第83話 頂上決戦の幕開け（後書き）

次話、教皇の最強技に立ち向かえるか！？

第84話 飛び交った龍と不死鳥

教皇が技を発動させると、球が虹色に輝きだした。それ以外には特に変わった点は見られない。

さっきと同じように教皇がロサイルとバレンアに目掛けて球を投げかける。だが、先ほどとはスピードが桁違いだった。一瞬にしてロサイルとバレンアの元にたどり着いたのだ。

「いつの間に……」

「気をつけるロサイル！ 多分爆発だ！」

ずっと爆発系の技を発動させてきた教皇。バレンアがそう考えるのも仕方がない。

だが、爆発なんていう科学的なものではなく、本当に原始的、原点といわれるような攻撃方法だった。

虹色の球はそのままロサイルたちに直撃し、単なるパワーで押し切って壁に叩きつけた。凄まじい威力で壁自体の形が変わってしまった。壁に押さえつけられてしまった体は、まるでブーメランのように曲がってしまっていた。

「これが最強の技、レインボーレイディオ虹色球」

その威力に圧倒されてしまったロサイルとバレンアはその場で倒れる。ずきずきと痛むお腹を押さえながら。

しかしそれに耐えながら2人は立ち上がった。

「今度は俺たちの番だな」

「やってやるうよ。エグレサッタコンビの技！」

ロサイルは炎のチャージ状態に戻り、一気に教皇の後ろをとった。そこから通常状態に戻り、腕に炎を集中させ、一気に放つ。

「炎龍波！」

炎のドラゴンの衝撃波がロサイルの腕から放たれた。

しかし教皇は簡単にかわしてしまふ。これも2人にとっては作戦の範囲内だった。

炎龍波の先には大きなシルクハットを持って炎龍波を受け止めようとしているバレンアの姿があった。

そう、この技は炎の不死鳥だった。

炎の不死鳥はバレンアの大きなシルクハットに、絶大な火炎力を持ったものを入れ、撥ね返すことによって生じる技。

それを炎龍波でやるとなると、最強の威力の上に、塔中に不死鳥たちが飛び交う。そう、教皇の逃げ道がなくなる。

「撥ね返せ！ バレンア」

「炎の不死鳥、炎龍波SP！」

シルクハットに入り込んだ炎龍波を見事に撥ね返し、無数の不死鳥を塔に飛ばせた。

火炎力が強すぎたからか、不死鳥に変換し切れなかった炎龍波も不死鳥のように飛んでいる。

教皇に逃げ道はなく、ただ傷を負う瞬間を待つだけとなる。

そして、炎の不死鳥は教皇に襲い掛かった。

教皇もダメージを最小限に抑えようと必死で魔法を唱えていく。爆発で攻撃を防いだり、虹色球で一掃したり。しかしロサイルが出した大量の炎龍波によって、不死鳥は何度でもよみがえるどころか増加していつている。

次第に対抗できなくなっていく、教皇は大きなダメージを負っていった。色んなところが火傷と化していく。

これが2人に見えた完全勝利の時だった。

第84話 飛び交った龍と不死鳥（後書き）

次話もよろしくお願いします。

いつもみたいに予告したらネタバレに……

第85話 吸収(前書き)

皆様のおかげで、色んなIslands、PV100000達成しました！

超今更ですけどね(苦笑)

あと3話くらいで完結です。

それまでお付き合いください！

では85話どうぞ！

第85話 吸収

炎の不死鳥、炎龍波SPで、とうとう勝利を手にしたロサイルたち

と、話はうまくいくはずもなく、教皇は必死で立っていた。ポロポロになった体を、ポロポロになった自分で支えている。

「……ここまで追い詰められるとは……これは、予想外でした」
教皇もまさかの反撃に驚いた様子。炎の不死鳥は想像以上に教皇の体に響いていた。

しかし、教皇も諦めるはずもなく、虹色球を発射し、ロサイルたちを再び壁に叩きつけた。

「ちくしょう……またこれかよ！」

「大丈夫だロサイル！ この技は戦いの主導権を向こうに渡すだけで、致命傷にはならない！」

「それはどうかな……？」

バレンアたちの考えに対し、教皇は少しニヤツと笑いながら見ている。何かとっておきのもでも隠しているような……

それに気づいたときはもう遅かった。元々この球はあれだったことを。

「爆弾か！」

「ご名答」

虹色球は大きな爆発を巻き起こし、塔一面を包み込んだ。赤く染まった景色がバレンアたちの目の前に広がる。爆弾の一番近くにいる彼らが、一番大きなダメージを受ける。そんなのは誰にでも分かった。この爆発の大きさは尋常ではないことも見れば分かる。それから導き出せる答えも、誰でも分かる。

2人は死ぬ。

塔の屋根も貫き、壁も破壊され、頂上はとても殺風景になった。
冷たい風の音しか今はしない。

教皇は空を見上げながら、手を広げ、叫んだ。

「私は勝った！ 反逆者を殺し、世界を手に入れた！」

誰もが「そんな……」といった言葉を漏らさざるを得なかった。

ウィニングウインゲンツも、オーシャンアイランドも勝利したというのに、肝心のここで反逆組は敗れてしまった。

「私が新世界の王だ！」

誰もが肩を落としたそのとき……

「と、話はうまくいくはずもなく……」

誰もが一瞬目を疑った。なんとあの爆風の中、ロサイルたちは生き残っていた。教皇も目を何回も擦りながらこちらを見てくる。

「どうして……生きている!？」

「炎の手の原点に戻っただけだ」

ロサイルの手の炎は、今までの10000倍といってもおかしくないくらいに燃え盛っていた。もともと炎の手は、炎の量を多く吸収することでパワーアップをする。バレンアも無事なのは、咄嗟にバレンアのところに左手を持っていき、その炎をも吸ってしまったからだ。その炎は肩まで、いや、自分の体を超えてしまっくらいの高さがあった。

ロサイルはその手でグーパーを2回くらいし、何か決心がついたかのような表情を浮かべてからバレンアに話しかけた。

「この状態で炎龍波を放つても、多分教皇は倒れない。そこまで甘

い敵じゃないってことは俺達が一番分かってる。だから……」
それを聞いたとき、バレンアは少し涙を浮かべ、また、慌てて聞
いた。

「まさか……!!」

「ああ、放つしかねんだ……」

ロサイルは目を瞑りながら言った。

『体内炎龍波』

第85話 吸収（後書き）

次話、決心を決めたロサイル！ 激闘の行方は……？

第86話 新たな炎、『ロサイル』クロウズ

決心をしたロサイルはゆっくりと教皇に近づき、お互いに目を合わせた。

「ほう……まだ立っていられますか……」

「こっちのセリフだ……」

2人ともに力は残っておらず、立つのも苦しい状況だった。でも2人は立った。世界を変えるために……

ロサイルは体内に炎を走らせる。全身に炎が回り、ロサイルは真っ赤になった。これが体内炎龍波の姿だった。

また、その状況は全国生放送されていた。戦争が終了したウィニングウインゲンツやオーシャンアイランドにも流れていた。

ウィニングウインゲンツでその様子を見ていたヒヨウルスとファルダンは驚愕の表情を浮かべた。

「ヒヨウルスさん。あれって……」

「ああ。体内炎龍波だ」

体内炎龍波は自らが衝撃波となり、敵に突っ込む捨て身の技。それを教えたのは紛れもない祖父のヒヨウルスである。自分の孫が傷つくような技は覚えさせない性格のヒヨウルスだが、こうなるのを予想していたのか、そんな危険な技を孫に教えた。

「ヒヨウルスさん！ やはり教えない方が良かったんじゃない……」

「……………」

ヒヨウルスの目は語っていた。後悔はない、と。我が孫が世界のために命を懸けるくらいの人間になった。

「強くなつたな、ロサイル」

そうつぶやいて、それからテレビから目を放さなかった。

一方でリラは潜水艦でその状況を見ていた。同様に驚愕の表情を浮かべている。

それは体内炎龍波が捨て身技だと知っているからこそその表情だった。そしてヒョウルスたちと同様にロサイルの事を信頼しているからこそだった。

信じてるよロサイル。あんたは教皇を倒す。そして生きてエグレサツタ村に帰る。

リラもそう自分に言い聞かせ、北デューナに向かっていった。

また、塔の下にいるシウザン、リキリヨウ、ミーモ、ヴァームといったロサイルの仲間たち、そして側近のランスやもう力がなく動けないレミーも、誰もがそっちに注目した。

塔から出ている一筋の炎と虹色の光が北デューナを包み込んでいる。「ここは私の世界だ」と独裁政治の始まり、また、平和を象徴した優しい温かさ、どちらもを感じる炎と光だった。

そしてロサイルは放った。

自らが炎の衝撃波となり、教皇に突っ込んでいった。

何よりも速く、何よりも大きい、そしてみんなの思いを背負った衝撃波が発射された。それは何にも例えることの出来ない、「ロサイル＝クrouズ」という新たな物だった。

教皇も虹色球を変形させ、大きな盾を作るが、ロサイルはあっさ

りと突破する。そして、教皇に激突した。

大きな衝撃波が塔を包み込み、破壊する。今度の破壊はロサイルの敗北を意味するものではない。かといってロサイルの勝利を意味するものでもなかった。ロサイルたちの勝利だった。

ロサイルに悔いはなかった。たくさんの人に愛されて、その人たちのために命を懸けたのだから。そして

2人は死んだ。

第86話 新たな炎、『ロサイル』クロウズ』（後書き）

次話、ファスニード大陸大戦閉幕。英雄は果たして……

第87話 温かい残った物〜ファスニード大陸大戦閉幕〜

そこは真つ暗な世界だった。何とというか……初めのエグレサツタ村での戦いで海に沈められたように。底が見えない。でも海と違って上も見えない。横も前も後ろも、全てが真つ暗。黒一色。そんな中をロサイルは彷徨っていた。そしてロサイルは思った。ああ、俺死んだんだな、と。それと同時にまあいつか、という思いも芽生えていた。仲間のために命を懸け……いや、今回は全ての人のために命を懸けた。これで世界が変わればそれでいい。俺は安らかに眠れる。そういった言葉がロサイルの全身に駆け巡る。

.....

本当にこれで良かったのか？

生きてくはなかったのか？ 新しい世界で仲間と笑いたくなかったのか？ エグレサツタ村を笑顔の村にしたいはなかったのか？
そういった言葉も流れ始めた。

生きれるかはお前次第だ。お前がどれだけ愛されていて、信頼されていて、必要とされているかで、生か死かが決まる。もし、誰かが助けようとしてくれていいるのなら、一筋の白い光が見えるだろう。
お前は何を望む？

そんな質問がどこからか聞こえてくる。耳にしつかりと届いてくる。

「ロサイル」

誰かがロサイルの名前を呼ぶ。どこか懐かしさを感じる温かい声だった。そう、この声は……

「お父さん……？」

「久しぶりだな、ロサイル」

お父さんがそつとロサイルの頭に触れる。温かい温度を感じた。

「大きくなつたな。この間までバレンア君と鬼ごっこして遊んでいたのに。知らぬ間に世界の英雄になつてるんだもんな」

「……………」

「ロサイル、お前はどうしたい？ 生きたいか、死にたいか」

「……………どっちを望んだって死ぬ運命なんだ。決める必要なんてないよ……………もう、何も残っていないんだから……………」

「お前は目が見えないのか？ そこら辺にたくさん残っているよ」

「え……………」

「使命、権利、そして……………仲間がいるだろう？」

そついわれたとき、ロサイルは涙が止まらなかった。何でそんなことに気づかなかつたんだ、と、自分を悔しく思う涙なのか、まだ自分には待つてくれているものがたくさんある、嬉し涙なのか。ロサイル自身にもそれは曖昧だった。

「どうなんだ？ ロサイル。お前は十分に我慢して生きてきた。こんなときくらいわがまを言え」

ロサイルはお父さんの服をしっかりと握つて答えた。

『生きたい……………』

その答えにお父さんは笑顔を浮かべた。そして、真っ白な光のほうを指さした。

「なら行くんだ。みんなの所へ」

ロサイルは無言で頷き、白い光に包まれた……………

「ロサイル……………ロサイル……………」

声が聞こえた。お父さんの声ではない。懐かしさも感じない。か

とって新しさも感じない。でも温かさは感じる。ロサイルはゆくりと目を開けた。

「ロサイル！」

「シヨウ……ザン……」

目の前にいたのは異端審問官のシヨウザン。今となつては異端審問官でもないかもしれないが。

そのシヨウザンは真つ白な光をロサイルと教皇に当てていた。その光は紛れもない、真つ暗な世界で見た光だ。

「おーい、みんなー。ロサイルの目が覚めたぞー！」

シヨウザンが遠くの方に声をかける。すると、3人の人が嬉しそうな表情と安心した表情を交えてこちらにやってきた。

「本当だ！ 生きてるよロサイル！」

「はあ、良かったです……」

「やっぱ不死身だな、ロサイル」

その3人はもちろん、リラ、エリス、バレンアだ。一緒に世界を変えた大切な仲間だ。

それに続いてヴァーム、ミーモ、リキリヨウ、ピッチといった仲間もやってくる。

「みんな……」

ロサイルはそつつぶやく。するとシヨウザンがロサイルに話しかけた。

「みんなに感謝しろよ。お前を助けるために2日も寝ないで見守つて、手伝ってくれたんだ。エリスは目を覚ますのを信じて、すぐに安定した状態に戻るよう、全ての力を回復妖精に注いで、お前を回復している。俺が使つた『光の回復層』をライト・フォー・ス状態で、最大に威力を発揮するよう、バレンアたちは俺に力を注ぎ続けてくれた。仲間からの思いで生き返つたといつても過言じゃない」
それを聞いてロサイルはみんなの顔を見渡す。みんなが笑ってい

る。それこそ、後悔はないと、目が語っていた。

ロサイルのために力を注げたから

バレンアがロサイルに手をさしのべ、優しい声で言った。

「帰ろう、エグレサツタ村へ」

「……………ああ」

ロサイルは生き返ってから初めて笑顔を浮かべ、そう答えた。

リラは乗ってきた潜水艦でオーシャンアイランドへ。エリスはスノーモービルでウイニングウインゲンツに戻ってから、陰陽の隠れ里付近行きの連絡船で陰陽の隠れ里へ。ヴァームたちも連絡船でガルナタスへ。ロサイルとバレンアはウイニングウインゲンツにエリスの後ろでスノーモービルに乗せてもらい、ヒョウルスに挨拶してからエグレサツタ村へと帰っていった。

シヨウザンは、まだやり残したことがある、と言ってその場に残っていた。ある人物と話すためだ。

「どうして、私を助けた？」

「今ここであなたに死なれたら意味ないだろう」

「どういうことだ？」

「あなたは確かに悪いことをした。許せないことをした。だけど、俺にとっては大切な家族でもあったんだ、あんたは」

「……………」

「罪を償って帰ってきなよ。そして、自分のやったことがどれだけ愚かだったか知るがいいよ」

「……………感謝はしないぞ、シヨウザン」

「最初からされるつもりはないよ。教皇様」

そう言ってシヨウザンも帰るべき場所に帰っていった。

こうして、平和な世界が戻ったのである。

英雄の名前は数え切れない人数となってしまうため、ざっくりと歴史上にはこう書かれる。

平和を愛する人々

第87話 温かい残った物〜ファスニード大陸大戦閉幕〜（後書き）

次回、最終88話です！
よろしくお願ひします！

最終88話 エピローグ あれからの世界

あれからしばらくの時間が経ち、ロサイルとバレンアはエグレサツタ村で暮らしていた。

辺りはまだただの焼け野原だが、徐々に復興へと向かっている。現在の村民は4人。1人目はロサイル、2人目はバレンア。その他に2人の人がエグレサツタ村にやってきた。

「はあ、懐かしいね、畑仕事」

「バレンア平和そうな顔をしてるな……」

「いや、実際平和だからね」

「まあ、そうだが」

2人は畑仕事をしていた。村というだけあって、畑は大量にあるため、まだ焼かれていない場所がいくつかあったのだ。そこで2人は野菜を育てて、自分で食べる分と出荷する分を作って生活していた。

「それにしても、冬のエグレサツタ村はやっぱり寒いな」

エグレサツタ村には、ファスニード大陸大戦終了後、初めての冬が訪れていた。それにどこか懐かしさを感じる2人だった。

雪は今日降るんじゃないかというラジオで聞いた予報。それを信じて2人は子供のように雪が降るのを待っていた。

「2人とも、ご飯できたよ」

1人の女性がロサイルたちに声をかけた。そう、この人が3人目の村民だ。

「はいはい、今行く！」

「ナージャさんの料理はおいしいから、いくらでも食べられるよね」

その女性はナージャだった。フラージャの町にいたエグレサツタ村の生き残りの人だ。ファスニード大陸大戦終了をきっかけにエグレサツタ村に戻ってきたのだ。

そして、もう1人が……

「お疲れ。手を洗ってから食べなよ」

「あゝ、お前が焼きまくったせいで復興作業が大変だゝ」

「だから……いつもすまないと言っているだろう」

なんともう1人の村民はショウザン。自ら異端審問官を辞職し、エグレサツタ村の復興作業を手伝っている。主に出荷業者とのやり取りをやっている。

『いただきまーす!』

全員で声を揃えて言う。材料が足りていないので、白米と大根スーブが昼食だった。

本当に平和に戻った世界を人々は堪能している。

何と新国王はヒョウルスに抜擢され、平和を第一とした世界が作り上げられている。

昼食を食べ終わったとき、連絡船がエグレサツタ村に止まった。

いつもは誰も降りてこないのに、2人の女性が降りてきた。そして、ロサイルたちの家に向かっていく。

「やっほー！ 元気にしてる？ ロサイル、バレンア君！」

「リ……リラ……」

「何ロサイル。その『うわ、来たよこいつ』といった表情は？」

何とリラがやってきたのだ。その隣にいるのはエリスだった。

ロサイルはリラに向かって突然言い出した。

「うわ、来たよこいつ」

「デンジャーストリー……」

「ちよつと待てええ！ これ以上破壊されたら復興できないだろうがあああああ！」

「まっ、冗談だけどね」

ロサイルは落ち着いてその場に座った。そしてバレンアが聞き出す。

「それよりどうしたの？ わざわざエグレサッタ村に」

「はい、ちよつと来てみたくなっただけです」

エリスがそう答えた。それだけで来るなよ、とロサイルはリラに對しては思った。

オーシャンアイランドはあれから変わらず、平和に過ごせているらしい。活発なバザールに、温暖な気候。潮風が気持ちいい南国の樂園。ロサイルはあの気持ちよさを忘れたことはない。

陰陽の隠れ里もエグレサッタ村と同様に復興作業が行われている。今はエリスとファルダンが住んでいるらしい。

どこもかも平和を胸に、進んでいるようだ。

冬、エグレサッタ村。今日も雪は降らず、快晴です。

その方が気持ち暖かく感じます。

『今日も世界は平和です』

最終88話 エピローグ

あれからの世界（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！

この作品は僕にとって初投稿作品ということで、拙い部分も多数あったと思います。

ですが、とても楽しく書くことが出来ました。

これも、今までに感想をくれた、K I N U K A Z U君、ライナ・リユート君、麟龍鳳先生、ユツキー先生、鍵猫君、紅月 空君といった方のアドバイスや楽しみにしているといったメッセージのおかげです！

ユツキー先生に至ってはレビューまでしていただき、アクセス数、お気に入り登録数が急激にUPしました。

そして、最後に。

色んなI s l a n d sを応援してくれた皆様に感謝をしたいと思いません。

ありがとうございました！

また次回作にも来ていただけると嬉しいです！

では皆さん、さようなら！

本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3062q/>

色んなIslands

2011年11月19日22時03分発行